

187

17

国文中の
仏教文学
全

084895-000-2

187-17

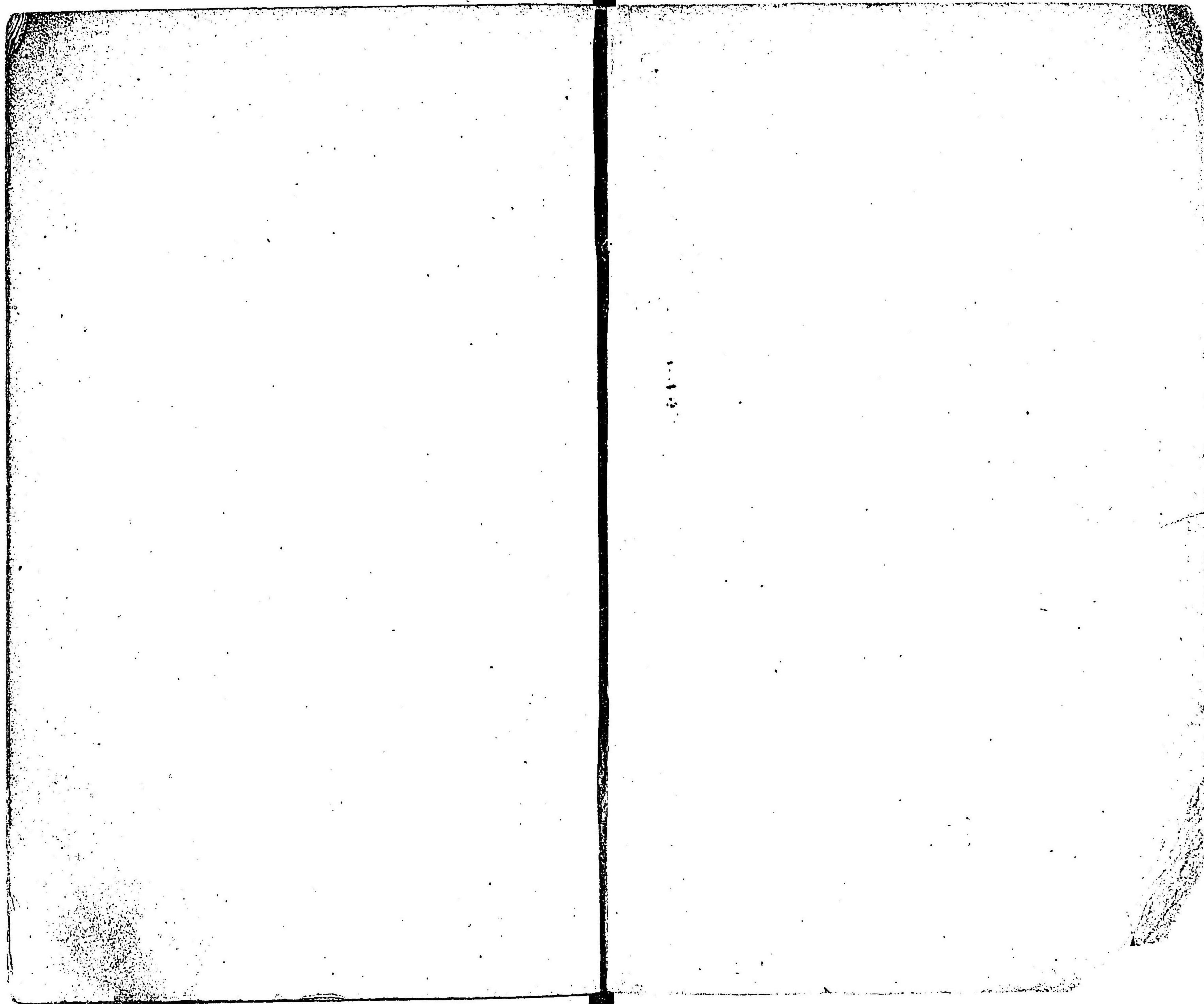
国文中の仏教文学

織田 得能/編

M32

DBB-0122





國文中の佛敎文學序

佛敎の東洋各國の文化に偉大の關係を有するとは何人も不_レ定_レせざる所なるべきも、其特に我邦の文化に非常の影響を及ぼし、とに至りては、世人或は十分に認定せざるものあるが如し、若し佛敎の弊害を言はば、弊害亦有り、然れども唯々其弊害のみを見て、總べて其有益なる結果を度外視するが如きは、決して公平無私と謂ふべからず、徳川時代の儒者の林羅山、山崎闇齋、伊藤仁齋、物徂徠等を始めとし、多くは佛敎を排斥せり、殊に中江藤樹の如きは、佛敎を論じて「佛敎始まりて后、天下に於て何の益あるや、害はあげて數へ難し、益は一つもあるなし」と云へり、余好んで佛書を讀むと雖も、固より佛者にあらず、佛敎の弊害果して那邊にあるかを知らざるにあらず、然れども佛敎が何等の益をも爲さざりしとは言はざるなり、佛敎の我邦の思想界を豊富にし、又深遠にせり、儒敎の如き、本と佛敎の刺激を受けて、幽妙なる指趣を有するに至れるも



のにて、其幽妙なる指趣を有せる宋明の理學、我邦に入り來たりて、忽ち思想界に一大刷新を加へたり、故に徳川時代の儒者が崇奉せる儒教は、佛教の刺激によれるもの多かりき、又神道の教義の如きも、佛教より得來たるもの、少しとせず、之れを要するに、佛教は其東漸の際に當りて、新奇の觀念を傳播して、我邦の思想界を擴充せしや、疑なきなり、然れども、此事たる、無形の範圍に屬するを以て、世人或は之れを信ずること能はざるべし、若し夫れ美術に至りては、佛教の輸入と共に發達せしこと、史的事實の證明する所にして、何人も否定すること能はず、我邦人が海外に向ひて誇るべき繪畫、雕刻、建築の類、佛教に起因せざるもの、殆んど稀なり、殊に我邦の文學の如きハ、佛教の影響を受けて、一種言ふべからざる趣味を帶ぶるに至れり、佛教豈に何等の益をも爲さざりしと謂ふを得んや、然るに我邦の文學が佛教の影響を受けたるが爲め、廣く佛書を涉獵して、佛教の旨意に通曉するにあらざれば、其妙處を解すること、全

く不可能の事に屬す、然るに近時學ぶべき學科の次第に増加するに従ひ、個人にして國文と佛教とを兼ね修むること、極めて困難となれり、若し今日にありて能く此困難を除去するの舉に出づるものあらば、國文に志あるもの、誰れか之れを歓迎せざらんや、頃ろ織田得能氏我邦の歴史物語、謠曲等に於て最も佛教の旨意を含有せる處を斷章取義し、集めて一書となし、名づけて「國文學中の佛教文學」と云ふ、國文に志あるもの一たび此書を講究せば、其妙處を理會するに於て復た遺憾なかるべし、果して然らば、此書の我邦の文學を裨補する、豈に鮮少なりとせんや、印刷成るに及んで、聊か余の見る所を述べて以て序となす、

明治三十二年二月二十五日

井上哲次郎識

國文中の教佛文學

目次

天地開闢	其 一	神皇正統記	一	頁
天地開闢	其 二	水鏡	五	頁
須彌山	其 一	神皇正統記	八	頁
須彌山	其 二	謠曲歌占	十	頁
釋尊出現	其 一	近松聖德太子繪傳記	十一	頁
釋尊出現	其 二	太平記	十四	頁
八相成道		榮花物語	同	頁
五時八教		謠曲大會	十五	頁
法華の功德	其 一	平家物語	十六	頁
法華の功德	其 二	榮花物語	同	頁
法華の功德	其 三	謠曲身延	十九	頁
法華の功德	其 四	謠曲愛宕空也	同	頁
法華の功德	其 五	謠曲鶉飼	二十	頁

法華の功德	其六	謠曲梅枝	二十一頁
法華の功德	其七	謠曲海士	二十二頁
法華の功德	其八	謠曲現在七面	二十三頁
法華八講	其九	八犬傳	二十四頁
法華三十講		源氏物語	二十八頁
法華轉讀		源平盛衰記	二十九頁
天臺の血脈		源平盛衰記	三十頁
顯密の諸教		神皇正統記	三十二頁
禪	其一	鴉鷺合戰物語	三十三頁
禪	其二	謠曲放下僧	四十一頁
淨土の教	其一	源平盛衰記	四十二頁
淨土の教	其二	鴉鷺合戰物語	四十三頁
淨土の教	其三	三部鈔	四十四頁
淨土の教	其四	謠曲柏崎	同

淨土の教	其五	謠曲當麻	四十七頁
淨土の教	其六	謠曲土車	同
天王寺		謠曲弱法師	四十八頁
誓願寺		謠曲誓願寺	四十九頁
梵天宮		近松聖徳太子繪傳記	五十頁
高野山	其一	太平記	五十三頁
高野山	其二	謠曲高野物狂	五十四頁
比叡山	其一	源平盛衰記	五十五頁
比叡山	其二	謠曲高野物狂	五十七頁
熊野		源平盛衰記	五十九頁
大日如來		榮花物語	六十三頁
彌陀如來		榮花物語	六十六頁
藥師と觀音		榮花物語	六十八頁
五大尊		榮花物語	七十頁
八幡大菩薩		神皇正統記	同

生身の普賢	十訓抄	七十一頁
佛陀の三身	水鏡	七十三頁
神明の内證	太平記	七十四頁
神明の内證	太平記	七十六頁
勸進帳	平家物語	七十七頁
表白	源氏表白	七十九頁
表白	八犬傳	八十二頁
消息	源氏物語	八十五頁
穢土を厭ひ淨土を欣ぶ其一	唐物語	八十七頁
穢土を厭ひ淨土を欣ぶ其二	海道記	八十八頁
穢土を厭ひ淨土を欲ぶ其三	海道記	八十九頁
穢土を厭ひ淨土を欣ぶ其四	三部鈔	九十頁
迷悟一心	海道記	九十一頁
三界一心	方丈記	九十二頁
無常	平家物語	九十三頁

無事	方丈記	同
無常	謠曲檜垣	九十四頁
無常	謠曲鐘馗	九十五頁
無常	謠曲紅葉	同
無常	謠曲安達原	九十六頁
無常	鴉鷺合戦物語	同
輪廻	謠曲春榮	九十七頁
輪廻	謠曲江口	同
輪廻	謠曲揚貴妃	九十八頁
因果の理	海道記	九十九頁
因果の理	鴉鷺合戦物語	同
心の鬼	謠曲歌占	百
心の鬼	海道記	百二頁
心の暗	近松曾根崎心中	百五頁
心の暗	近松雨の網島	百六頁

心の暗	其三	八犬傳	百九頁
初夜の念佛		榮花物語	百十頁
後夜の懺法		榮花物語	百十二頁
中陰の法事		源氏物語	百十五頁
最後の佛名		源氏物語	百十六頁
佛堂の供養		源氏物語	百十八頁
賀壽の法事	其一	源氏物語	百二十二頁
御修法		源平盛衰記	百二十三頁
御修法	其二	源氏物語	百二十五頁
道場		榮花物語	百二十七頁
修學		榮花物語	百二十七頁
歌は多羅尼	其一	諸曲卷絹	百二十八頁
綺語		夢想兵衛胡蝶物語	百三十一頁
綺語	其二	近松曾我五人兄弟	百三十二頁
綺語		近松曾我虎か磨	百三十四頁
	其三		百三十五頁

綺語	其四	近松賀古教信七墓廻	百三十六頁
方便の殺生		諸曲熊坂	百三十九頁
煩惱即菩提	其十	秋夜長物語	百四十頁
諸法實相		鴉鷲合取物語	同
行脚僧		諸曲卒都婆小町	百四十一頁
山伏		諸曲安宅	百四十二頁
行者		八犬傳	百四十三頁
出家		諸曲高野物語	百四十九頁
菩提心	其一	方文記	百五十一頁
菩提心	其二	海道記	百五十二頁
菩提心	其三	徒然草	同
菩提心	其四	諸曲東岸居士	百五十三頁
菩提心	其五	源氏物語	百五十四頁
菩提心	其六	八犬傳	百五十六頁
あはれ	其一	源平盛衰記	百五十六頁

あはれ	其二	太平記	百五十九頁
山門の法滅		平家物語	百六十一頁
奈良の劫火		平家物語	百六十三頁
佛のかたみ		謠曲舍利	百六十六頁
末法の功德		榮花物語	百六十七頁
忠孝		平家物語	百六十九頁
惡逆	其一	保元物語	百七十三頁
誠	其二	十訓抄	百七十五頁
誠	其三	十訓抄	百七十六頁
誠	其四	徒然草	百七十七頁
誠	其五	徒然草	百八十頁
誠	其六	徒然草	百八十一頁
誠	其七	徒然草	同
誠	其八	三部鈔	百八十三頁
			百八十四頁

法王の灌頂		源平盛衰記	百八十五頁
中將の出家		源平盛衰記	百八十九頁
臨終の覺悟		源平盛衰記	百九十三頁
臨終の懺悔		平家物語	百九十七頁
臨終の引導	其一	源平盛衰記	百九十九頁
臨終の引導	其二	平家物語	二百三頁
死後の引導		榮花物語	二百五頁
菩提の種		源平盛衰記	二百七頁
菩提の花		海道記	二百十頁
浄土の樂		三部鈔	同
浄土の悟		三部鈔	二百十二頁
惣計	百二十九		

國文中の佛教文學

織田得能編集

○天地開闢 其一

同世界の中なれハ。天地開闢の初は。いづれもかはるべきならねど。三

國の説各異なり。天竺の説には。世の始まりを劫初と云ふ。初に成住壞空の四あり。各廿の増減あり。

中劫と云ふ。三劫を合はせて一劫と云ふ。廿の増減を一劫と云ふ。光音と云ふ天衆。空中に金色の雲を起し。梵

天に遍布す。即大雨を降らす。風輪の上に積りて水輪となる。増長して天

上に至れり。又大風ありて沫を吹き立て。空中に擲け置く。即大梵天の宮

殿となる。其水次第に退下して。欲界の諸宮殿。乃至須彌山。四大洲。鐵圍山

を成す。かくて萬億の世界同時になる。是を成劫と云ふ。此の萬億の世界を三千大世界と云ふ。光

音の天衆下生して次第に住す。是を住劫と云ふ。此住劫の間に二十の増

減あるべしとぞ。其初めには。人の身光明遠く照して飛行自在なり。歡喜を以て食とす。男女の相なま。後に地より甘泉涌出す。味酥蜜の如し。或は地味と云ふ。是をなめて味着を生ず。仍りて神通を失ひ。光明も消えて。世界大に暗くなりぬ。衆生の報しからしめければ。黒風海を吹て日月二輪を漂出す。須彌の半腹にれきて四天下を照さしむ。是より始て晝夜晦朔春秋あり。地味に耽りしより顔色かじけ衰へき。地味又うせて林藤と云ふ物あり。或は地皮とも云ふ。衆生又食とす。林藤又うせて自然の秬稻あり。諸の美味を備へたり。朝にかれは夕に熟す。此稻米を食せしにより。身に殘穢出來ぬ。此の故に始めて二道あり。男女の相各別にして。終に媾欲のわざをなす。夫婦と名け。舍宅を構へて共に住みき。光音の諸天後に下生する物。女中の胎中に入りて。胎生して衆生となる。其後稻米生せず。衆生愁へ嘆きて各境を分ち。地田に種を施し植ゑて食とす。他人の田種をさへ奪ひ盜む者出來て互に打ち争ふ。是を決する人なかりしかば。衆共に計らひて一人の平

等王を立つ。名づけて刹帝利と云ふ。田主と云ふ心なり其初の王を民主と號しき。十善の正法を行ひて國を治めしかば。人民是を敬愛す。閻浮提の天下豐樂安穩にして。病患及ひ大寒熱ある事なし。壽命も極めて久しく無量歲なりき。民主の子孫相續して久しく君たりしが。漸く正法も衰へしより。壽命も減して八萬四千歳に至る。身の長八丈なり。其間に王ありて。轉輪の果報を具足せり。先天より金輪寶飛ひ降りて王の前に現在す。王出で給ふ事あれば。此輪轉して行く。諸の小王皆迎へて拜す。敢て違ふ者なし。即四大洲に主たり。又象馬珠玉女居士主兵等の寶あり。此七寶成するを金輪王と名づく。次に銀銅鐵の轉輪王あり。福力の不同によりて果報も次第に劣れるなり。壽量も百年に一年を減じ。身の長も同じく一尺を減じてけり。百二十歳に當れりし時。釋迦佛出て給ふ。或は百歳の時共云ふ。是より先に三佛山給ひき。十歳に至らんころほひ。小の三災と云ふ事あるべし。人種殆ど盡きて唯一萬を餘す。其人善を行ひて。又壽命も増じ。果報も進みて。二萬歳に至らん時。鐵

輪王出て南一洲を領すべし。四萬歳の時。銅輪王出て東南二洲を領す。六萬歳の時。銀輪王出て東西南三洲を領し。八萬四千歳の時。金輪王出て、四天下を統領す。其報上にいへるか如し。彼の時又滅に向ひて彌勒佛出で給ふべし。八萬歳の時共云ふ。此の後十八箇の増減有るべし。かくて大火災と云ふ事起りて。色界の初禪梵天まで焼けぬ。三千大千世界同時に滅盡する是を壞劫と云ふ。かくて世界虚空黒雲の如くなる是を空劫と云ふ。かくの如くする事七箇の大劫を経て。大水災あり。此度へ第二禪まで壞す。七々の火災七々の水災を経て。大風災ありて。第三禪天まで壞す。是を大の三災と云ふなり。第四禪以上に内外の過患ある事なし。此四禪の中に五天あり。四は凡夫の住所。一は淨居天とて證果の聖者の住所なり。此淨居を過ぎて摩醯首羅天王の宮殿あり。大自在天といふ。色界の最頂に居して大千世界を統領す。其天の廣さ彼の世界に亘れり。下天も廣狹に不同あり。初禪の梵宮は一四天下の廣さなり。此の上は無色界の天有り。また四地を分てりといへり。是等の天は小大の災に

逢はずといへども。業力に際限ありて。報盡きなば退没すべしと見えたり。神皇正統記

○天地開闢 其二

さてはこの世のありさまのみならず。内典の方などもうとくこそはねをすらぬ。はしぐを申さむ。生死を車の輪の如くにして。はしまりてはをはり。終りては始まり。いつをはじめ。いつををはりといふ事あるべからず。まづ劫のありさまを申して。世のなりゆくさまはかくぞか。しと知らせ奉らむ。人の命の八萬歳ありしが。百年といふに一年の命のつゞまりくして。十歳になるを一の小劫とは申すなり。さて十歳より復百年に一年の命をそへて八萬歳になりぬ。これをも一の小劫と申す。この二の小劫を合せて一の中劫とは申すなり。さて世のはじまる時をば成劫と申して。この中劫と申しつるほどを二十すくすなり。そのはじめの一劫のほどをつやくと世の中なくて空の如くにてありしに。山河など

出てきてかく世間の出でくるなり。今十九劫には極光淨といふ天よりひとりの天人生れて。大梵王となる。その後次第にやうくしもさまざまに生れて。次に人生れ。餓鬼畜生いできて。はてに地獄は出でくるなり。かくて成劫二十劫はきはまりぬ。世間も有情も成り定るによりて成劫とは申すなり。次に住劫と申して又二十の中劫のほどをすぐるなり。但はじめの一切は。命次第に劣りのみして増ることなし。されば住劫のはじめの人の命は。八萬歳にあらで無量歳にて。それより十歳までなるなり。されどもほどの経る事は一の中劫のほどなり。さて第二の劫より先に申しつるやうに八萬歳より十歳になり。十歳より八萬歳になり。劫ごとにかく侍るなり。さて第二十の劫は十歳より八萬歳まで増ることのみありて劣ることなし。これも過ぐるほどは一の中劫なり。これは天より地獄まで成劫にいできとゝのほりて。有情のあるほどなり。さて住劫とは申すなり。次に壞劫と申してこのほどまた二十の中劫のほどなり。初

の十九劫には地獄よりはじめて有情みなうせぬ。このうすと申すは。いづこともなく失せぬるにはあらず。然るべくして天上へ生るゝなり。但地獄の業なほつきぬ衆生をば。こと三千界の地獄へはしようつしやるなり。かくて第二十の劫に火いできて。しも風輪とて。風吹きはりたる所。うへより梵天まで。山河も何もなく焼け失せぬ。かくやぶれぬれば壞劫とは申すなり。次に空劫と申して又二十の中劫のほどを。世の中は何もなく大空の如くにて過ぐるなり。空くければ空劫と申すなり。この成住壞空の四劫を経るほどは。八十の中劫を過しつるぞかし。これを一の大劫とは申すなり。かくて終りては始まり。始まりては終りして。いつをかぎりといふ事なし。かくの如くして水風火災などあるへし。事長ければ申さず。この住劫と申しつるに。佛は世に出で給ふなり。その中に人の命まさりざまなるをりは。樂み奢れる心のみありて。教へに叶ふまじければ出で給はず。命やうくられちつかたに物のあはれを知り。教事に

もかなひぬべきほどを見計ひて出で給ふなり。この住劫にとりては。はじめ八劫に佛出で給はず。第九の滅劫に七佛の出で給ひしなり。釋迦の出で給ひしは人の命百歳の時なれば。第九劫のむげに末になりたるにこそ。第十の滅劫のはじめに彌勒はいで給はむするなれ。第十五の滅劫に九百九十四佛出で給ふべし。かくの如く世に隨ひて人の命も果報もなりまかるなり。大方はさる事にて。この日本國にとりても。又なかなか世あがりてハ事定らず。かへりてこの頃に似たる事も侍りき。佛法わたり因果わきまへなどしたるより。やうくしづまりまかりしなごりの。また末になりて。佛法もうせ世のありさまもわろくなりまかるにこそ。あるべきことわりなれば。よしあしを定むべからず。偏にあらぬ世になるにやなどあざむき思ふべからず。永鏡

○須彌山 其一

凡内典の説に須彌といふ山あり。この山を廻りて七の金山あり。其中間

は皆香水海なり。金山の外に四大海あり。この海中に四大洲あり。洲と云ふは又二の中洲あり。南洲をば瞻部と云ふ。又閻浮提と云ふ。同じ詞の轉なり。是は樹の名なり。南洲の中心に阿耨達と云ふ山あり。山の頂に池あり。阿耨達之には無熱と云ふ。外書に昆崙といへるは即此山なり。池の傍に此樹あり。めぐり七由旬。高さ百由旬なり。一由旬とは四十里なり。六尺を一歩とす。三百六十歩を一里とす。此里をもつて由旬を計るべし。此樹洲の中心にありて最も高し。依て洲の名とす。阿耨達山の南は大雪山。北は葱嶺なり。葱嶺の北は胡國。雪山の南は五天竺。東北によりては震旦國。西北に當りては波斯國なり。此瞻部洲ハ縦横七千由旬。里を以て算ふれば二十八萬里。東海より西海に至るまで九萬里。南海より北海に至るまで又九萬里。天竺は正中によれり。依りて瞻部の中國とす。地のめぐり又九萬里。震旦廣しといへども。五天竺にらぶれば。一邊の小國なり。日本は彼土を離れて海中にあり。南部の護命僧正北嶺の傳教大師は。中洲なりと記されたり。然らば南洲と東洲との中なる遮摩羅と云ふ洲なるべきにや。華嚴經に東北の海中に山あり。金剛山とい

ふとあるは。今の倭の金剛山の事なりとぞ。さればこの國は天竺よりも震旦よりも東北の中にある別洲にして。神明の皇統を傳へ給へる國なり。(神皇正統記)

○須彌山 其二(度會の神職。父を尋ねある。里人の歌占を判する場。)

さらば歌占を引き申し候ふべし。やすき間の事。一番に手に當りたる短冊の歌を遊ばされ候へ。考へて參らせ候べし。承り候。教にまかせ短冊を取り上げ見れば。何々北は黄。南は青く。東白。西くれなゐの蘇命路の山かやうに見えて候。須彌山を讀みたる歌にて候。是は父の事を御尋ね候ふな。さん候親にて候ふ者。此程所勞仕り候ふ間。生死の境を尋ね申し候ふ。心得申し候ふ。委しう判じて聞かせ申さう。夫れ今度の所勞を尋ねるに。邊涯一片の風より起つて。水金二輪の重結に顯はる。夫れ須彌は金輪より長して其丈十六萬由旬のいきほひ。四州常樂の波にうかび。金銀碧瑠璃玻璃。迦寶の影。五重色空の雲に移る。されば須彌の影うつるによつ

て。南膽部州の草木みどりなりといへり。扱こそ南は青くとは讀みたれ。こゝに又父の恩の高きこと高山千丈の雲も及びかたし。されば父へ山染色とは風病の身色。しかも生老病死の次第を取れば。西くれなゐと見えたるは。命期六交の滅色なれば。あう是は難義の所勞なれども。こゝに又染色とは。聲を借りたる色にて。文字には蘇命路なり。よみがへる命の路と書きたれば。誠に命期の路なれども。又染色に却來して二度こゝに蘇生の壽命の種となるべき歌占の詞。頼もしく思し召され候へ。(謠曲歌占)

○釋尊出現 其一

如是我聞く。九土區々に別れ。四生俗を異にす。長へに火宅に遊ひ。共に苦海に沈む。故に能仁大師法界を總て我智とし。虚空を委して我身とし。一切種智の光明に蠢々たる懷生。嚙々たる喞類。草木國土。皆悉成佛の氣を與へ。六通自在の神足に。魔軍筵の如く捲て。現世安穩の益を施し。三千世

界三世の衆生。惠日に照す大恩教主。福量なしかや。天の羽衣。まれに來て撫ども盡ぬ大石の住劫の末西域の皇帝。民主王より八萬餘代。師子頗王の御子。淨飯大王と申奉り。五天竺に君として。萬機を御心に任せ給へども。御即位あつて三十餘年。世繼の太子在さず。善覺大臣の姫君。姉に橋曇彌。妹に摩耶夫人。一二の后に立て給ひ。媚を争ひ。艶を粧ひ給ふ。中にも御妹の摩耶夫人。去年七月十五夜の夢の瑞。白象胎内に飛入ると御覽じて。御懷妊の月重れば。大王の悦ひ。皇太后宮の宣旨下つて。第一の后に立昇り。威勢といひ位といひ。優を猜む。姉后。表面は清き心の水底に逆巻く。順悲の波。起居に募る惡心に。上下の臣下。三千の女御。思ひくの負鼠々々に。摩耶夫人方。橋曇彌方と。御殿二つ。片破れ月の光りを挑み競ひけり。

年月の行足迅き甲寅御産に當る卯の花月。耆婆の教へに隨ひ。歡喜園に産屋を構へ。百花を以て飾り葺き。夫人の御座は。百重錦。八百重の綾。吉祥

女を先として數千人の官女達。天のひんづ。かうがいの杯。千環萬環の寶を捧げ。月卿雲客残りなく。賤山樵に至るまで。長棹に。いろくの花を翳の捧げ物。夫人を慰めまいらす。末代三國。凡て卯月八日の花供養。佛法流布の因縁なる。御快げに摩耶夫人。なう方々世の人の懷妊は。十月の苦み種々なりと聞けるに。不思議や我胎内に。王子宿らせ給ひても。常より心涼しくて。身も軽く覺ゆる上。一天下の萬民の慰め勇むる嬉しさに。殊に此花の色香すくれて。咲たるは。無憂樹といふ木にて。文字には憂ひ無しと書く。一枝折りて。王子の無憂を祈らんと。右の手を舉げ。枝に取付き給ふ時。八日の朝日御身を照し。天に音樂異香。薰じ。夫人の右脇蓮の開く如くにて。降誕あるぞ有難き。五色の蓮花湧出して。太子を居ゑ奉る。天津繪の妙色衣。御腰に纏れて。三十二相の御容。三千の官女。五千の侍從。聲々に。御産平安。世繼の太子御誕生。萬々歳と呼ぶ聲。玉宮響き渡りけり。御母夫人は。嬉しさの餘りて。心の疲れかや。無常を示す方便かや。あつとばか

りに御色變り。萎める花と消え給ふ。これはくど宮女達抱き起し呼び助け。御藥種々の看病更に甲斐もなく。終に絆断れ給ひけり。太子は圓智明らけき御顔。七覺を表して七歩み。左右の御手を獅子吼して。天地に指し微妙の御聲。天上天下唯我獨尊無量の生死今に於て盡せりと宣ふ。
近松釋迦如來誕生會

○釋尊出現 其二

人壽百歳の時。釋尊中天竺摩竭陀國淨飯王宮に降臨し給ふ。御歳十九にて。二月上八の夜半に王宮を遁れ出で。六年苦行の雪山に身を捨て。寂場樹下に端坐し給ふ。又六年の後夜に正覺をなし。後。頓大三七日。偏小十二年。盡淨虛融の演説三十年。一實無相の開顯八箇年。遂に滅度を拔提河の邊雙林樹下に唱へ給ふ。(太平記)

○八相成道(法成寺金堂の扉の面)

扉押し開きたるを御覽すれば。八相成道をか、せ給へり。釋迦佛の摩耶

の右脇よりうまれさせ給ひて難陀跋難陀二つの龍王よりして湯あひし奉りけるより始めて。悉達太子と申して淨飯王宮にかしつかれ給ひしに。御出家の本意深くはしますを。父の王これをいといみじき事に思して。隣の國々の王のひとつむすめをとり集めて。五百人添へ奉り給へりけれど。聊それれに御心もとまらねば。四方の園林を見せ奉らんと思して。百官ひきて出し奉らせ給ふに。淨居天變じて。生老病死を現じて見え奉り。御年十九の壬申の年。二月八日の夜中に出て給ひて。出家せさせ給ひて。御厩の御馬をいたづらに車匿が率て取り参りたれば。三夫人をこらの采女。宮の内ゆすりて泣き。また降魔成道轉法輪。切利天にのぼり給ひて。摩耶を教化し奉り給ふ。娑羅雙樹の涅槃の曉までのかたをかきあらはさせ給へり。(榮花物語)

○五時八教

それ一代の教法は五時八教をけづり。教内教外をわかたれたり。五時と

云つは。華嚴阿含方等般若法華。四教とは是れ藏通別圓たり。遮那教主の秘藏を受け。五相成身の峯を開きしより以來。誰れか佛法を崇敬せざらん。實に有り難き御法とかや。謠曲大會

○法華の功德 其一

それ法華は三世の諸佛の出世の本懷。衆生成佛の直道なり。一念信解の功德は五波羅密の行にも越え。五重展轉の隨喜の功德は八十箇年の布施にも勝れたり。平家物語

○法華の功德 其二

皇太后宮御堂の女三條の后の女房達。無量壽院に如法經を供養の時。講師の說法。

事どもまたてたるきはに。講師まおりたり。赤色の装束いと麗しうてめてたうてまわり。香爐もたげて佛拜み奉るほど。いかなる事を言ひ出てんとすらんどみえたり。高座にのぼりて。開白うちして。事の趣申して。願文少しうち讀みて。事のありさま經の中の心ばへ。例の大意釋名入文解釋よりはじめて。いみじう聞きよく珍しういひもてゆくに。殿の御前を

はじめ奉り。いみじう感ぜさせ給ふ。無量義經よりして普賢經に至るまで。説きつゝけたるほど。女房の面目を極め。宮の御有様めでたし。佛の在世の時。菩提心を發すもの千萬人ありしかど。いまだあらじ。女の身にて契を結び事を語らひて。かく菩提の心を發して。難解難入の法華經を書寫供養し。七寶を以て飾り奉れり。これ希有の中の希有の事なり。法華經書寫供養のもの。必ず切利天に生る。いかにいはんやこの女房のいづれか法華經をよみ奉らざらん。都卒天に生れ給ひて。娛樂に快樂し給ふべし。いはんや金銀瑠璃眞珠等をもて書寫供養し給へる。あはれにたふとさき事なり。この御志。須彌山よりも高く。四大海よりも深し。只今の御身どもは。いろくの花の袂を深く淺くにほかしかをり。梅檀沈水にまみかへり。御顔はいろくに彩色給ひて。鏡にうつれる影を見給ひては。かの舍衛國の女人の我顔よじと見けんにも劣らず。九重の宮の内に遊戯し給ふ事。かの切利天の快樂を受けて。歡喜苑の内に遊戯するに劣らず。喜

見宮殿に遊戯するにも勝さり。いまけふの遊戯のならひなし。誠に衆生の水をもて能く四種の甘露をなめ。五妙の音楽を聞くに。三十三天の微妙の天女に齊しくればする御身どもの。いかればぼしたるにか。春の花の散るを見て無常をさとり。秋の木の葉の落るを見てうれへ。曉の鳥の聲に涙をながし。朝の霜の朝日にきへ。夕の露のたのみすくなく。入相の鐘の聲。今日も暮れぬと聞くをあらはれみ給ひて。いにしへのふるき歌を思ひてかゝる大願をれこし給へり。かつは頼みつかうまつり給ふ。皇太后宮。並に一品宮の御息災を祈り奉り。かつは私の二世の大願あひかなひ。一切衆生をして。我同じく。現世安穩後世善所の思ひ遂げしめんとなほしたり。妙法一乗の經典文字ことばに空しかるべからず。綾羅綿繡黄金珠玉の飾り給へる衣の裏に一乗の玉をかけ給ひつ。決定して二世の大願あひかなはしやなどぞいふ。哀れめでたき事多かれど。まねびやる方なし。(榮花物語)

○法華の功德

其三

女休の亡靈は蓮上人の前に妙法の値遇を蒙る

實にや。恩愛愛執の涙。四大海より深し。聞法隨喜の其爲めには。一滴も落とす事なき。有り難や。衆罪如霜露。惠日の光りに消えて。即身成佛たり。彼の調達が五逆の因に。沈みはてにし。阿鼻の苦み。終に法儀の臺に變す。況んや受持し讀誦せんをや。唯一時も結縁せば。それこそ即ち佛心なれ。皈命妙法蓮華經。一部八卷四七品。文々悉く。神力を示し。述べ給ふ。濁亂の衆生なれば。此經は保ち難し。暫くも保つものは。我即ち歡喜して。諸佛も然なりと。一乗の妙文なる物を。深着虚妄法堅受不可捨ぞ悲しき。始め華嚴の御法より。般若に及ぶ四十餘年。未顯眞實の方便。成佛のまこと顯れて。妙法蓮華經ぞかま。正直捨方便。無上の道に至るべし。實に有り難や。此經に逢ふ事難き。優曇華の花待ち得たり。うれし今の機縁や。謠曲身延

○法華の功德 其四 空也上人受宿山に法華讀誦の時龍神現れて經の功德を嘆す

それ始めの御法さまぐなれども。爲法便力四十餘年未顯眞實と説き

給ふ。然れば餘經の瓦礫を捨て、妙法一味の玉を拾はんが爲めに。ろく
 ずおけきを顯へ志。身心不動の禪定に入り給ひ。一切衆生の迷はざる以
 前。本來の面目金剛不壞の正躰に導き入れんと呪秘し給ひし。されば此
 經を説き給ふに。天より四華降り。大地六種に震動し。地神龍神も顯はれ。
 靈山の會座に連なりしに。眉間白毫を放ち給ひ。天地十方を照らしつゝ。
 光にあたる物皆悉く成佛す。斯る大乘功德の妙なる法を聞く時は。靈山
 會場もこゝなれや。此山松の夕嵐。不求足菩薩住寂靜。清淨心を發せとの。
 教へはさまざまの御法ぞあらたなりける。(謠曲愛宕空也)

○法華の功德

其五

(日蓮上人に助けられし源父の幽靈經の功力を嘆す)

夫れ地獄遠きにあらず。眼前の境界。惡鬼外になし。そもく彼者。若年の
 昔より。江河に漁つりて其罪れびたゞ志。されば鐵札數を盡し。金紙をよ
 です事もなく。無間の底に墮在すべかりしを。一僧一宿の功力にひかれ。
 急ぎ佛所に送らんと。惡鬼心を和らけて。鵜舟を弘誓の船になし。法華の

御法の助け舟。篝火も浮ぶけしきかな。迷ひの多き浮き雲も。實相の風あ
 らく吹いて。千里が外も雲はれて。眞如の月やいてぬらん。有り難の御事
 や。那落に沈む悪人を。佛所に送り給ふなる。其瑞相のあらたさよ。法華は
 利益深き故。魔道に沈む群類を。救はん爲めに來たりたり。實に有り難き
 誓ひかな。妙の一字はさて如何に。それハ褒美の詞にて。妙なる法と説か
 れたり。經とハなどや名づくらん。夫れ聖教の都名にて。二つとなく三つ
 となく。唯一乗の徳によりて。那落に沈みはて。浮びがたき悪人の。佛果
 を得ん事は。此經の力ならずや。是を見彼を聞く時は。たとひ悪人なりと
 ても。慈悲の心を先として。僧會を供養するならば。其結縁に引かれつゝ。
 佛果菩提に至るべし。實に往來の利益こそ。他を助くべき力なれ。(謠曲鵜
 飼)

○法華の功德

其六

(旅僧富士が妻の亡魂を度す)

それ佛法さまざまなりと申せども。法華は是れ最第一。三世の諸佛の出

世の本懐。衆生成佛の直道なり。中んづく女人成佛疑ひあるへからず。一者不得作梵天王。二者帝釋。三者魔王。四者轉輪聖王。五者佛身云何女身速得成佛。何疑ひか荒磯海の深き執心をはらして。浮び給へや。或ひは若有聞法者。無一不成佛と説き。一度此經を聞く人。成佛せずといふ事なし。唯頼め頼もしや。(謠曲梅枝)

○法華の功德 其七(房前の大丘其母海士の幽靈を讚州志度に吊ふ)

寂寞無人聲。あらありがたの御とむらひやな。此御經より引かれて。五逆の多達は天王記別を蒙り。八歳の龍女は南方無垢世界に生を受る。なほなほ轉讀し給ふべし。深達罪福相。遍照於十方。微妙淨法身。具相三十二。以八十種好。用莊嚴法身。天人所戴仰。龍神咸恭敬。あら有り難の御經やな。今此經の徳用にて。天龍八部。人與非人。皆遙見彼。龍女成佛。さてこそ讚州志度寺と號し。毎年八講朝暮の勤行。佛法繁盛の靈地となるも。此孝養と承る。(謠曲海士)

○法華の功德 其八(日蓮上人身延山の龍女を度す)

それ世尊の教法は。五時八教に配立し。權實二教に分てり。さる程に滅後の弘教も正像末に次第して。いま後五百歳の時なれば。時機に叶ふ此妙經を弘めつゝ。國土安全の勤めをなせし。其かひの身延の山に引き籠り。寂寞無人の扉の内には。讀誦此經の聲絶えず。一心三觀の窓の前には。第一義天の月まどかなり。そもく法華經と云つは。釋尊久遠劫の其昔。初成道の時悟り給ひし妙法華經なり。然るに華嚴の朝より般若の夕に至るまで。抑止在懷し給ひて。種々の方便機に隨ひ。終に一乘を説き給はねは。十界差別まぢくなり。

然るに此法華經は。佛七十餘歳にて始めて説かせ給ひしに。そよや一味の法の雨。ひとしくそよぐ濕ひに。敗種の二乘圍提も皆々同じ悟りを得。殊に文珠の教にて。龍女は須臾に法を得て。此世ながらの身を捨てず。本

の悟りの故郷に立ち皈る有様や。錦の袂なるらん。謡曲現在七画

○法華の功德 其九 伏姫八房を度す

つらくも給ふやう。この珠数はじめは仁義禮智云々の文字あり。かくて八房に伴れ。この山に入らんとせし比。如是畜生云々と。八の文字になりてしかば。果して件の一句のこどく。八房も亦こゝに菩提心を發したり。然るに今又畜生四足の文字は失て舊の如く。人道八行を示させ給ふ。權者の方便測がたし。いと淺はかなる女の智をもて。何と辨へ侍らんや。見る所をもて推ときは。吾儕は犬の氣を受けて。平ならぬ身となり。し故に。遂に非命に終ると。畜生道の苦艱に似たり。されども佛法の功力にて。八房さへに菩提に入れり。來世は仁義八行の人道に生るゝよしを。こゝに示させ給ふもの歎。もしさあらんには。八房をもわが手に殺さば。畜生の苦を抜くよすがとなりぬべし。いな。それは不仁なり。渠はそこの主の爲に。大敵を亡したり。かゝれば。是こよなく忠あり。又去歲よりし

てこの山に。吾儕が飢渴を凌せたり。かゝれば。又養ひの思ふかゝり。よしや。來世は人と生れて。富貴の家の子となるとも。その忠この思あるものを。今情なく。双もて。死を促すに忍んや。これらのよしを。ありの隨に。告て生死を渠に任せん。さはとて。珠數を左手に掛。前足突立。こなたのみ。眺めを。る犬に。うち向ひ。や。よ八房。わがいふ事をよく聞けかし。よに。幸なきもの。二ツあり。又幸あるもの。ふたつあり。則吾儕と汝なり。われハ國主の息女なれども。義を重しとするゆゑに。畜生に伴る。これこの身の不幸なり。しかれども。穢し犯されず。ゆくりなくも。世を逃れて。自得の門に。三寶の引接を希ひしかば。遂に念願成就して。けふ往生の素懷を遂なん。亦これこの身の幸なり。又只汝は畜生なれども。國に大功あるをもて。聽て國主の息女を獲たり。人畜の道異にして。その欲を得。遂されども。耳に妙法の尊きを聽て。遂に菩提の心を發せり。これ汝が幸ひなり。しかれども。生をかへ。形を變ふるに。よしなれば。こゝに。四足の苦を脱れず。生てはその

智をますとなく。死しては徒その皮を剥れん。亦これ汝が不幸也。汝生れ
てより七八年。犬馬にしてはその命短しといふ可らず。いたづらに生を
貪り。わが死するを見て里に還らば。友に噬れ。苔に打れ。呵責忽地その身
に及ん。又この山に住るとも。翌よりしては誰か亦汝が爲に經を讀べき。
梵音耳に入らずならば。菩提の心遂に失なん。唯生を辞し死を樂み。人道
の果を希はゞ。來世に人と生れざらんや。この理をよくしらば。れなし流
に身を投て。共に彼岸に到れかし。さればとて時なほ早かり。われも浮世
の名殘なり。且れん經を讀誦して。心しづかに元に歸らん。汝もこれを聽
聞して。讀果なんとするときに。起て水際に赴けかし。さりとも不覺に命
惜くば。野なれ里なれ老死よ。爾らは人果を得るときなからん。よく辨へ
よと。叮嚀に諭し給へば。八房は頭を低て憂るごとく。又尾を掉て歡ぶ如
く。又感涙を流すに似たり。伏姫はこの形勢をつくく。と見給ひて。この
犬誠に得度せり。怨るもの、後身なりとも。既に佛果を得たらんには。弟

義成が耳孫の世まで。絶て障礙はあるべからず。心やすしと思ひとりて。
彼遺書と提婆品の一卷を手にて取て。洞より些す。み出讀誦し訖らば遺
書を。れん經に卷籠て。石室に留んと思ひ給ひつ。上平なる石を机に坐
を組て。彼一卷を額れし當。且く念し給ひつ。はや讀出し給ふにぞ。八房
は耳を側て。きくと生平よりいと切なり。抑提婆達多品は。妙法蓮華經。卷
の五に在り。婆竭羅龍王の女兒か。とよ。八歳に志て智惠廣大。ふかく禪定
に入て。諸法に了達し。菩提を得たる緣故を。説給へる經文なり。女人はこ
ろ垢穢る。素より法器にあらず。又身に五障あり。故に成佛志がたきも
の也。爾るに八歳龍女の如きは。はやくも無上菩提を得たり。便是女人に
して。成佛の最初たり。か。れを伏姫末期に及びて。身の爲又犬の爲に。提
婆品を讀給ふ。今を限りと思へばや。音聲高く澄渡り。たにす又委すして。
蓮の糸を引く如く。又出水の走るに似たり。峯の松風もこれを和し。谷の
幽響もこれに應ふ。石を集て聽敬とせし。むかともかくぞありけんかし。

いとも愛たき道心なり。さる程に讀經も既に果になりて。三千衆生發菩提心。而得受記。智積菩薩及舍利弗。一切衆生默然信受。と讀給へば。八房は衝と身を起して。伏姫を見かへり。水際を指してゆく程に。前面の岸に鳥銃の筒音高く響して。忽地飛來る二ツだまに。八房は吭を打れて。煙の中に礮と仆し。あまれる丸に伏姫も。右の乳の下打破られて。苦と一聲叫びもあへず。經卷を手に拿ながら。横さまに轉輾び給ひぬ。(八犬傳)

○法華八講

十二月十餘日は。中宮の御八講なり。いみじうたふとし。日々に供養せさせ給ふ。御經よりはじめ。玉の軸羅の表紙。帙篋のかざりも世になきさまに整へさせ給へり。さらぬことの清らだに尋常ならずおはしませば。まして道理なり。佛の御莊嚴。花机のねほひなどまで。まことの極樂思ひやらる。初日は先帝の御れう。次の日ハ母君の御ため。又の日は院の御れう。五卷の日なれば。上達部なども。世のつゝまじさをえしも憚かり

給はで。いと數多參り給へり。今日の講師は心殊にえらせ給へば。薪こる程よりうち初め。同じういふ言の葉も。いみじうたふとし。御子だちも様々の捧物。捧げてめぐり給ふに。大將殿の御用意など猶似るものなし。常に同じ事のやうなれども。見奉る度ごとに。珍しからんをはいかゞはせん。はての日は。我御事を結願にて。世を背き給ふよし佛に申させ給ふに。皆人々驚き給ひぬ。(源氏物語)

○法華三十講

かくて四月の祭。とかりつる年なれば。二十餘日のほどより。例の卅講行はせ給ふ。五月五日にぞ五卷の日にあたりければ。ことさらめきをかこうて。捧物の用意かねてより。心ことなるべし。御堂に宮もわたりて。れはしませば。續きたる廊まで御簾いと青やかにかけわたしたるに。御几帳の裾ども。川風にすゞしさまさりて。波のあやもけさやかに見えたるに。五卷の其折になりぬれば。とさきくぐの年などこそわざとせさせ給ひし

か。今は常の事になりたれば。事をかせ給ひつれど。今日の御捧物はをか
しう覺えたれば。事このましき人々は。たのづからゆゑくしうしたり。
それハ制あるべき事ならねばにこそあらめ。きたなげなき六位衛府な
ど。薪こり。水などもたるをかじ。殿原僧俗歩みつゞきたるハ。さまぐを
かしうめでたうたふとくなん見えける。苦空無我の聲にてありける讚
嘆の聲にて。遣水の音さへ流れあいて。よろづに御法を説くと聞えなさ
る。法華經説かれ給ふ。哀に涙とゞめ難し。(藥花物語)

○法華轉讀

伊豆山に聞性坊阿闍梨某と云ふ僧ハ。兵衛佐年比の祈の師なりければ。
急き使を遣はして招請あり。阿闍梨何事やらんと胸打騒きて馳せ來れ
り。宣ひけるは。頼朝勅勘に預りて年久し。今平家を追討すへき由院宣を
蒙れり。是れ御坊の祈誓に酬ゆと存ず。就之故親父下野守の爲に法華經
千部轉讀の願を起して。既に八百部の功を訖つて。今二百部を殘せり。部

數を滿てんとすれば。二百部の轉讀月日を重さぬへし。平家に漏れ聞え
て討手を下されば。ゆゑしき大事なり。宿願を果さずして合戦の企てあ
らは。源平の亂遂に懈り有りて。報恩の志空くやなり侍らん。此事進退き
はまれり。よく計ひ給へとありければ。阿闍梨暫く案じて云く。八は悉地
の成ずる數也。二百部の未だ讀まざらん更に事かき侍るへからず。八百
部の既に讀む最と嘉例と云つへし。何にとなれば。釋迦如來は八正慈悲
の門より出で。八相成道の窓に入る。八十の壽命を持ちて八萬の法藏を
説き給へり。衆生本覺の心蓮は八葉の貌なり。一乘妙法の首題も八葉の
蓮なり。八角の幢は極樂の瑠璃治。八德の水は寶國の金沙池に湛へたり。
宗に八宗。戒に八戒あり。天に八天。龍に八龍あり。八福田あり。八解脱あり。
就中諸經の説時不同にして。卷軸區に分かれたり共。法華は八箇年に説
きて八軸に調卷せり。藥王菩薩は八萬の塔婆を立て。臂を妙法に燒き。
妙音大士は八萬の菩薩と來りて耳を一乘に歎たてり。

されは八百部の功既に終へ給ひなば。本意を遂げ給ふべき員數なり。急
き思ひ立ち給へ。時日を廻らし給ふなよ。されは軍のうらかたよは。先つ
當國の目代入牧の判官を討たるへし。今二百部は追の轉讀と申しけれ
ば。佐殿よに嬉しげにて。師僧の教訓は神明の託宣にやとて。當國には伊
豆箱根に立願の狀を捧けて。即ち聞性坊阿闍梨を以て啓白し。其外様々
の立願社々に起されけり。(源平盛衰記)

○天台の血脈

故少納言入道信西の子息に。安居院の法印澄憲いまだ權大僧都にて御
座けるが。座主の遺を慕ひつゝ。國分寺まで送り奉りて。座主は君に捨ら
れ奉りて配所の道に出てぬるを。是までの芳志こそ憂身の旅の思出な
れ。かゝる勅勘の者なれば。再ひ花洛に販り上らんまで。命ながらふべし
とも覺はず。弘通を退代に及し。利益を有縁に施し給へ。諸佛己心の所證
なり。天台秘密の宗門なりとて。一心三觀の相承血脈を授けらる。抑此法

輒からず。如來四十餘年懷に在て説き給はず。此法聞き難ければ。衆生無
量億劫耳の外にして未だ聞かず。適釋尊出世の昔。一乘弘宣の時。本迹二
門に權智實智の一心三觀を演へらる。灰沙の二乗は無生の悟を開き。塵
數の菩薩は増進の益に預りき。龍女が速成を現じ。達多が授記を蒙りし
此法力なり。天台大師は大蘇山法花三昧の道場にして。行道誦經せし時
に。靈山の一會現じつゝ。多寶塔中の釋迦より此法を傳へ給ひき。傳教大
師は渡唐の時。臺州臨海縣の龍興寺極樂淨土院にして。道邃和尚に隨ひ
奉り。此法を傳受し給ひしより以來。相承聊爾ならず。血脈法機を守る。就
中國は粟散邊土なり。時は濁世末代なり。誠に輒すかるへからず。今日の
情に堪へずして澄憲付屬を得たりけり。僧都は血脈を給て法衣の袖に
畏みつゝ。泣々御前を立ち給ふ。(源平盛衰記)

○顯密の諸教

傳教御名 最澄弘法御名 空海兩大師唐より傳へ給ひし天台眞言の兩宗も。この御代

よりこそ弘まり侍りけれ。この兩大師たゞなる人にれはせず。傳教入唐以前より。比叡山を開きて練行せられけり。今の根本中堂の地を開かれけるに。八の舌ある鑰を求め出で。唐までもたれたり。天台山のぼりて。智者大師天台の宗をこりて四代の祖なり。天台大師とも云ふ。六代の正統道邃和尚に謁して。其宗を習はれしに。かの山に智者皈寂より以來。鑰を失ひて開かざる一の藏ありき。試に此の鑰にてあけらるゝにどゞこほらず。一山こそりて渴仰しけり。依りて一宗の奥義のこる所なく傳へられたりとぞ。その後慈覺智證兩大師又入唐して。天台眞言を究め習ひて。叡山に弘められしかば。かの門風いよゝ盛りになりて。天下に流布せり。唐國亂れしより。經教多く失せぬ。道邃より四代に當れる義寂といふ人まで。唯觀心を傳へて。宗義を明らむる事絶にけるにや。吳越國の忠懿王姓は錢。名は傑。唐の末うかたより。東南の吳越を領して斯の主たり。此宗の衰へぬる事を歎きて。使者十人を差してわが朝に送り。教典を求めしむ。悉く寫し畢りて販りぬ。義寂之を見明めて。更に此宗を再興す。もろ

こしには五代の中後唐の末様なりければ。わが朝には朱雀天皇の御代にや當りけん。日本より渡したる宗なれを。この國の天台宗はかへりて本となれるなり。凡そ傳教かの宗の秘密を傳へられたる事も唐の台州刺史隆淳が印記の文あり。悉く一宗の論疏を寫し國に歸ることも釋志磐が佛祖統記にのせたり。異朝の書に見えたり。弘法は母懷胎の始め。夢に天竺の僧來りて宿をかり給ひけりとぞ。寶龜五年甲寅六月十五日に誕生。この日唐の天曆九年六月十五日に當れり。不空三藏入滅す。依て彼後身と申すなり。且は惠果和尚の告にも我と汝と久しき契約あり。誓ひて密藏を弘めむとあるもこの故にや。渡唐の時にも。或は五筆の藝を施し。様々の神靈ありしかば。唐の主順宗皇帝殊に仰き信し給ひき。かの惠果は眞言第六の祖師なり。不空の弟子。和尚六人の附法あり。劍南の惟上。河北の義圓。金剛一界を傳ふ。新羅の惠日。訶陵の辨弘。胎藏一界を傳ふ。青龍の義明。日本の空海。兩部を傳ふ。義明は唐朝にたきて灌頂の師たるべかりしが世を早す。弘法六人の中に瀉瓶たり。惠果の俗弟子。吳僧が蘇の詞あり。然れば眞言の

宗には正統なりと云ふべきにや。これ又異朝の書に見えたるなり。傳教も不空の弟子順曉に逢ひて眞言を傳へられしかど。在唐幾もなかりしかば。深く學せられざりしにや。歸朝の後弘法にもとふらはれたり。又今はこの流絶えにたり。慈覺智證は惠果の弟子。義操法潤と聞えしが弟子法全に逢ひて傳へらる。凡本朝流布の宗今は七宗なり。この中には眞言天台の二宗は。祖師の意巧。専ら鎮護國家のためと心ざりけるにや。比叡山には比叡と云ふ事桓武傳教と心を一にして興隆せられし故に名付と。彼山の叡これに稱す。然れど後事本紀に比叡の神の御事見えたり。顯密並ひて紹隆す。殊に天子本命の道場を立て。御願を祈る地なり。これは密につくべし。又根本中堂を止觀院と云ふ。法華の經文につき。台宗の宗義によるに。かたゞ鎮護の深義ありとぞ。東寺は桓武遷都の始。皇城の鎮の爲にこれを立てらる。弘仁の御時弘法に給ひて。永く眞言の寺とす。諸宗の雜住を許さざる地なり。この宗を神通乗と云ふ。如來果上の法門にして。諸教に超えたる極秘密と思へり。就中わが國は神武よりの縁起。この宗の所説に符合せ

り。この故にや。唐朝に流布せしは暫くの事にて。則日本に留まりぬ。相應の宗なりと云ふも理にや。大唐の内道場に准じて。宮中に眞言院を立つ。もとは助解由使の顯なり。大師奏聞して。毎年正月この所にて御宗法あり。國土安穩の祈禱。稼穡豐饒の秘法なり。又十八日の觀音供。晦日の御念誦等も。宗によりて深意あるべし。三流の眞言何れといふべきならねど。眞言を以て諸宗の第一とする事も。むねと東寺によれり。延喜の御宇に綱所の印鑑を。東寺の一の阿闍梨に預けらる。仍りて法務の事を知行して諸宗の一座たり。山門寺門は天台をむねとする故にや。顯密を兼ねたれど宗の長をも天台座主と云ふめり。この天皇諸宗をならべて興せさせ給ひける中にも。傳教弘法御歸依深かりき。傳教始めて圓頓の戒壇を立つべき由奏せられしを。南京の諸宗表をあげて争ひ申し。かど。終に戒壇の建立を許され。本朝四箇所の戒壇となる。弘法は殊更師資の御約ありければ。重くし給ひけるとぞ。この兩宗の外。花嚴三論は東大寺にこれを弘めらる。

かの花嚴は唐の杜順和尚より盛になれりしを。日本の良辨僧正傳へて東大寺に興隆す。この寺は則ちこの宗によりて建立せられけるにや。大花嚴寺と云ふ名あり。三論は東晋の同時に。後秦と云ふ國に羅什三藏と云ふ師來りて。この宗を開きて此に傳へたり。孝徳の御世に高麗の僧惠觀來朝して傳へ始めける。然らば最前流布の教にや。その後道慈律師請來して大安寺に弘めき。今は花嚴と並びて東大寺にあり。法相は興福寺にあり。唐の玄奘三藏天竺より傳へて國に弘めらる。日本の定慧和尚大相は玄昉僧正と云ふ人入唐して。泗州の智周大師玄奘二世の弟子に逢ひて。これを傳へて流布しけるとぞ。春日の神も殊更この宗を擁護し給ふなるべし。この三宗に天台を加へて四家の大乘と云ふ。俱舍成實など云ふは小乘なり。道慈律師同じく傳へて流布せられけれども。依學の宗にて。別にこの宗を立つる事なし。わが國大乘純熟の地なればにや。小乘を習ふ人

のなきなり。又律宗は大小に通するなり。鑒眞和尚來朝して弘められしより。東大寺及び下野の藥師寺。筑紫の觀音寺に戒壇を立て。この戒を受けぬ者は。僧籍につらならぬ事になりき。中古よりこのかたその名ばかりにて戒躰を守る事だにも絶えにけるを。南都の思圓上人等章疏を見明めて戒師となる。北京には我禪上人入宋して。かの土の律法を傳へてこれを弘む。南北の律再興して。彼の宗に入る輩は。威儀を具する事ふるきが如し。禪宗は佛心宗とも云ふ。佛の教外別傳の宗なりとぞ。梁の代に天竺の達磨大師來りて弘められしに。武帝機に叶はず。江を渡りて北朝に至る。嵩山と云ふ所に留まり。面壁して年を送られたり。後に惠可これを嗣く。惠可より下四世に弘忍禪師と聞えし。嗣法南北に相分る。北宗の流をば。傳教慈覺傳へて歸朝せられき。安然和尚慈覺の孫弟子の教時諍論と云ふ書に。教理の淺深を判するに。眞言佛心天台とつらねたり。されどけ傳ふる人なくて絶にき。近代となりて南宗の流多く傳はる。異朝には南

宗の下に五家あり。その中臨濟宗の下より二流となる。これを五家七宗と云ふ。本朝には榮西僧正黃龍の流を汲みて傳來の後に、聖一上人石霜の下つた虎丘の流れを無準にうく。かの宗の弘まる事は、この兩師よりの事なり。打ち續き異朝の僧もあまた來朝してこの國よりも渡りて傳へしかば、諸家の禪多く流布せり。五家七宗とはいへども、以前の顯密權實等の不同には相似べからず。いづれも直指人心見性成佛の門をば出でざるなり。弘仁の御宇より眞言天台の盛になれる事を、聊しるし侍るにつきて、大方の宗に傳來の趣を載せたり。極めて誤り多く侍らん。但君としては、いづれの宗をも大概しろしめして捨てられざらん事ぞ。國家攘災の御計なるべき。菩薩大士もつかさどる宗あり。わが朝の神明も取り分き擁護し給ふ教あり。一宗に志ある人。餘宗を謗り賤しむ。大なる誤りなり。人の根機品々なれば、教法も無盡なり。況やわか信ずる宗をだに明めずして、未だ知らざる宗を謗らんは、極める罪業にや。われはこの宗

に歸すれども、人はまたかの宗に志さず。共に隨分の益あるべし。これ皆今生一世の値遇にあらず。國の主ともなり。輔政の人ともなりなべ。諸教を捨てず。機を漏さずして、得益の廣からん事を思ひ給ふべきなり。(神皇正統記)

○禪 其一

此宗の模様は、はじめより階級を立てず。位を踐まず。直に本分に叶へり。世尊靈山會上にして、一枝の花を捧げ給ふに、百萬の大衆曾て之を知らず。摩訶迦葉のみありて、獨り微笑す。時に世尊迦葉に告げていはく、吾に正法眼藏涅槃の妙心あり。汝に附屬す。並に阿難に勅していはく、不貳の傳化なり。斷絶せしむることなかれと云云。爾より以來、商那和修、優婆塞闍以下、心々相傳して、今に盛なり。この花は是れ知解思量の及ぶ所にあらず。文字に依らず。教理に預らず。究竟しては何物ぞと見るべし。(鴉鷲合戰物語)

○禪 其二（禪僧放下僧に身をやつし敵に近きて父の仇を報する處）

さて放下僧はいつれの祖師禪法を御傳へ候ふぞ。面々の宗躰が承りたく候ふ。我等が宗躰と申すは、教外別傳にして云ふも云はれず。説くも説かれず。言句に出せば教へに落ち、文字を立つれば宗躰に背く。たゞ一葉の飄る。風の行方を御覽せよ。げにく面白う候ふ。さて坐禪の公案何と心得候ふべき。入つては幽玄の底に動じ。出ては三昧の門に遊ぶ。自佛はさていかん。白雲深き處金龍躍る。生死に住せは。輪廻の苦み。生死を離れは。斷見の科。さて向上の一路は如何に。切て三段となす。暫く切つて三段となすとは禪法の言葉なるを。御さわぎあるこそ愚かなれ何と。たゞ中々に磐手の山の岩躑躅。色には出でし。南無三寶をかしの人の心や。されば大小の根機を嫌はず。持戒破戒を擇ばず。有無の二偏に落つる事なく。皆成佛するためじあり。かるかゆゑに草木も發心の姿を顯はし。柳は緑花は紅なる。其色々を顯はせり。（謠曲放下僧）

○淨土の教 其一

抑淨土十方に構へ諸佛三世に出て給へ共。罪惡不善の凡夫入る事實に難し。彌陀の本願念佛の一行はかりこそ貴く侍れ。土を九品に分て破戒闍提嫌之事なく。行を六字につゞめて。愚癡暗鈍も唱ふるに便あり。一念十念も正業となり。十惡五逆も廻心すれば往生と見えたり。念々稱名常懺悔と宣ひて。念々ごとく御名稱すれば。無始の罪障悉く懺悔せられ。一聲稱念罪皆除と釋して。一聲も彌陀を唱れば。過現の罪皆のぞかる。故に南無阿彌陀佛と申一念の間。よく八十億劫の生死の罪を滅す。憑ても憑むべきは。五劫思惟の本願。念しても念すべきは。此彌陀の名號也。行住坐臥を嫌はねば。四儀の稱念に煩ひなく。時所諸縁を論せねば。散亂の衆生に據あり。下品下生の五逆の人も稱して已に遂往生。末代の重罪の輩も唱へば。必可預來迎。是を他力の本願と名く。又は頓教一乘の教と云ふ。淨土の法門彌陀の願巧。肝要如此。（源平盛衰記）

○浄土の教 其二

末世濁亂の機には念佛を以て最要とす。阿彌陀の三字は法報應の三身。空假中の三諦。死生本來の佛性。百界千如。森羅萬象此の三字にてもれり。阿といふは過去。千佛。空諦。法身如來。彌といふは現在。千佛。假諦。報身如來。陀といふは未來。千佛。中諦。應身如來。阿の字を稱ふれば。八十八使のみわく九十一品のれもわくを斷す。彌の字を稱ふれば。無始曠劫の塵沙の惡性を斷じ。陀の字をとなふれば。四十品の無明の根本を斷す。三身といふは。法身は生佛一如の理。迷悟不二の性。報身は相らく法樂の形。大悲修因の佛。應身は八相成道の如來。穢土出現のすがた。修しやすくして成りやすく。忘れかたくして捨て難し。法門はしれほし。たゞひた念佛なるべし。されば法然上人もたどひ一代を學ぶといふ共。無智鈍根のあま入道になりて只一向に念佛すべしとこそ候へ。(鴉鷲合取物語)

○浄土の教 其三

夫八萬隨情の教門は。みな苦海を渡る法船なりといへども。六八超世の本願のみ。ひとりよく常没をすくふ教網たり。是すなはち本師彌陀五劫思惟の善巧。末世の衆生九品往生の方便なるものをや。しかあれば四重八重のともがら。ことごとく報佛化佛の來迎にあづかり。一稱一念のたぐひ。れたなく無漏無生の寶國にいたる。このゆゑに光明大師震旦にあらはれて。このれもむきをすゝめ。黒谷の上人我朝にいで。このむねをひろめ給ひしよりこのかた。教をうかゞひ行を求むるもの四遠にみち。穢をいとひ淨をねがふやから一天にあはねくして。世のならばし人のことわざになりしかば。大かたことわりまでは。我も人もみくなれたる事ぞかし。(三部鈔)

○浄土の教 其四

其四

(妻か夫の別れを尋て善光寺に詣り哀を訴ふる處)

それ一念稱名の聲の中には。攝取の光明を待ち。聖衆來迎の雲の上には。九品蓮臺の花散りて。異香みちくして人に熏じ。白虹地に満ちてつらな

れり。つらく世間の幻相を觀するに。飛花落葉の風の前には。有爲の轉變をさとり。電光石火の影の中には。生死の去來を見る事。始めて驚くへきにはあらねども。幾世の夢とまどはりし。假の親子の今をだに。添ひはてもせぬ道芝の露のうき身の置き處。誰れに問はまし旅の道。是もうき世の習ひかや。悲しみの涙眼にさへきり。思の煙胸に滿つ。つらく之を案するに。三界に流轉して。猶人間の忘執の晴れがたき雲の端の月の御影や。明らけき眞如平等の臺に至らんとだに。も歎かずして。煩惱のきづなに。結ばほれぬるを。悲しき罪障の山高く。生死の海ふかし。如何にしてか。此生に。此身を浮へんと。實に歎けども人間の身三口四意三の十の道。れほかりき。されば初めて御法にも。三界一心なり。心外無別法。心佛及衆生と。聞く時は。是三無差別な疑ひのあるべきや。已身の彌陀如來。唯心の淨土なるべくは。尋ねべからず此寺の御池の蓮の得ん事を。などか知らざらん。只願はくは影たのむ聲を力の助け船。こがねの岸に至るべし。

そもく樂しみを極むなる。教へあまたに生まれ行く。道さまくの品なれや。寶の池の水。功德池の濱の眞砂。かすくの玉の床。臺も品々の樂しみを極め量りなき。命の佛なるべしや。若我成佛十方の世界なるべし。
(謠曲柏崎)

○淨土の教 其五

有り難や諸佛の誓ひ様々なれども。わきて超世の悲願とて。迷ひの中にも殊に猶。五つの雲は晴れやらぬ。雨夜の月の影をだに。知らぬ心の行くへをや。西へとはかり頼むらん。實にや頼めば近き道を。何遙くと思ふらん。末の世に。迷ふ我等か爲めなれや。説き残す御法は。是ぞ一聲の彌陀の教へを頼ますは。末の法。萬年と經るまでに。餘經の法は。よもあらじ。たましく。此生に浮かますは。又いつの世を松の戸の。明くれば出で暮るまで。法の場に交じるなり。御法の場に交じるなり。
(謠曲菅麻)

○淨土の教 其六

それ生死輪廻の根元を尋ねるに。有相執着の妄念より起れり。己れと心に迷ふて流轉無窮にして。車の庭に廻るが如し。昇沈不定にしては。鳥の林に遊ぶに異ならず。悲しきかなや我等今。人界に生を受くとは云ひながら。見佛聞法の結縁をもなさざれば。未來の樂しみもいかゞと思ひ知られたり。凡そ彌陀の悲願には。被戒闡提をも洩らさず。一念十念の間に。彼國に迎へ取るべしと。五劫思惟の本願なり。さればにや其心。極重惡人無他方便唯稱彌陀得生極樂と。説かせ給へる。此理に任せつゝ。我等を助けられはしませ。誦曲土車

○天王寺

夫れ佛日西天の雲に隠れ。慈尊の出世はるかに。三會の曉いまどなり。然るに此中間に於て。何と心をのばへまし。こゝによつて上宮太子。國家をあらため萬民を教へ。佛法流布の世となして。普く惠を弘め給ふ。然れば當寺を御建立あつて。始めて僧尼の姿を顯はし。四天王寺と名付け給ふ。

金堂の御本尊は如意輪の佛像。救世觀音とも申すとか。太子の御前生。震且國の思禪師にて渡らせ給ふ故なり。出離の佛像に應じつゝ。今日域に至るまで。佛法最初の御本尊と顯はれ給ふ御威光の誠なるかなや。末世相應の御誓。然るに當寺の佛閣の御作の品々も。赤栴檀の靈木にて。塔婆の金寶に至るまで。閻浮檀金なるとかや。萬代に澄める龜井の水までも。水上清き西天の無熱池の池水をうけつぎて。流れ久しき世々までも。五濁の人間を導きて。濟度の舟をも寄するなる。難波の寺の鐘の聲。異浦くに響き來て。普き誓ひ滿潮のれし照る海山も。皆成佛の姿なり。誦曲弱法師

○誓願寺

そもく當寺誓願寺と申し奉るは。天智天皇の御願。御本尊は慈悲萬行の大菩薩。春日明神の御作とかや。神と云ひ佛といひ。唯是れ水波の隔てなり。然るに和光の影廣く。一躰分身顯はれて。衆生濟度の御本尊なりと。

れは毎日一度は西方淨土に通ひ給ひて。來迎引接の誓ひを顯はしければ
します。笙歌遙かに聞こゆ。孤雲の上なれや。聖衆來迎す。落日の前とかや。
昔在靈山の御名は法華一佛。今西方の彌陀如來。慈眼視衆生顯はれて。娑
婆示現觀世音。三世利益同一體。有り難や我等が爲めの悲願なり。若我成
佛の光りを受くる世の人の我力には行き難き。御法の御舟の水馴棹さ
くても渡る彼岸に。至りくくして樂みを極むる國の道なれや。十惡八邪の
迷ひの雲も空晴れ。眞如の月の西方も。こゝを去る事遠からず。唯心の淨
土とは。此誓願寺を拜むなり。(謠曲誓願寺)

○梵天宮

されば梵天には。諸天の宮殿樓閣を一々に繪に寫せし。二萬由旬の卷物
あり。是を拜して能く覺えば。伽藍建立すみやかに成就せん。疑はず過た
ず信心功を積むべしとの給ふ御聲の芳しく。薰じ渡れる嵐となりて。白
雲さつくくくと吹き拂へば。あれ見よ梵天宮とぞ。

あらはれし忝くも梵天王。玉の冠玉の脊。瓔珞細軟の御衣芳しく。二人の
侍者に圍繞せられ。此一巻は二萬由旬。諸天の伽藍を寫したり。是へく
と翻へし。招く袂や卷物の紐左に解き廻る天の形のありくくと。迦陵頻
伽の聲音をならべ。繪解あるこそ殊勝なれ。先地形は東に摩尼山。六度萬
行波羅密山。前に法性無漏の海。隨緣眞如の波はうつとも。騒がばさわげ
彼の岸に。寄せくる船は絶えせしな。四方の四門は四王天の樓門にて。多
門持國增長廣目降魔の利劍のたるきはな。佛法擁護のうつばり。斷惡修
善の四足をつきかためく。世界國土を守らせ給ふ。忉利天にくわうく
くと時の鐘なる六時堂。生滅々己に日は出て。寂滅爲樂に入る日影。八色
五色の大蓮華。石の舞臺や舞人の。かざしの舞樂樂變化。諸天の中に兜卒
天。内院の高堂は摩耶夫人の淨土ぞかし。されば女人の五障の氷消えて
流れてたえずたり。つがひの龜のすむ水は。阿耨達池の流れと知れ。
ながれくくして雲水の塔の高さ五十丈。黄金の寶鐸。白銀の覺鈴の聲は罪

障懺悔の響きあり。九輪九曜九會曼陀羅。非想天の廻廊。非々想天の廻廊は。ア、く、く、めぐり、く、て百八十間。百八煩惱の睡りなれば。夢とやぶれてさつくと。雲吹き拂ふ無雲天。大金堂は是にあり。誰かは色に移り初め。色海欲海愛着戀慕の愛染堂。萬の願ひかなへさる帝釋天梵天。海の寶山の寶珍果珍寶二つ御藏にこめて。只何事も世の中を心にまかす自在天。四禪天には四石あり。其外是より四十九院の別所にて。普門輪藏多寶塔引聲堂萬燈院。三光天には日の本の神の本地千早振る十五社の宮殿あり。たよそ三十三天。天人衆の宮殿樓閣。玉の階。瑠璃の扉。珊瑚の欄干。瑠璃のこしり。金銀水晶いろえたて。いろえたてたる大伽藍。見るとも聞くとも盡きすまじ。本堂に歸へり法華經の三のまき。化城喻品を拜せよと。教へ給へる御聲につれて。忽ち紺地金泥の偈頌の文とあらはれて。光明天にみちくたり。太子歡喜隨喜の涙うるほす。肩にたひ給ふ。大乘一軸拔出でくるくくと紐とけて。卷頭。卷軸。大空にさらくく。

天の浮橋鳥鵲の橋。末世に是を経ばしと夕日に向ふ虹のはし。即心即佛經一躰。駒の蹄紫磨黄金神通如意の駒の手綱をくりかけく。ゆるがぬ天の經橋を。まづくくと。乗り下げ乗り上げ乗りおろし。晨朝の會に入り給ふ。扱こそ攝州難波津の四天王寺は。是此大梵天の伽藍をうつし。末代濁世の今日までも。日夜の參詣朝暮の勤行。老若男女諸共に。梵天宮に入る心。神明佛陀は水波の隔て。謹上再拜く。かざしの雲をふりわくれば。異香薫じ花降りて。又くりかへし卷きかへす。天の告にこそくもりなき。(近松聖徳太子繪傳記)

○高野山 其一 (光嚴上皇の御參詣)

さて御山にも御着ありしかば。大塔の扉を開せて。兩界の曼荼羅を御拜見あれば。胎藏界七百餘尊。金剛界五百餘尊をば。入道大政大臣清盛公。手づから書きたる尊容なり。さしも積惡の淨海。如何なる宿善に催され。斯る大善根を致しけん。六大無礙の月晴るゝ時ありて。四曼相即の花可發

春を待ちけり。さては是も只混なる悪人にてはなかりけるよと。今爰に思召し知らせ給ふ。落花爲雪笠無重深樹謬昏日未傾。其日頓て奥の院へ御參詣ありて。大師御入定の室の戸を開かせ給へば。嶺松含風顯瑜伽上乘之理。山花籠雪秘赤肉中臺之相。前佛の化縁は過ぎぬれども。五時の説今耳にあるかと覺え。慈尊の出世は遙なれども。三會の裝己に眼に遮ざるが如し。三日まで奥院に御通夜ありて。曉立ち出させ給ふに。一首の御製あり。

高野山まよひの夢もさむるやとその曉を待たぬ夜ぞなき(太平記)

○高野山 其二

そもく此高野山と申すを。帝都を去つて二百里。人家を離れて無人聲。されば末世の隱所として。結界清淨の道場たり。中にも。此三鉢の松は。大同二年の御歸朝以前に。我法成就圓滿の地の。しるしに残り留まれとて。三鉢を投げさせ給ひしに。光と共に飛び來り。此松の梢にぞ留まれる。そ

もく諸木の中に別きて。松に留まる其ためも。千代萬代の末かけて。久しかれとの御誓願委しく舊記にの。松風は八葉の室を静かに吹き渡り。法性隨縁の月の影は。八つの谷に曇らずして。誠に三會の曉を待つ如くなり。扱こそ即身成佛の相を顯はし。入定の地を示しつゝ。深々たる奥の地。御山鳥の聲澄みて。飛花落葉の嵐まで。無常觀念を勸むる。是とてもまた常住の。皆令佛道。緣覺の由をあかすなり。然れば時移り事去りて。四季折々のれのづから。光陰惜しむべし。時人を待たざるに。貴賤群集の雲霞かゝる高野の山高み。谷嶺の風常樂の夢覺め。法の稱名妙音の心耳に残り満ちく。稱へ行ふ聞法の聲は。高野にて静かなる靈地なりけり。(謠曲高野物狂)

○比叡山 其一

抑當山は是れ傳教大師草創の砌。桓武天皇の御願なり。天長地久の長講は止觀院に置かれたり。本尊と申へ。大師自ら斧を取り藥師の像を造り

春を待ちけり。さては是も只混なる悪人にてはなかりけるよと。今爰に思召し知らせ給ふ。落花爲雪笠無重。深樹謬昏日未傾。其日頓て奥の院へ御參詣ありて。大師御入定の室の戸を開かせ給へば。嶺松含風。顯瑜伽上乘之理。山花籠雪秘。赤肉中臺之相。前佛の化縁は過ぎぬれども。五時の説今耳にあるかと覺え。慈尊の出世は遙なれども。三會の装已に眼に遮ざるが如し。三日まで奥院に御通夜ありて。曉立ち出させ給ふに。一首の御製あり。

高野山まよひの夢もさむるやと。その曉を待たぬ夜ぞなき(太平記)

○高野山 其二

そもく此高野山と申すも。帝都を去つて二百里。人家を離れて無人聲。されば末世の隠所として。結界清淨の道場たり。中にも此三鉢の松は。大同二年の御歸朝以前に。我法成就圓滿の地の。しるしに残り留まれとて。三鉢を投げさせ給ひしに。光と共に飛び來り。此松の梢にぞ留まれるを。

もく諸木の中に別きて。松に留まる其ため也。千代萬代の末かけて。久しかれとの御誓願。委しく舊記にの。松風は。八葉の峯を静かに吹き渡り。法性隨縁の月の影は。八つの谷に曇らずして。誠に三會の曉を待つ如くなり。扱こそ即身成佛の相を顯はし。入定の地を示しつゝ。深々たる奥の地。御山鳥の聲澄みて。飛花落葉の嵐まで。無常觀念を勸むる。是とてもまた常住の。皆令佛道。緣覺の由をあかすなり。然れば時移り事去りて。四季折々のれのづから。光陰惜しむべし。時人を待たざるに。貴賤群集の雲霞かゝる高野の山高み。谷嶺の風常樂の夢覺め。法の稱名妙音の。心耳に残り満ちく。稱へ行ふ聞法の。聲は高野にて。静かなる靈地なりけり。(謠曲高野物狂)

○比叡山 其一

抑當山は是れ傳教大師草創の砌。桓武天皇の御願なり。天長地久の長講は止觀院に置かれたり。本尊と申へ。大師自ら斧を取り。藥師の像を造り

つゝ。未來の衆生を利益し給へと誂へ申給ひしに。半作の佛像のうなづき給ひしも憑もしくこそ覺ゆれ。梵釋四天の像は又忠仁公の造立なり。十二神將の像は寛仁の入道大相國の所造なり。日光月光の二菩薩は宇治關白の所造なり。効驗何れもとりぐに利生實に嚴重なり。法華三昧堂は又傳教大師の草創なり。一乘轉讀の鬮體は此砌にぞ住みにける。半行半坐の三昧此道場に修すとかや。常行三昧院は慈覺大師の建立。法道和尚の引聲此道場に遷さる。戒壇院と申も同き大師の建立。圓頓無作の大乗戒此靈場に行はる。惣持院と申は文德天皇の御願。眞言上乘の秘法は此伽藍に修せらる。如來遺身の御舍利。多寶塔に納め。鎮護國家の道場。名稱實に憑もしや。深草天皇の定心院。朱雀天皇の延命院。花山法皇の靜慮院。承雲和尚の五佛院。後冷泉院の實相院。弘宗王の大講堂。文德天皇の四王院。皆是國家鎮守の道場なり。西塔（西塔）。延壽堂は延秀菩薩の造立なり。寂光大師施主として護命僧正導師たり。弘法大師は呪願し。別當慈覺

兩大師梵音を誦し。安慧々亮の和尚達錫杖をぞ勤めける。本尊と申は傳教大師の御作なり。中堂の藥師と印相更に違はず。醫王善逝かと思ひしに。天人香呂の岡に天降り給ひて。因伽の御蓋を備へつゝ。敬禮天人大覺尊の四句の文を誦へけり。九旬安居の供花も此伽藍より始れり。横川の中堂と申も。慈覺大師の皈依の時惡風に放れて。羅刹國に至りしに。觀音海上に現じ給ひ。不動毘沙門艦舳に現じ給へり。赤山明神は簑笠を着給ひ。弓箭を手に把つて大師を守護し奉る。彼の三躰を移して本尊とし給ひ。赤山明神を西坂本に崇めけり。如法堂と申も慈覺大師の御建立。六根懺悔の行儀は此道場より始れり。三十番神の守護こそ貴くは覺ゆれ。相應和尚の不動尊南山の洞に坐し給ひ。大樂大師の大威德西塔院に御座す。或は秘密瑜伽の精舎もあり。或は法華讀誦の道場もあり。念佛三昧の砌あり。圓頓教の窓あり。目出たかりし峯なり。源平盛衰記

○比叡山 其二（旅僧と舟子の問答）

まづ向ひに當つて大山の見えて候ふは比叡山候ふか。さん候ふあれこそ比叡山にて候へ。麓に山王二十一社。茂りたる峯は八王子。戸津坂本の人家まで残りなく見えて候ふ。扱あひの比叡山へ。王城より良に當つて候ふよのう。中々の事。それ我山は。王城の鬼門を守り。悪魔を拂ふのみならず。一佛乗の嶺と申すは。傳へ聞く。鷲の御山を象れり。又天台山と號するは。震旦の四明の洞をうつせり。傳教大帥桓武天皇と御心を一つにして。延暦年中の御草創。我立つ。杣と詠し給ひし。根本中堂の山上まで。残りなく見えて候ふ。扱々大宮の御在所。波止土濃とやらんも。あの坂本の内にて候ふか。さん候ふ。麓に當つて。少し木深き陰の見えて候ふこそ。大宮の御在所。波止土濃にて御入り候へ。有り難や。一功衆生。悉有佛性。如來と聞く時は。我等が身までも頼も。しうこそ候へ。仰せの如く。佛衆生。通ずる身なれば。御僧も我も隔ては。あらし。一佛乗の峯には。遮那の梢をならべ。麓に止觀の海をたへ。又戒定惠の三學を見せ。三塔と名付け人は。又一念

三千の機を顯はして。三千人の衆徒を置き。圓融の法も曇りなき。月の横川も見えたりや。扱又麓はさ。波や。志賀辛崎の一つ松。七社の神輿の御幸の梢なるべし。さ。波の水。馴棹。漕がれ行く程に。遠かりし向ひの浦波の粟津の森は。近くなりて。跡は遠きさ。波の昔ながらの山櫻は。青葉にて。面影も夏山の。うつり行くや。青海の柴舟の。しばくも。暇ぞ惜しきさ。波の寄せよく。磯きは。の。粟津に早く着きにけり。(謠曲兼平)

○熊野

(中將維盛參詣)

三位中將入道は。日數經れば。岩田川に着き給て。一瀬のこりをかき給。我都に留置し。妻子の事。露思忘る。隙なければ。さこそ罪深かるらめども。一度此河を渡る者。無始の罪業。悉く滅すなれば。今は愛執煩惱の垢も。すきぬらんと。憑もしげに仰られて。

岩田川誓の船にさをさして。沈む我身も。浮ひぬる哉。と詠し給ても。父小松大臣の御熊野詣の悦の道に。兄弟此河水あみ戯れ

て上りたりしに。權現に祈申事あり。淨衣脱替ふべからず。御感應ありとて。是より重て奉幣有し事。思出給ても。脆きハ落る。涙也。其日は瀧尻に著き給。王子の御前に通夜し給。後世をぞ被祈申ける。彼王子と申は。本地は不空羅索。爲衆生利益とて。垂跡此砌。當來慈尊の曉を待ち給ふこそ貴けれ。明ぬれは峻しき岩間を攀ち登り。下品下生の鳥居の銘。御覽するこそ嬉しけれ。

十方佛土中以西方爲望

九品蓮臺間雖下品可足

注し置たる諷誦の文。憑もしくこそねほしけれ。高原の壑吹く嵐に身を任せ。三超の巖を越にハ。切利の雲も遠からず。發心門に著き給。上品上生の鳥居の額拜み給てハ。流轉生死の家を出て。卽悟無生の室に入とぞ思召。夫より本宮に着き給ては。寂靜坊阿闍梨が庵室に入給ふ。此坊ハ故小松内府の師なれば也。阿闍梨中將入道を奉見。夢の心地して。哀にもなつ

かしくも覺にければ。御前に參て。七旬の餘算を持て。再び奉拜御願事の嬉しさよ。故大臣の御參詣。只今の様に覺にてこそとて。老の袂を絞りけり。三位中將も今更昔に立かへる御心地して。父の大臣の御事。げに昨日今日の様に思出られ給ふにも。盡せぬ御襟に打副て。阿闍梨が袖を絞るを見給ふにぞ。今一際いそぎの悲みも増しける。さても中將入道殿ハ。參社せんとて坊を出給つ。此御山を見給に。大悲利物の霞ハ。熊野山くまのやまに聳たつき。和光同塵の垂跡は。音無川に住み給ふ。常樂我淨の春風はるかぜに妄想の氷解け。佛性眞如の月影に。生死の闇も晴ぬらんと。信心肝に銘しつ。證誠殿の御前に。再拜念誦し給けり。常住の禪徒客僧の山伏參り集りて。懺法ざんぽうをぞ讀ける。一心敬禮の音澄ねのぞは。三世の諸佛隨喜を垂れ。第二第三の禮毎に。無始の罪障滅ぶらんと最貴く思召ければ。賢くぞ思立ける父の大臣の命を召て。後世を助給へと被申ける事思出て。懸るべき事を兼てさとり給けると覺えて哀也。此權現と申は。佛生國の大王。善財太子と相共に。女の心を

悪みて遙に飛ひ來りつゝ。此砌にぞ住み給。斗藪の行者を睥み修験の人
 を憐む。大峯と申は。金剛胎藏。兩部曼荼羅の靈地也。此山に入る人は。此社
 壇より出立ち。役優婆塞は。三十三度の修行者。龍樹菩薩に値ひ奉て。五智
 三密の法水を傳へ。伊駒嶽に昇つて。二人の鬼を搦て。末代行者の使者と
 せり。弘法智證の兩大師。行者の跡を尋て。大峯にぞ入り給ふ。山王院大師
 熊野權現の在所を尋て參詣し給は。雲霞峯を隔て。荆棘道を埋めて。東
 西を失ひ。瀧尻に留り。七日祈誓し給へは。八尺の靈鳥飛ひ來て。木枝を食
 折て。其路を示せば。跡を趣て上りつゝ。社壇に詣で給き。八尺の長頭巾こ
 の表示とぞ聞ゆる。花山法皇の那智籠。寛平法皇の御參詣。後白川院卒都
 婆の銘。忝ぞ覺ゆる。善宰相は淨藏貴所の祈禱により。閻魔宮よりかへさ
 れ。通仁親王は行尊僧正の加持により。冥途の旅より蘇息せり。皆は大峯
 修行の効驗。權現揭焉の利生也。凡彼山の爲體。三重の瀧に望は。百丈の浪
 六根の垢を洗ひ。千草の嶽に上れば。四季の花一時に開て盛也。ふきうの

峯には。寒嵐衣を徹し。古家の宿には。時雨袖を濡ほす。彼馳兒宿龍のむな
 さき。大禪師小禪師。屏風のそば道。釋迦嶽。負釣行者歸。何れも得通の人に
 非れば。争か爰を通らん。然而權現金剛童子の加護にて。無恙こそ貴けれ。
 或は高山に登て薪を採り。或は深谷に下て水を汲む。大王の阿私仙に従
 へて。千歳の給仕に相似たり。太子の檀特山に入て。六年の苦行に不異。一
 見の新客は初僧祇の功德を得。三度の古叢は。三祇劫の萬行を満ちたり。
 誠哉一陀羅尼の行者は。智者の頭を歩むといへり。是皆垂跡權現の善巧
 方便の利益也。証誠殿と申は。本地は阿彌陀如來誓願を饒王の往昔に發
 して。大悲を釋迦の在世に弘め。正覺を十小劫に成して。濟度を極十歳に
 留む。一念十念をも不嫌。五逆十惡猶助け給へり。一座無爲の實體は。遙の
 西にましませと。隨緣化物の權迹は。此砌にぞ住み給ふ。前に大河流れた
 り。水功德池の波を添ふ。後に長山連なれり。風寶林樹の枝に通ふらじ。本
 地の悲願を仰きて。本願誤り給はず。必ず西方淨土に引導し給へと申給

ける。中にも古里に留置し。妻子安穩にと祈り給こそ。憂世を遁れ實の道に入りても妄執の猶盡きさりけることを悲けれ。明ぬれば寂靜坊に暇を乞ふとて。和光同塵の區にましませ共。利益衆生は一なり。兩度參詣の契を以て。一佛淨土に必ずとて。本宮を出て給ひ。備崎より舟に乗り。時々には明日香神藏に。暫く念誦し給て。那智へそ參り給ける。佐野の濱路に著き給へは。北は緑の松原影滋く。南は海上遙に際もなし。日數の移るに付ても。あだ命の促るほど。屠所の羊の足早く。心細くぞればしける。那智御山は穴貴と飛瀧權現御座す。本地は千手觀音の化現也。三重百尺の瀧の水。修禪の峯より流れ出て。衆生の塵垢を洗き。千手如意の本誓は弘誓の船に棹として。沈淪の生類を渡し給ふも憑もしや。法華讀誦の音聲は霞の底に幽か也。如來の説法し給ひし。靈山淨土に相似たり。觀音薩埵の靈像。岩の上にて坐し給ふ。大悲の生を利益する。補陀落山とも謂つへし。

去にし寛和の比。花山法皇の行ひ給にける所とて。時頼入道奉教ければ。瀧本へ下り給て。其舊跡を拜すれば。今は御庵室も霧に朽ちて其跡なし。庭上に若草繁くして。垣根に蔦まとへり。昔の遺を忍べとや。千代の形見に引き植させ給ける。老木の櫻計りこそ。折り知りかほに咲きにけれ。加様の事共御覽しけるに。彼も明哲聖主の君。猶浮世をば厭ひ給けり。我へ愚昧凡人の臣。何にか執を留むへきと思召けるにこそ。無始の罪障露消ぬ共ればしけめ。(源平盛衰記)

○大日如來

(交野の尼君或る里人を案内して無量壽院に拜かみ奉つる)

廊をわたりて大御堂に參れば。中臺高きいかめしうればします。摩訶毗盧遮那とこれをなん申すとて。普賢經の文をいひきかす。釋迦牟尼佛をびるしやなどなづけられたてまつる。一切の所に遍じたまへり。その佛の所住のところをば。常寂光となづく。淨波羅密の苦空無常の所。我波羅密の安住せる所。愛敬の所。常波羅密の有相を滅する所。六波羅密の身心心の

性に所住せる所。有作無作の諸法の性を見ざる所。如なり。寂なり。解脱なり。乃至般若波羅密なり。など思ひつゝけ言ひきかず。(榮花物語)

○彌陀如來

佛を見たてまつれば。丈六の彌陀如來光明第一義なり。もろくの御頭は緑の色ふかう。眉間の光毫は右にめぐりて宛轉せる事五須彌のごとし。青蓮花の御眼は四大海をたへ。御唇は頻婆果のごとし。體相威儀いづくしく。紫磨金の尊容は秋の月くもりなく。無數の光明あらたにて。世界あまねくあきらけし。微妙法身いろくの相好を具足し給へり。光中化佛無數億にして。光明互に照しかゞやけり。これ即ち無漏萬徳の成就する所なり。慈悲の相は眼にあり。梵音相は口にあり。弘誓相は面にあり。愛敬の相は齒のひかりにあり。神通の相はいきほひにあり。智慧の相は眼にあり。妙好高貴の相は身體よあり。方便無量の相は容貌にあり。十力無畏の相は起居するにあり。大定智慧の相は息にあり。眞如寂滅の相は

たぶさにあり。實には寂滅にしてたゞ名のみあり。この故に正に知るべし。初觀の衆生はすなはちこれ三身即一の身なり。諸佛等又相好光明なり。萬徳圓滿相好光明なり。色即是空なるか故に。これ眞如實相といふ。空即是色なるか故に。相好光明といふ。一色一香中道にあらずといふ事なし。受想行識も亦復かくの如し。即三道彌陀佛の萬徳も。もとよりこの比丘僧にして一たいむげなり。上は端に觀音勢至。れなしく金色にして。玉の瓔珞をたれてたゞせたまへり。各寶蓮花を捧けてたゞせ給へり。四天王たゞせ給へり。一佛の御よそひかくのごとし。いはんや九體ならばせ給へるほど。心に思ひ口に述ふべきにあらず。花嚴經の偈よいはく。若有諸衆生未發菩提心。一得聞佛名。決定成菩提。又往昔の無數劫。苦をうけて。生死の中に流轉して。いまだ佛の御名を聞かざりしゆゑなり。しかるを我等かばかり佛を見奉りつ。豈空しからんやと思ひて拜みたてまつる。榮花物語

○藥師と觀音

廿六日かの藥師堂の供養例の事どもえもいはずめでたし。御堂の御有
 様例の目もかゝやきて。いかにも見わきがたし。大宮殿の上とぞればし
 ます。御局この御堂の北の方によりて。庇ひさきに御簾懸けたり。御堂の造りさ
 ま。犬防いぬまきのさまなど。西の御堂にことならず。藥師佛の御前の方の母屋の
 柱には。十二大願の心を繪にかゝせたまへり。六觀音の御前の方の柱に
 は。觀音品の偈の心を皆かゝせ給へり。飯室いひむらの阿闍梨あせりの手を盡し給へる
 程。思ひやるへし。南より北さまに。七佛藥師ならばせ給へり。はしくく
 日光月光たち給へり。ひまひまに十二神明長七尺ばかりにて。いろく
 の衣ぬいを着。さまくの顔かほ。こゝろくのけしきにて。もたるもの皆ことこ
 となり。見るにかつへゑましよう。かつはれうろしげなり。一々に見たてま
 つりて。隨願藥師經の文をれもひいでたてまつる。一聞我名。惡病除。愈乃
 至速證無上菩提。とあり。一度御名を聞きただにかゝり。いはんや七佛を

見奉らんほど思ひやるべし。又七佛藥師經にいはく。もしわが名を聞く
 ことあらんもの。惡趣にれちば。佛の神力をもて。又名號を聞かして。返
 て人趣にうまれて菩薩の行を修し。速に圓滿することを得しめんとの
 給へり。まいて見奉るほどを思ふに。れろかならんやは。また六觀音は。六
 道のためにとればしめしたり。本誓を思ふにいとあはれなり。大慈千
 地獄 大慈正餓鬼 師子馬頭畜 大光面修羅 天人准泥人 大梵如
 意天。どのたまへり。かく思ひつゞけ拜み奉るにも。六趣に輪廻すること
 あらじと。たのもしくなりぬ。その中にも。如意輪の御思惟のけしきもあ
 はれに見ゆたまふ。難斷煩惱。即能斷除。自然智惠。發起慈心。隨
 類示現。以大慈悲。また 難度衆生。能度相現。悲哀衆生。慈如一子
 などの給はせたるほど。れぼろけならずか。こゝらの佛の現れ給へ
 る。かつはいづこより來たり給へるにか。知らまほしきに。無量義經文に
 いはく。戒定惠解知見生。三昧六通道品發。慈悲十力無畏起。衆生善業因緣

出。どのたまへり。殿のたまへの御心のうちより。顯れ給へりと知りぬ。
〔榮花物語〕

○五大尊

又廊をわたりて五大堂に参りたれば。三井寺の別當僧都。おほやけの御
修行行ひ給ひけん。僧二十人皆淨衣じやういそめたり。ほうくの聲。いみじうお
どろれどろし。佛を見たてまつれば。降三世軍荼利さんせいぐんたれたち給へり。大聖金剛
夜又不動尊は。奥の方に居させ給へり。金剛夜又は釋迦佛とき々奉るに。
第十六我釋迦牟尼佛との給はせたる。御有様にはあらで。いと恐しげに
見えさせ給ふ。一時に降服かうふくせさせ給ふれやと見えさせ給ふ。不動尊はさ
れど少しみつがせ給へるかたちす。それも金剛索智こんごうさくちの劍を持すれば。一
持生々加護の御心もいとあはれにて。又見我身の發心菩提も。斷惡修善
なども。おろかならず覺えさせ給ふ。〔榮花物語〕

○八幡大菩薩

八幡と申す御名は。御託宣に。得道來不動法性。示八正道垂權迹。皆得解脫
苦衆生。故號八幡大菩薩とあり。八正とは。内典に。正見。正思惟。正語。正業。正
命。正精進。正定。正惠。これを入正道といふ。凡心正なれば。身口自ら清まる。
三業に邪なくして内外真正なるを。諸佛出世の本懷とす。神明の垂迹も。
又これがためなるべし。又八方に八色の幡を立つることあり。密教の習
ひ。西方阿彌陀の三昧耶形さんまいげなり。その故にや。行教和尚には。彌陀三尊の形
にて見えさせ給ひけり。光明袈裟の上かみくわさにうつらせましくけるを頂戴
して。男山には安置し申しけるとぞ。神明の本地をいふこと。たしかな
らぬ類多けれど。大菩薩の應迹は昔より明かなる證據はしますにや。
或は又昔於靈鷲山說妙法華經とも。或は彌勒なりとも。大自在王菩薩な
りとも託宣したまふ。中にも八正の幡をたて。八方の衆生を濟度し給
ふ本誓。よく思ひ入て。つかふまつるべきにや。神皇正統記

○生身の普賢

書寫性空上人。生身の普賢を見奉るべきよし。寤寐に祈請し給ひけるに。或夜轉經につかれて。經を握りながら。脇息によりかゝりて。志をしまどろみたる夢に。生身の普賢を見奉らんと思はゞ。神崎遊女の長者を見るへきよしとて。夢覺めぬ。奇異の思ひをなして。彼處へ行きむかひて。長者が家よおはしつきたれば。只今京より上日の輩とて。遊宴亂舞のほどなり。長者横座に居て。鼓を打ちて。亂拍子の次第をとる。その詞にいはいはく。周防むろつみの中なるみたら井に風はふかねどもさゝら波たつと。上人閑居して。信仰恭敬して。横目もつかはずまもり居給へり。この時忽に普賢菩薩の形に現じ。六牙の白象に乗りて。眉間の光をはなちて。道俗貴賤男女をてらす。即ち微妙の音聲を出して。實相無漏の大海に。五塵六欲の風は吹かねども。隨緣眞如の浪の立たぬ時なしと。感涙抑へがたくして。眼を開きて見れば。又もとの如く女人の姿となりて。周防むろつみの詞を出す。眼を閉づる時は。又菩薩の形と現じて。法門を演べたまふ。

此の如く度々敬禮して。なくなく歸り給ふ時。長者俄に座を立ち。閑道より上人の許へ來りて。この事口外に及ぶべからずといひて。即ち俄に死す。異香空に満ちてはなはだ香し。長者の頓滅の間。遊宴の興覺めて。悲泣する事限りなし。上人ますく。悲涙に溺れて。歸路に惑ひけりとなん。かの長者。女人好色のたぐひなれば。誰か是を權者の化作とはしらん。佛菩薩の悲願救生化度の方便によりて。形をさまざまに分けてしめし給ふ。道までも賤しきにはよらざる事かやうのためにして心得べし。十訓抄

○佛陀の三身

六月に御門。(文武天皇)丈六の佛像を作り奉らむとて。佛師よからむをもとめ給ひしに。その人なかりしかば。御門大安寺に行幸ありて。佛の御前に掌を合せ願をねこし給ひて。よき佛師にあひて。この佛を造り奉らむと申したまひしに。その夜の御夢に。一人の僧ありて。この寺の佛を造り奉りしは化人なり。又來たるべきにあらず。たとひよき繪師にあひ給ふとも。

猶斧のつまづきあるべし。たどひよき繪師にあひ給ふとも。いかでか筆のあやまちなからむ。只大ならむ鏡を佛の御前にかけて。その寫り給へらむ影を禮し奉りたまへ。書けるにもあらず造れるにもあらずして。三身具足し給はむ。その形を見るは應身の體なり。その影をうかゞふは化身の相なり。その空しきことを觀ずるは法身の理なり。功德の勝れたる事これに過ぎたるはなかるべしと申しき。御門夢さめ給ひて。如來の御願に應じ給ふことを悦び給ひて。大なる鏡を佛の前にかけて。五百人の僧を請じて供養し奉り給ひき。眞實の功德をおぼへ侍りしことなり。この頃もこの思ひをなしてする人侍らば。いかためてたき事にか侍らむ。
(水鏡)

○神明の内證 其一

我朝にハ應和の年の末に比叡山の三宮林の數千本の松。一夜に枯れ凋みて。霜を凌ぐ緑の色黄葉になりにけり。三千の衆徒大に驚きて。十禪師

に参りて。各自受法樂の法施を奉り。前相何事ぞと祈誓を凝さしめたりけるに。一人の神子俄に物に狂ひ出て。我に七社權現乗り居させ給へり。とて。託しけるは。我内には圓宗の教法を守りて。化縁を三千の衆徒に結ひ。外には國家の安全を致して。利益を六十餘州に垂る。雖然今衆徒の擧動。一として神慮に叶はず。兵杖を横へて法衣を汚さ。甲冑を帶して社頭を往來す。嗚呼今より後。三諦卽是の春の華。誰か袂にか薫まじ。四曼不離の秋の月。何れの扉をか照すへき。此上は我當山の麓に跡を垂れても何かせん。只速に寂光の本土へこそ歸らめ。只耳に留る事とては常行三昧の念佛の音。尙も心に飽かぬは一乘讀讚の論議の聲と。泣々託宣しけるが。額より汗を流して。物附は則ち醒めにけり。大衆是に驚きて。聖眞子の御前にして。常行三昧の佛名を唱へ。止觀院の外陣にして。一乘讀讚の豎義を執り行ふ。依之神慮も忽に休まりけるにや。月に叫ぶ峽猿の聲も曉の枕を濡さず。霜を戴く林松の色本の緑になりにけり。(太平記)

○神明の内證 其二

近年此人(仁本)伊勢國を管領して。在國したりしに。前々更に公家武家手を指さざる。神領三郡に打ち入りて。太神宮の御領を押領す。依之祭主神官等京都に上りて。公家に奏聞し。武家に觸れ訴ふ。開闢以來未だ斯る不思議やあるとて。嚴密の論旨御教書を成されしかども。義長曾て承引せず。剩我を訴訟しつるか悪きとて。五十鈴川をせいて魚を捕り。神路山に入りて鷹を仕ふ。惡行日來に重疊せり。よしやさらば神罰に任せて。亡びんを待つとて。五百餘人の神官等。神の朶(た)に木綿(わた)を懸け。様々の奉幣を捧げて。只義長を七箇日の内に蹴殺させ給へど。異口同音にぞ呪咀しける。七日に當りける日。十歳ばかりなる童部一人。俄に物に狂ひて。我に太神宮乗り居させ給へりとて。託宣しけるは。我本覺眞如の都を出て。和光同塵の跡を垂れしより以來。本高跡(たかあと)下の秋の月。照さずといふ處もなく。化屬結縁(けつ縁)の春の花。蒸せずといふ袖もなし。されば方便の門には罪あるを

も嫌はず。利物の所には愚なるをも捨てず。抑義長が惡行を汝等天に訴へて。呪咀する事こそ心得ね。彼が三生の前。義長法師といひし時。五部の大乘經を書きて。此國に納めたりき。其善根今生に答へて。當國を知行する事を得たり。かやうの宿善ならずば。彼豈一日も安穩なる事を得んや。嗚呼。あたらし前根や。若し無上菩提の心に趣きて。此經を書きたらましかば。速に生死を離れ。佛果菩提に至りなまし。只名聞利養のため。修せし處の善根なれば。今身は武名の家に生れて。諸國を官領し。眷屬多くなびくといへども。惡行心に染みて。亂をこのみ人を惱す。哀なるかな。過去の善根。此世に答へて。今生の惡業。又未來に酬いん事を。どかきくどきて泣きけるが。暫く寝入りたる體にて。物附ハ則ち覺めにけり。(太平記)

○勸進帳

沙彌文覺敬ひて白す。殊には貴賤道俗の助成を蒙りて。高雄山の靈地に一院を建立し。二世安樂大利を勤行(けんぎやう)せんと乞ふ。勸進の狀。

夫惟れば眞如廣大なり。生佛の假名を斷つと雖ども。法性隨妄の雲厚く覆ひて。十二因縁の室にたなびきしより以來。本有心蓮の月の光幽にして。未だ三毒四慢の大虚に顯れず。悲しきかな。佛日はやく没して。生死流轉の衢冥々たり。唯色に耽り酒に耽る。誰か狂象跳猿の迷を謝せん。徒らに人を誦し。法を誦す。是豈。琰羅獄卒の責を免れんや。爰に文覺偶俗塵を打ち拂ひて。法衣を飾るといへども。惡行猶心に逞まうして日夜に作り。善苗又耳に逆つて朝暮にすたる。痛ましきかな。再び三途の火坑に歸りて。永く四生の苦輪を廻らんことを。このゆるぎに牟尼の憲法千萬軸。軸々に佛種の因をあかじ。隨縁至誠の法。一として菩提の彼岸に至らずといふことなし。故に文覺無常觀門に涙を落し。上下の親族を勸めて。上品蓮臺に縁を結ひ。等妙覺王の靈場を建てんとなり。それ高雄は。山堆うして。鷲山の梢を表し。谷靜よして商山洞の苔を敷けり。岩泉咽びて布を引き。嶺猿叫びて枝に遊ぶ。人里遠くして。塵塵なく。師跡事なくして。信心のみ

あり。地形勝れたり。尤も佛天を崇ふべし。奉加すこしきなり。誰か助成せざらん。夙に聞く。聚沙爲佛塔の功德。忽に佛因を感す。况や一紙半錢の寶財に於てをや。願くは建立成就して。禁闕鳳曆御願圓滿。乃至都鄙遠近里民。緇素堯舜無爲の化をうたひ。椿葉再改のゑみを披かん。殊には又聖靈幽儀前後大小。速に一佛眞門の臺に至り。必ず三身萬徳の月を翫ばん。仍りて勸進修行の趣。蓋以てかくの如し。平家物語

○表白 其一

桐壺の夕べの煙すみやかに法性の空に至り。箒木の夜の言の葉は遂に覺樹の花を開かん。空蟬の空しき世を厭ひて夕顔の露の命を觀し。若紫の雲の迎を得て未摘花の臺に座せしめん。紅葉の賀の秋の夕にハ落葉をのみぞみて有るをかなしび。花の宴の春の朝には飛花を觀じて無常をさざらん。たましく佛敎に葵なり。柳葉のさして淨刹を願ふべし。花散里に心を留むといへども。愛別離苦のとわりを免るゝ例なし。たゞすべ

八十八
からくは生死流浪の須磨の浦を出て、四智圓明の明石の浦に身をつ
くし。關屋の行きあふ道をのがれて般若の清きみぎりに趣き蓬生の草
むらわけて菩提のまことの道を尋ねん。なんぞ彌陀の尊容をうつし
て繪合にして。松風に業障の薄雲を拂はざらん。生老病死の身朝顔の日
影をまたん程なり。老少不定の境をどめ。こが玉豎かけても猶たのみか
たし。谷うちいづる鶯の初音もなにかめづらしからん。鳧雁鴛鴦のさへ
づりにはしかじまがきにたはるゝ胡蝶のたゞしはらくの樂ひなり。天
人聖衆の遊びを思ひやれ。澤の螢のくゆるおもひどこなつなりと雖ど
も。忽ちに智慧の篝火にひきかへての。わきの風にきゆる事なく。如來覺
王の御幸に伴ひて。慈悲忍辱の藤袴をき。上品蓮臺に心をかけて。七寶莊
嚴の眞木柱のもとに至らん。梅枝の香に心を留むる事なくて。淨土の藤
の裏葉をもて遊ぶべし。かの仙洞千年の給仕には若菜をつみて世尊に
供養せしかば。成佛得道の因となりき。夏衣たちおにいかにしてか一枝

柏木をひろひて妙法の薪となして無始曠劫の罪をほろぼし。本有常住
の風光をかゝやかして聖衆音樂の横笛をきかん。うらめしきかなや佛
法の世に生れなから家を出て名を捨つるまぎりに。鈴虫の聲ふり捨
てがたく。道に入り飾をれろすどころには夕霧のむせびはれがたし。か
なしきかなや人間に生をうけなから御法の道をしらすして苦海にし
つみ幻の世をいとはずして世路をいとなまん事。しかじたゝ薰大將の
香をあらためて青蓮の花ぶさに思をうめ。句兵部卿の句をひるかへし
ては香の煙のよそほひとなし。竹河の水を結びては煩惱の身をすゝぎ。
紅梅の色をうつして愛着の心をうしなふべし。まつよひの更るをなげ
きけん宇治の橋姫に至るまで。優婆塞が行ふ道をしるべにて椎が本に
留まる事なかれ。北芒の野邊のあわ雪きほん夕には解脱の總角を結び。
東岱の山の早薇の煙どのぼらん朝には旃檀の影にやどり木とならん。
つかさくらねを東屋の内のがれて。たのしみさかえを浮舟にたどふ

べし。これも蜻蛉の身なり。あるかなさかの手習にも往生極樂の文を書
くべし。夢の浮橋の世なり。朝な夕なに來迎引接を願ひ。南無西方極樂彌
陀善逝。願くは狂言綺語の誤りをひるかへして紫式部が六趣苦患をす
くひ給へ。南無當來導師彌勒慈尊。必ず轉法輪の緣として是をもて遊は
ん人は安養淨刹にむかへ給へとなり。源氏表自

○表白 其二

嘉吉の古戰場に七犬
士法會を密むとき

夫四恩必ず報ゆべし。狼獾の不仁なるすら。時として天を祀り。雛鳥の悪
食なるも。猶反哺の孝なきとを得ず。倘人にして徳を思はず。恩に報ゆの
心なくば。禽獸にだも曷ぞ及ばん。伏して惟れば。嘉吉の擾亂。君臣相克し。
五常地を拂て。人の心猛き獸と異ならず。是時に當りて。獨結城氏の鯁忠
あり。是をもて。左祖義に伏る所の雄兵。遂に亦尠からず。最賔の諸將。恩顧
の勇士。故君兩公子の奉爲に。妻子を忘れ。性命を擲ち。甲兵孤城に據る處。
無慮十萬有余人。四門の防禦。矢石に富み。三畧六韜。計拙からず。籠城既に

三ヶ年の久しきに。よく堪て。百萬虎狼の勁敵も。その勢ひに乗ると能は
ず。雖然古語に。不云乎。人多ければ天に勝ち。天定りて人に勝つ。の時いま
だ至らねばや。弓折れ勢窮まるに。泊て。君辱られ。臣死せり。玉石共に厠焼
れて。誰か一人も残るべき。哀かな義實不肖にして。當時父と共に其城に
在り。城陷るの日。遺訓辭するに。路なく。銳を劈き。堅を破り。命を東南の海
隅に免れて。神餘が與に逆臣を誅戮し。且つ不義の兩郡司麻呂安西を討
夷けて。安房の四郡を有ちしより。以來。民を拊るに仁を以てし。士を招く
に賢を擇り。加之愚息。義成孝にして。且つ武畧あり。是を以て下風に立
つ。武士二十余城。遂に隣國二總を并して。一方の藩屏たり。是併先考威靈
の守る所。祖先の餘徳に依る者なり。義實幸に良臣勇士の羽翼を得て。爲
とありし。創めより。遙に考妣兩尊の靈魂を招きまつりて。廟墓を平郡の
大山寺に建立し。春秋の祭祀。忌辰の追薦。敢て怠慢あらずと雖。今や戰世
割據の列國。關隘處々に横はりて。車馬を遠きに致すに由なし。是故に。躬

自ら其地に迨りて、恩に答へ徳を謝すべき吊祭の情盡すと能はず。言に舊臣二世の忠良金碗入道、大あり。恩を棄て、無爲に入り。寧ろ恩に報いんと思欲したる、勇猛精進五戒を具足し、且つ塵世に染着せず。錫を飛ばして嶮岨を踰越し、抖擻行脚二十余年。近曾義實父子に代りて、草廬を嘉吉の古戰場、幽陰茂林の中に卜て、三月不退の大念佛を勤行し、遙に重昏の臺を仰ぎて、將に冥福を舊穿に薦んとす。義實仄に之を聞て、相懼て寢られず。固茲涅槃經三部、孟蘭盆經五部、隨求陀羅尼三卷を搦寫し奉り。使臣蜚崎照文等に齋して、以て供獻焼香の奠禮を行はしむ。吁、佛弟子の功德廣大無量。迷津慈航の資を得たる。胸月眞如虚しからず。其善念の投す所。上は有頂天に届るべく、下は金輪際に通じて。彌陀勢至觀音の三尊俱に降臨し、五五の諸菩薩、天部善神、肩を比べて影向あらば、異香馥郁として金蓮葩を降し、天外の音楽、節奏の妙なる。鳳簫龍笛、睡蛇を覺さば。慶雲忽ち岫より起りて、瓊巖たらさるとを得ざるべし。然らば則ち數萬

の精靈、必ず是れ三惡の火坑を長く脱離して、忝に無量壽の寶座に遷り、三十六天の仙室に向はずして、常寂光の樂邦に遊ばん。乃至一闍提普く八正道に赴き給へど、爾いふ事由を、本願の大檀那前治部大輔、里見義實朝臣、安房守兼上總介、里見義成朝臣に代り奉りて、淨場修行の沙門、大行香使臣蜚崎照文等、敬て白す。(八大傳)

○消息(明石入道が明石上)

この年比はれなし世中のうち、めぐりあひ侍つれど、なにかはかくながら、身をかへたるやうに思給へなしつゝ、させる事なき限りはきこえうけたまはらず。かな文見給へるは、目の暇まわりて、念佛も懈怠するやうに益なうてなん。御消息も奉らぬをつで、うけ給はれば、若君は春宮に参り給て、たとこ宮生れ給へるよしをなん、深く悦申侍る。其故は自らかくつたなき山伏の身に、今更にこの世のさかえを思ふにも侍らす。過にし方の年比、心きたなく、六時の勤にも、たゞ御ことを心にかけて蓮の

上のつゆの願ひをば。さし置いてなん念じ奉りし。我れもと生れ給はんとせし。その年の二月の其夜の夢にみしやう。自ら須彌の山を右の手に捧けたり。山の左右より。日月の光りさやかたにさし出て世を照す。自ら山の下のかけよかくれて。その光にあたらす。山をばひろき海にうかべたきて。ちいさき舟にのりて。西の方をさしてこぎ行となんみ侍し。夢覺て朝より。かすならぬ身に。たのむ所いできながら。何とどにつけてか。さるいかましき事をば待いでんと。心の中に思ひ侍しを。其比よりはらまれ給ひしてなた。俗の方のふみを見侍しにも。また内教の心を尋る中にも。夢を信すべきことばほく侍しかば。賤しきふところのうちにも。かたじけなく思ひ抱き奉りしかど。力れよばぬ身に。思ひ給へかねてなん。かゝる道に趣き侍にし。又この國のことよしづみ侍て。老の波さらけ立かへらしと思ひとじめて。此浦にとし比侍し程も。わが君を頼むことに思聞え侍しかばなん。心一つにばほくの願をたて侍し。其かへり申し平かに思

ひのこと時にあひ給ふ。若君國の母となり給て願ひみち給はん世に。住吉の御社をはじめ。はたし申給へ。さらに何事をか疑ひ侍らん。この一つの思ひちかき世にかなひ侍ぬれば。はるか西の方十萬億の國へだてたる。九品のうへの望みは疑ひなく成侍ぬれば。今はたゞ迎ふる蓮をまち侍る程ぞの夕まで。水草さよき山の末までつとめ侍らんとてなんまかり入りぬ。

ひかり出ん曉ちかく成にけり今ぞみし世の夢語する。とて月日かきたり。命終らん月日も更になしろしめしぞ。古より人のそめ置ける藤衣にもなにかやつれ給ふ。たゞ我身は變化のものどればしなして。老法師のためには。功德を造り給へ。此世の樂みにそへても。後世を忘れ給ふな。願ひ侍る所にだにいたり侍なば。必ずまた對面も侍りなん。娑婆のほかの岸に到りて。どくあひみんとばほせ。(源氏物語)

○穢土を厭うて淨土を欣ぶ 其一

人と生れて石木ならねば。皆れまじのづから情あり。古より今に至るまで。尊
 きも卑しきも。かここきもはかなきも。この道に入らぬ人はなし。入りと
 し入ぬれば。迷はずといふことなし。しかし唯心を動す色にあはざらん
 には。大凡たふん樂榮らくえいもうきもつらきも。この世は皆夢幻あやまらふの如し。八の苦遁るゝ
 事なければ。厭ひても厭ふべし。天上のたのしみ限なければ。五のれと
 ろへさる事なければ。願ふべきにも足らず。生れてもよしなし。しかし唯
 心を一にして。三界を厭ひて九品を願ふべし。極樂を願ふとも。この世に
 執とを留めば。纜りょうを解かずして船を出さんが如し。この世を厭ふとも。極樂
 を願はずば。轆りやくをそむけて車を走らしめんが如し。この世をも厭ひ。極樂
 をも願はず。苦を集めたる海を渡りて。樂を極めたる國に到らんことは
 疑ふべからず。ゆめく出で難き惡趣に歸らずして。行き易き淨土にい
 たるべし。(唐物語)

○穢土を厭うて淨土を欣ぶ 其二

九品覺王の善政をたるゝ。一念奉公の輩ならひに平等引接の賞にあつ
 かりて。諸天薩埵の僉議をなす。六賊重罪の犯都て皆空無漏の旨を奏す。
 七寶の高臺には。四十八願の主五劫思惟のひかりをはなちて念佛のも
 のをてらし。二脇の片座には。三十三尊大悲弘誓のあみをたれて苦海の
 沈没をすくふ。故に三世の佛の濟度にもれたる五逆の罪人も。願海不捨
 の舟に棹さとして彼岸にわたり。十方土の淨刹にすてられたる此界の惡
 徒も。大雄起世の翅にかゝりて西天に飛へん。あはれとく生れてみちに
 入はやな。(海道記)

○穢土を厭うて淨土を欣ぶ 其三

貧とも嗟へからず。電泡の身にいくばくのなげきをや。たのしめどもを
 てるへからず。幻化の世にいくばくのあやまりをや。たのしきは。大橋
 慢のあだなり。あさはすなはち惡趣に引きおとす。貧は又道心のさまた
 けならず。則善所に引あぐ。たのしきは先生の怨敵なり。貪着身をとばり

て四生の牽獄にこむ。貧は今生の智識なり。愛欲心をゆるして三界の樊籠を出す。此故に世をいとふ人は沙門となつて。たのしめる人どす。我等八苦のやまひはれもけれども。念佛のくすりはいえぬへし。名利の敵はうかゞふとも。非人の身を敵とせし。上界天人の快樂もこゝろにくからず。過去生々にいくたひかうけたる。國王大臣の果報もうらやましからす。流來世々にいくたびか得たる。六趣の栖はうとまはてたるところなり。九品のまやこそいまた見ねば戀しけれ。こいしくはたれか參らざるへき。

十方佛土に又ふたつなき一乘妙法に生れあひて。十惡をうとまず引接をたれたまふ阿彌陀佛を念ふ奉るは。口のあれはたゞになへおたるか。耳のあれはたゞに聞おたるか。あなあさましのやすさや(海道記)

○穢土を厭うて淨土を欣ぶ 其四

夫四生の群品いまだいやしとせず。みなれのづから佛乘の性を受けた

り。十號の尊位なんぞ望まざらん。誰れかもとより法王の御子にあらざるや。しかあれども。われら一度び自家をまごひいで。ながく他卿にとらはれてしよりこのかた。魔王譜代のやつこととして六道縦横にかり使ひにしかば。身つたなくして姓をも名をもいはず。心れろかにして父をも母をも思はずなりぬ。あやまて名利のひとやを迷境のなかにかまへ。恩愛のきづなを妄縁のうへにむすびぬる後は。安養を本國ときけども。ゆめく、飯へらん心もなく。彌陀を慈父といへども。つやくなつかしき思ひもなし。たゞ穢土の五欲をまたなき物にして。淨刹の四徳をないがしろにせり。これひとへに倒見めをくるめかし。着想こゝろを急はすによりてなり。しづかにこれを思へば。心驚悲歎にたへず。はやくこれをこしらへて父子相迎せしめんと思ふ。これが爲めに魔郷にと、こぼる迷ひをいさめて。佛國をこふる心をすゝめん。三部鈔

○迷悟一心

極樂西方にあらず。此のれの善心のますにあり。泥梨地のそこにあらず。此のれの惡念の心地にあり。彌陀うとき佛にいまさす。みつからが本有の眞性にあり。獄卒しらぬ鬼にあらず。みつからの所感の業胤にあり。雪つもりて山をなす。春の日にあたればきえてのこらす。金くだけて灰にまじる。水に入て汰ばうする事なし。罪雪ならは善心あらはれぬべし。まよへる時は目をふさぎてわか身をだにも見ず。さどるときは眼をひらいて人の體をみる。障子をへだて、あなたは十萬億土とれもへども。ひきあけたればたゞ一間のうちなり。佛性の水煩惱の風に氷れども。れもひとけば水とは誰かしらさらん。(海道記)

○三界一心

それ三界はたゞ心一つなり。心もし安からずば。牛馬七珍もよしなく。宮殿樓閣も望なし。今さびしき住居。一間の庵。みつからこれを受す。此のづから都に出で、は。乞食となれることをはづといへども。かへりてここ

に居る時は。他の俗塵に著することをあはれぶ。もし人このいへることを疑はゞ。魚鳥のありさまを見よ。魚は水に飽かず。魚にあらざればその心を知らず。鳥は林を願ふ。鳥にあらざれば。その心をしらす。閑居の氣味も又かくの如し。住まずして誰かさどらん。(方丈記)

○無常 其一

祇園精舎の鐘の聲。諸行無常の響あり。沙羅雙樹の花の色。盛者必衰の理を現す。驕れる者久しからず。只春の夜の夢の如し。猛き人も遂には亡ひぬ。偏に風の前の塵に同じ。(平家物語)

○無常 其二

行く川の流は絶えずして。しかも本の水にあらず。よどみに浮ぶうたがたは。かつ消ゆかつ結びて。久しくとゞまることなし。世の中にある人と住家と。またかくの如し。玉敷の都の中に。棟を並べ。鬩を争へる。尊き卑しき人の住居は。代々を経て。盡せぬものなれど。これをまことかと尋ぬれ

昔ありし家は稀なり。或は去年破れて今年は造りあるは大家滅ひて
小家となる。住む人もこれに同じ。處もかはらず。人もれほかれど。いにし
へ見し人は。二三十人が中に。僅に一人二人なり。朝に死し。夕に生るゝな
らひ。唯水の泡にぞ似たりける。知らず。生れ死ぬる人。何方より來りて。何
かたへか去る。又知らず。假の宿。誰が爲に心を惱し。何によりてか目を悦
ばしむる。この主人と住家と。無常を争ひ去るさま。いはゞ。朝顔の露に異
ならず。或は露れちて。花のこり。残るといへども。朝日に枯れぬ。或は花は
萎みて。露なほ消えずといへども。ゆふべを待つことなし。〔方丈記〕

○無常 其三

あら有り難の吊らひやな。風緑野に收まつて。煙條直し。雲岸頭に定まつ
て。月桂圓かなり。朝に紅顔あつて。世路に樂しむといへども。夕へには白
骨となつて。郊原に朽ちぬ。有爲の有様。無常のまこと。誰か生死の理を論
ぜざる。いつを限る習ひぞや。老少といつば。分別なし。變はるを以て期と

せり。誰か必滅を期せざらん。誰かは是を期せざらん。〔謠曲拾遺〕

○無常 其四

一生は風の前の雲。夢の間に散じ易く。三界は水の上の泡。光りの前に消
えんとす。綺瀾殿の内には。有爲の悲みを告げ。翡翠の帳の内には。有漏の
願力有りとかや。榮花は是れ春の花。昨日は盛なれども。今日は衰ふわん
りきの。秋の光り朝に増じ。夕べに滅すとか。春去り秋來つて。花散じ葉落
つ。時移り氣色變じて。樂しみ既に去つて。悲しび早く來れり。朝顔の花の
上なる露よりも。はかなき物は。かけろふの。有るか無きかの心地して。世
を秋風のうち靡き。群れ流る。田鶴の音を鳴きて。四手の田長の一聲も。誰
が黄泉路をか知らずらん。あはれなりける。人界を。いつかは離れはつべ
き。〔謠曲鍾馗〕

○無常 其五

實にや死出の山。浮世の旅に來る人は。越えてかな。ぬ道とかや。北洲の

千年。天人の五衰。其外生きとし生けるもの。何れか世には留まる。西王母か百の年。東方朔か九千歳。名のみ残りて今はなし。只何事も夢の世の頼みなきころ頼みなれ。〔謠曲紅葉〕

○無常 其六（鬼女と法師との談話）

あさましや人界に生を受けながら。かゝる憂き世に明け暮らし。身を苦しむる悲しさよ。ハかなの人の言の葉や。まづ生身を助けてこそ。佛身を願ふ便もあれ。かゝる憂き世にかがらへて明暮ひまなき身なりとも。心だよ誠の道にかなひなば。祈らずとも終になど。佛果の縁とならざらん。唯是れ地水火風の假にしばらくも纏はりて。生死に輪回し。五道六道にめぐる事。唯一心の迷ひなり。凡そ人間の。あだなる事を案ずるに。人更に若き事なし。終には老となる物を。かほどはかなき夢の世を。などや厭はざる我ながら。あだなる心こそ。恨みてもかひなかりけれ。〔謠曲安達原〕

○無常 其七

夫れ萬類轉變の理。厭ふとも更にいとはるへからず。五蘊有待の身。捨つといふとも捨てらるへし。朝に榮花を開くもの。暮に無常の風を傷む。昨は累金の家に誇る輩。今は有漏の露に化す。何を娑婆刹那の境を執して。いたつらに三途永々の苦を招かん。悲想の快樂も。八萬歳のかきりあり。況んや閻浮不定の境に於てをや。是を案するに三界の果報は苦を以て樂とす。六趣の輪廻は業に依りて果をひく。人間萬事。見ても空しく。聞きてもれろかなり。〔鴉鷲合駁物語〕

○輪廻 其一

それ十二因縁より。二十五有の沈淪。生しては死し。死しては生し。流轉にめぐる事。生々の親子誰か又自他ならん。然れば羊鹿牛車に乗り。火宅の界を出てすして。煩惱業苦の三つの綱に繫かれ來ぬるはかなさよ。〔謠曲奉養〕

○輪廻 其二

夫れ十二因縁の流轉は車の庭に廻るか如し。鳥の林に遊ふに似たり。前生又前生。曾て生生のさきを知らず。來世なほ來世。更に世々の終りをわきまふる事なし。或は人中天上の善果を受くといへども。顛倒迷妄して未だ解脱の種を植ゑず。或は三途八難の惡趣に墮して患にさへられて。既に發心のなかつちを失ふ。凡そ心なき草木。情ある人倫。いつれあはれを遁るへき。かくは思ひ知りなから。ある時は色に染み。貪着の思ひ淺からず。又或る時は聲を聞き。愛執の心いと深き。心に思ひ口にいふ。妄舌の縁となる物を。實にや皆人は。六塵の境に迷ひ六根の罪を作る事も。見る事聞く事に。迷ふ心なるへし。〔謠曲江口〕

○輪廻 其三

夫れ過去遠々の昔を思へば。いつを衆生の始と知らず。未來永々の流轉。更に生死の終りもなし。然るに二十五有の内。何れか生者必滅の理に洩れん。先づ天上の五衰より。須彌の四洲のさまへ。北州の千年つひに

朽ちぬ。いはんや老少不定の境。歎きの中の歎きとかや。〔謠曲楊貴妃〕

○因果の理 其一

夫人のうまれたるは庭にれつる木葉の風にうごくか如し。風やみぬればうごかず。死と思へば旅に出る行客のやどにどまるがごとし。こゝにわかれぬといへども。かこしこにはうまれぬ。たゞ煩惱のうらみのみさる事をかなしみ。愚痴の心をくらさる事をうらむへし。はやく別れををしまん人は。再會を一仙の國に約し。恩をこびんひとは。追福を九品のみちに訪ふへし。

記

今更になになげくらん末の露もどよりきえん身とはしらすや〔海道

○因果の理 其二

竊に以れば眞如一色なり。誰れか黑白を論せん。法身無相なり。何を善惡をわかつたん。然りといへども。元初一念の冥闇。忽ち本來具足の佛を失し。

顛倒無明の妄雲。徒に常住如法の月を隠してより以來。三界六道の沈落其期を知らず。爰に我等愍に多生の善因に酬い。東土に生じ。幸に西教に逢ふとを得たり。寔に是れ優曇の相現。盲龜の浮木。喜ひて有りあるもの哉。而して今一善の蓄なく。石火早く敲きて。泡沫を空しく散せん後。阿鼻烟燃の栖を想像すれば。從類多しといふとも。誰か黄泉の遠旅に伴はん。親族睦しといふとも。何う焰羅の裁斷を助けん。彼を思ひ此を案するに。寤寐安き心なし。鴉鷲合戰物語

○心の鬼 其一

きのふもいたつらに過ぎ。今日も空しく暮れなんとす。無常の虎の聲肝に命じ。雪山の鳥鳴いて思ひを痛ましむ。一生の唯夢の如し。誰れか百年の齡を期せん。萬事は皆空し。いつしか常住の思ひをなさん。命は水上の泡風に随つて經めくるか如し。魂は籠中の鳥の開くを待ちて去るに同じ。消ゆるものは二度見えず。去る者は重て來らず。須臾に消滅し。刹那に

離散す。恨めしきかなや。釋迦大師の懇勸の教を忘れ。悲しきかなや。閻魔法王の訶責の言葉を聞く。名利身を助くれとも。いまた北邙の煙を免かれず。恩愛心を惱ませとも。誰か黄泉の責に隨はさる。是か爲に馳走す。所得いくばくの利をや。是によつて追求す。所作多罪なり。暫く目を塞いて往事を思へば。舊友皆亡す。指を折て故人をかそふれば。親疎多くかくれぬ。時移り事去つて。今なんを渺茫たらんや。人どくまり我行く。誰か又常ならん。三界無安。猶如火宅。天仙尙し死苦の身なり。いはんや。下劣貧賤の報に於てをや。などが其罪輕からん。死に苦しみを受け重ね。業に悲しみ猶添ふる。さんすい地獄の苦しみは。春禱にて身を斬る事。截斷して血狼籍たり。一日の其内に萬死萬生たり。劍樹地獄の苦しみ。手に劍の樹をよどれば。百節零落す。足に刀山踏む時は。劍樹共に解すとかや。石割地獄の苦しみは。兩崖の大石もろくの罪人を碎く。次の火煩地獄へかうへに火燄をいたくけは。百節の骨頭より。燄々たる火を出たす。或る時へ焦

熱大焦熱の燄にむせひ。或る時は紅蓮大紅蓮の氷に閉ちられ。鐵釘頭を
 ください。火燥あなうらを焼く。飢ゑては鐵丸を呑み。渴しては銅汁を飲む
 とかや。地獄の苦しみは無量なり。餓鬼の苦しみも無邊なり。畜生修羅の
 悲しみも我等にいかで増さるべき。身より出たせも科なれど。心の鬼の
 身を責めて。かやうに苦しみをは受くるなり。月の夕べの浮雲は後の世
 の迷ひなるべし。後の世の闇をは何と照らすらん。胸の鏡よ心にこすな。
 (謡曲歌占)

○心の鬼 其二

東國にさまよひ行子あり。本のみやこを別れて。假りのやどにふせり。西
 刹に訪尋る母います。あはれくもどめて彼國に導くを。其母といひます
 佛は三字の名號を子共に授けて。三因佛性のかくれたるをよび出さ。十
 念の來迎を最期にちぎりて。十地證王の位につく。身力よひきものよは。
 他力をあたへてこれをすくふ。たふれふしたる赤子を親のいだくかこ

とし。念緒つよき願船にすがりてみづからすゝむ。驥につく蠅の千里に
 翔るかことし。されども。具縛の浮身は一榮の肴にすゝめられて。三毒の
 酒に酔ふす。世路の險難につかれて。佛界の正道にまよはず。妻子をれも
 ふ心。冥にくらまさされて。心佛のひかりをへたてたり。菩提の鹿は罪業の
 山にかくれて。駈どもいまた出でず。煩惱の虎は功德の林をわけて追へ
 どもかへらず。睡眠の閨にあかつきの鏡の聲うちれどろかせども。諸行
 無常の告をさとりす。遊戯の床には暮の日さしれどろかせども。分段の
 有爲のとわりをわきまへす。老少不定の悲の。眼にさへきりて雲のこと
 くにさはげども。心空にしてれもはず。先後相違のわかれば。耳にみちて
 風のことくにひびけども。聞つれなくしてあはれます。老たるを。老たれ
 ばいよく。餘命ををしみ。わかきは。若ければ實に將來を期す。其間山水
 遊になかれて終に泉にかへる。風煙命滅て忽に冥途にまどひぬ。貯持財
 はをしめども。になはず。養居僮僕ハ哭すれども。隨はず。終に天使にめさ

れて。地獄に落ちぬれば。冥路山さがし。嬰兒のあゆみにたゞよひて。ひとり行く。黄泉水はやし。單己のわたりに溺れて身をながす。かなしきかなく。獄卒の呵責にかゝりて。後悔魂をくだき。琰王の斷罪にをのゝきて。前非の舌をまく。悪行はちをあらはす鏡の中の影。自業のむかへは陳もかたし。札上の文。嗚呼十八猛鬼の忿怒と怒れる聲。天雷のれちかゝるかことし。六十四眼の睚眦とにらめる眼。熱鐵のほとばしるに似たり。逃けんとすれども逃るにむなし。刃のふるところ。よけんとすれどもよけられず。焰にむせふとき。心うきかな。猛火の薪となりて。萬億歳罪根山の林。夏ひさし。寒嵐の水に沈て無量劫業報池の波春に別れたり。我等の前罪。こゝに謝せずば。後悔またいかゞせん。こゝろあらん人。たれかかなしまさらんや。

見ねはにやいたき心もなかるらん。さくも身にたつづるきはの枝

(海道記)

○心の暗 其一

此世の名残夜も名残死に行く身を譬ふれば。仇が原の道の霜。一足づゝに消て行く。夢の夢こそ哀れなれ。あれ數ふれば。曉の七ツの時か六ツ鳴りて。残る一ツが今生の鐘の響きの聞納め。寂滅爲樂と響くなり。鐘ばかりかは草も木も空も名残と瞰上れば。雲心なき水の音。北斗は映て影映る。星の妹脊の天の川。梅田の橋を鵲の橋と契りて。何時までも。我と和女は夫婦星。必ず添ふと。継寄り。二人が中に降る。涙河の水嵩も増るべし。向ふの二階は何やとも。覺束情最中にて。未だ寝ぬ火影聲高く。今茲の心中。善惡の言の葉種や繁るらん。聞くに心も。吳羽鳥あやなや。昨日今日までも。餘所に言ひしが。明日よりは。我も噂の數に入り。世に謠はれん。謠はゞ謠へ。謠ふを聞けば。どうで女房にや持やさんすまい。いらぬものじやと思へども。實に思へども。歎けども。身も世も思ふ儘ならず。何時を今日とて。今日か日まで。心の舒し。夜半もなく。思はぬ色に。苦しみに。如何した事

の縁じややら忘るゝ暇はないわいな。それに振振て行ふとは遣やしま
せぬそ手にかけて殺して置いて行んせな。放ちはやらじと泣ければ唄も
多きに彼の唄を時こそあれ今宵しも。謠ふは誰ぞや聞くは我過じ人
も我々も。一つ思ひと絶付き。聲も惜ます泣居たり。平常は左もあれ此夜
半はせめて暫は長からで。心も夏の夜のならひ。命追ゆる雞の聲。明なば
うしや天神の森で死んど手を引て。梅田堤の小夜鴉。明日は我身を餌食
ぞや誠。に今歳は此方様も。二十五歳の厄の年。妾も十九の厄年とて思ひ
合ふたる厄崇り。縁の深さの験しかや。神や佛にかけ置し。現世の願を今
此處て。未來へ回向し。後の世も。猶しも一つ蓮ぞやと。爪繰る珠數の百八
に。涙の玉の數添て。盡せぬ哀れ盡る道心も。空も影暗く。風しんくたる
曾根崎の森にぞ辿り着けける。近松曾根崎心中

○心の暗 其二

走り書謠の本は近衛流野郎帽子は若紫惡所狂ひの身の果は斯なり行

と定まりし。釋迦の教も有とか。見たし憂身の因果。經明日は世上の言草
に。紙屋治兵衛が心中と。仇名散り行く櫻木に。根彫葉ぼりを繪双紙の版
摺紙の其中に。有共しらぬ死神に。誘はれ行も商賣に。疎き報と觀念も。ど
すれば心ひかされて。歩行悩むぞ道理なる。頃は十月十五夜の月にも見
えぬ身の上は。心の闇の験かや。今置霜は明日消る。果敢なき譬の夫より
も。先へ消行闇の中。最愛可愛と締て寝し。移香も何と流の蜺川。西に見て
朝夕渡る此橋の天神橋は。其昔昔相丞と申せし時。筑紫へ流罪給ひしに。
君を慕ひて太宰府へ。たつた一飛梅田橋跡。老松の縁橋。別れを歎き悲み
て。跡に撞る櫻橋。今に咄しを聞渡る。一首の歌の御威徳かゝる尊き荒神
の。氏子と生れし身を持って。其方も殺し我も死ぬ。元はと問へば分別のあ
の可憐な貝殻に。一杯もなき蜺橋短かき物は。我々が此世の住居秋の日
よ。十九と廿八の。今日の今宵を限りて。二人命の捨所。爺と婆との末迄
も。まめで添はんと契りしに。丸三年も馴染いで。此災難に大江橋あれみ

や浪花小橋から舟入橋の濱傳ひ是迄來れば來る程は冥途の道が近付
ど歎けば女も縋り寄りもう此道が冥途かど見かはす顔も見えぬ程落
る涙に堀川の橋も水にや浸るらん北へ歩行ば我宿を一目に見るも見
歸らす子供の行方女房の哀れも胸に押包み南へ渡る橋柱數も限らぬ
家々をいかに名付て八軒家誰と伏見の下り舟着ぬうちと道急く此
世を捨て行身には聞も恐し天満橋淀と大和の二川を一つ流の大川や
水と魚と同伴て行我も小春と二人連一つ刀の三つ瀬川手向の水に受
たやな何か歎かん此世でこそは添す共未來は云ふに及す今度のく
づと今度の其先の世迄も夫婦ぞや一つ蓮の頼みには一夏に一部夏
書せし大慈大悲の普門品妙法蓮華京橋を越れば到る彼岸の玉の臺に
法を得て佛の姿に身をなり橋後生濟度か儘ならば流の人の此後は絶
て心中せぬやうに守りたいぞと及びなき願ひも世上の世迷言思ひや
られて哀れなり野田の入江の水煙り山の端白くほのくどあれ寺々

の鐘の聲。とうく斯していつ迄かとても存命はてぬ身を最期急ん此
方へと手に百八の珠の緒を泪の玉の繰ませて南無阿彌島の大長寺鼓
の外面のいさゝ川流れ漲る樋の上を最期所と着にける。近松天の細島
○心の暗 其三
且して雛衣は涙を歛め身を起して裳引合し引揚て柳の腰に柳茶の副
帶楚と締直しても空に歸れば花もなき庵をなほも見かへりて喃角太
主々々々。とてもかくてもこの世では得添れぬは前世で造りし罪の報
い來て。あかぬ別れに身を殺す因果と思ひ締め侍れは恨みは絶てあら
すかし。むかしよりして腹黒く。伎倆る人の誣言に罪ならぬ罪を得給ひ
し。賢人も多かれど終には霽る。雨後の月光りは世々に顯れて。おまそ
かりける時に優す例を引くに侍らねど。人の心に誠なくて命を捨る者
やは侍る。死しての後にわらはが胸を裂も發もし給は。かの疑ひの解
ずやあらん。その折にこそ又舊の妻と思うて朝夕に。只一遍の唱名も。ね

ん身の回向を受侍らば。道德智識の十念にも。萬卷千寫の讀經にも。優て成佛しはべらん。今より久しき事ながら。れん身の齡百歳の後を侍て臺なす。蓮華を釐て俟んのみ。さらばとはかり告別。聲は涙に結隠る。天さへ秋の雨催ひ。捨られぬ世をふり捨て。死天の旅路へいそかんと。思ひ訣めてかへいゆく。うたてや妻の後影は。庵の中より見えねども。聲は定かに挾牡鹿の夢野もかくや。角太郎。妻子珍寶及王位。臨命終時不隨者と。悟果ても活る身の。人木石にあらざれば。方寸の海に浪立て。心耳に風は吹ねども。合掌の拳搖動きて。口に銜し松の葉も颯々として。靡くが如く。斷腸の氣色顯れしを。忽地思ひかへし。けん寂莫として。音もせずなほも行ひ清しけり。(八犬傳)

○初夜の念佛(關白道長建立の無量壽院に於て)

やうく西日の入るほどに。例の御念佛とて。方々より僧達参りあつまる。遅くまゐるをば。承仕堂童子などいきつゝ。そゝのかしまゐらす。その

時になりぬれば。殿の御前にはしましぬ。この殿ばら。外のなども數多参り給へり。をかしき男子。童女など仕うまつれり。れはしませば。この御堂の僧たち下りさぶらふ。御念佛はしまりぬれば。殿の御前をはじめ奉り。僧二十人ばかりめぐり給ふ。殿ばら皆高欄にれしか。りてれはす。花籠に花のあれば。例の尼君のかと仰せられて散らさせ給ふ。この花を御覽じて。殿ばらあはれなる尼なり。三時の花の宮仕をつかうまつる。いかに功德得らんと。給はすれば。殿の御前もいみじき尼なりとの給はす。西日の程になれば。御堂の金物。所々のみはしの金物どもきらめきて。池の面に映れるもめでたし。風すこしうち吹けば。御念佛の聲に響きて。池の浪も五根五力七菩提分八聖道をのぶときこえ。止む日もなく菩薩の聲に答ふれば。草木すら皆法をとくと聞ゆ。三聚淨戒はしらし。池の風も涼しきに。思ひあつかふ煩惱の焰を皆滅しぬ。とれもほゆ。御念佛はて。聲よき僧の廻向申したる。いみじうたふとき。春宮大夫殿奉りたる香染

の御衣をかづけさせ給ふ。果てぬれば殿のたまへ。御堂の事などればせられて。人々しばしいで給へ。心のどかに念佛せんどのたまはすれば。殿ばらも御かたかくにかへらせ給ひぬ。殿のたまへ御念佛させ給ふ。そのほど禮盤に僧一人候ひて。經讀みたてまつる。かゝる程に入相の鐘れどろくしければ。交野の尼君

今日くれて明日もありとな頼みそとつきれどろかす鐘の聲かな
(榮花物語)

○後夜の懺法(前に同じ)

後夜の御懺法のをりに参りあはんど思ひて。夜のおくるもいつしかと。心もどなく目をさまして聞くほどに。鶏の鳴くも嬉しくて。たけくまの尼君。

のりを思ふ心の深き秋の夜はなくどりのねもうれしかりけり
 山の井の尼君。

いにしへはつらく聞えしどりのねの嬉しきさへぞものは悲しき
 といへば。尼君たちいかなればつらくればされしといへば。いなや昔を
 かしき人とうちふして物語せしに。千夜を一夜にとれもひしに。どりの
 鳴きしはいかゞつらかりしといへば。げにとてわらふ。この中に若き人
 ひどりまじりたり。夜深く参りてまだ暗からんにまか。でなんとて。わざ
 とならずしどけなげなる衣のつまをとりて参るさまも。さすがにをか
 しう見ゆ。南の大門より入りて参れば。八月廿餘日のほどにて。有明の月
 のすみのぼりたる。いみじうめでたく見ゆれば。かの靈鷲山の曉の空も
 思ひやられたり。また池の鏡のやうなるに。影をどめたる月も。いみじ
 うめでたく見ゆれば。若き人。
 うらやましかばかりすめる池水にかけならべたる有明の月
 交野の尼君

れほそらと池の水とにかよひすむ有明の月も西にこそゆけ

たけくまの尼君。

池水にすめるありあけの月を見て西の光をれもひやるかな
観無量壽經の十六想觀思ひ出でられてよそへられ給ふ池のめぐり中
島御堂々々のねまへの前裁に露の玉のやうに閃きて見ゆる佛の瓔珞
に思ひよそへてめでたし蟲も聲々よりあはせてなくもたゞならずき
こゆ西の中門の南の方に檜皮ぶきのさゝやかなる御堂ありかれは三
昧堂ぞかしいざ参らんとてゆけはみあかしの光ほのかに見えて轉法
輪の座に僧おたり普賢いとさゝやかにて象に乗りてたゞせ給へるも
いかめしうねはします佛よりもかく一所にたゞせ給へる顯れ給へら
んすがた思ひやられてめでたう見えさせ給ふに聞けは法師品の清淨
光明身のわたりをぞ讀むなるいとねふたげなる聲に後の方より貝を
いとおどろくしうふき出でたればうれしきかひの聲に目をさまし
つるといふ尼たちしはしのぼりて簀子にゐてまかづとて我昔所造諸

惡業皆由无始貪恚癡從身語意之所生一切我今皆懺悔など誦してまか
でぬ阿彌陀堂に参りたれば御懺法のをりなりけりあなうれしと思ひ
て御階にのぼりて佛を見たてまつれば無數の光明かゝやきて十方界
に遍じ給はんと見え給ふかの往生要集の文を思ひいづ七寶の階にひ
さまづきて萬徳の尊容をもち一實の道を聞きて普賢の願海にいる歡
喜の涙を流し偈仰骨をとほす頓首してきけべ六根懺悔のわたりなり
けりいみじうたふとし殿の御前の御聲はあまたに交らせ給はずあな
たふとしう聞えたり事果てゝ聲よき僧どもの過去空王佛眉間白毫相
彌陀尊禮拜滅罪今得佛と誦したるいみじうたふとくおもしろし(榮花
物語)

○中陰の法事(夕顔の四十九日)

かの人の四十九日忍びて比叡の法華堂にてことぞがすさうぞくより
はじめてさるべきものどもこまかに誦經などせさせ給ふ經佛のかざ

りまでれるかならず。惟光があれに阿闍梨あせりいとたふとき人にてはなう
しけり。御文ごぶんの師にてむつまじくればす文章博士ぶんしょうはくしめして願文がんぶんつくらせ
給ふ。その人となって哀と思ひし人のはかなきさまになりたるを。阿
彌陀佛あみだぶつにゆづり奉るよし。あはれげにかき出で給へれば。たゞかくなが
らくはふべきこと侍らざめりと申す。くのび給へど。御涙もこぼれて。い
みじくればしたれば。なに人ならん。その人とは聞えもなくて。かうれば
しなげかすばかりなりけん。宿世しゆくせいのたかきよといひけり。しのび調てうせさ
せ給へりける装束まうそくの袴はかまをとりよせ給ひて。

なくくどけふは我われゆふしたひもをいづれの世にかとけて見るべ
き

此程まではたゞよふなるをいづれの道に。さだまりて趣くらんと。れも
ほしやりつゝ念珠ねんじゆをいと哀にし給ふ。源氏物語

○最後の佛名（光源氏の最後）

御佛名ごぶつなもことしばかりにこそはとればせバにや。常よりも殊に錫杖せきじやうの
こゑくなどあはれにればさる。行すゑながきことを請ひ願ふも。佛の
きゝ給はんことかたはらいたし。雪いたうふりて。まめやかにつもり
けり。導師のまかづるをたまへにめりて。盃さきなど常の作法さくぽうよりも。さしわ
かせ給ひて。ことに祿ろくなど給はず。としごろ久しく参り。公けにも仕りて。
院にも御覽ごらんしなれたる御導師の。かしらはやうく色變りてさふらふ
を。哀におぼさる。例の宮達。上達部じやうたつべなどあまた参り給へり。梅の花のわづ
かに氣色はみはしめて。雪にもてはやされたる程をかしきを。御遊ごゆうひな
どもありぬべけれど。猶なほことしまては物の音ねもむせぬへき心ちし給へ
ば。時によりたる物打ち誦じゆしなどばかりぞせさせ給ふ。まことや導師の
さかづきのついでに
春までの命いのちもしらす雪のうちうちにいろつく梅をけふかざしてん
御かへし

千世の春みるべき花と祈りたきて我身を雪とよもにふりぬる
人々たほくよみれたれどもらじつ。(源氏物語)

○佛堂の供養(源氏の通ひける女三宮衛門督と)
の不義顯て尼となりし方の佛堂)

夏ころ蓮の花の盛に。入道の姫宮の御持佛どもあらはしいで給へる。供養せさせ給。この度はたゞの君の御心さして。御念誦堂の具ども。こまかにとゞのへさせ給へさせ給へるを。やがてしつらはせ給。幡のさまなどなつかしう。心ことなるからの錦をえらびぬはせ給へり。紫の上ぞいそさせさせ給ける。花づくゑのれほひなど。をかしきめぞ目もなつかしう。清らなるにほひ染めつけられたる心ばえ。めなれぬさまなり。夜の御丁のかたびらを四面ながらあげてうしろの方に。法花曼荼羅かけ奉りて。まろがねの花瓶に。高くことくしき花の色をとゞのへて奉れり。名香には唐の百歩のかうをたき給へり。阿彌陀佛。脇士の菩薩。たのく白檀してつくり奉りたり。こまかにうつくしげなり。阿伽の具は例のき

はやかにちいさくて。青き白き。紫の蓮をとゞのへて。荷葉の方を合たる名香。蜜をかくしほろゝげて。たきにほはしたる。一つかをりに匂ひあひて。いとなつかし。經は六道の衆生のため。六部かゝせ給て。みづからの御持經は。院ぞ御手づからかゝせ給ける。これをだに。此世の結縁にてかたみに導きかはし給べき心を。願文につくらせ給へり。さては阿彌陀經唐の紙はもろくて。朝夕の御手ならしにもいかゞとて。かんやの人をめて。して。殊に仰事給ひて。心こと清らにすかせ給へるに。この春の比ほひより。御心とゞめていそぎかゝせ給へるかひありて。はしを見給人々。めもかゞやきまどひ給ふ。塚かけたる金のすぢよりも。すみづきのうへに。かゞやくさまなども。いとなんめづらかなりける。軸へうし。箱のさまなど。いへばさらなりかし。これはことし沈の花足の机にすゑて。佛の御たなし帳臺の上にかざられ給へり。堂がざりはて。講師まうのぼり。行道の人々まねりつどひ給へば。院もあなたに出て給ふとて。宮のたはしま

す西の廂いさまにのぞき給へれば。せばき心おするがりのしつらひに。所せくあつげなるまで。ことぐしくさうぞきたる女房五六十人ばかりつどひたり。北の廂のすのこまで。わらはべなどはさまよふ。火取ひきどもあたゝして。けふたきまであふぎちらせば。さしより給ひて。空まに焼くはいづくの煙ぞと思わがれぬこそよけれ。富士の峯よりもげにくゆりみち出たるは。ほいなきわざなり。講説かうせつのをりは。大方のなりをしづめて。のどかにものゝ心もきゝわくべきことなれば。憚りなききぬの音なひ。人のけはひしづめてなんよかるべきなど。例の物ふかゝらぬわか人どもの用意をしへ給。宮は人げに壓おされ給て。いとちいさくおかしげにてひれふし給へり。若君らうがはしからん。いだきかくし奉れなどの給。北の御障子かざりもどりはなちてみすかけたり。そなたに人々はいれ給。しづめて宮にも物の心しり給べきしたかたを。きこえしらせ給。いとあはれに見ゆ。たましをゆづり給へる佛の御しつらひみやり給も。さまぐにかゝるかたの

御營みをも。もろともにいそがんものとは思よらざりし事なり。よし後の世にだにかの花のなかのやどりやどりに隔へなくとれもほせとて。うちなき給ひぬ。

はちす葉をねなし臺とちきりたきてつゆのわかるゝけふぞ悲しきと御硯いんにさしぬらして。かう染そなる御扇あふぎよかきつけ給へり。みや。

隔なく蓮のやどをちきりても君がこゝろやすまじとすまんどかき給へれば。いふかひなくもれもほしくだすかなど。うちわらひながら。猶哀と物をれもほしたる御氣色なり。例のみこだちなども。いとあまた参り給へり。御方々より我もく々と營み出給へる。御捧物たもとのありさま心ことじ。所せきまでみゆ。七僧の法服などすべて大方の事どもは。みな紫の上せさせ給へり。あやのよそひにて。袈裟けさのぬひめまで。みしる人ハ。よになべてならずとめでけるとや。むつかしうこまかなること共かな。講師かうしのいとたふとく。事の心を申て。此世にすぐれ給へるさかりをい

どひへなれ給て。ながき世々にたゆまじき御契を法華經に結ひ給。貴く深きさまをあらはして。たゞ今の世に才もすぐれ。寛き辨舌をいど心していひつゞけたる。いと貴とければ。さな人々しほたれ給。これはたゞ忍びて。御念誦堂のへじめと覺したる事なれど。うちにも。山の御門もきこしめして。みな御使どもあり。御誦經の布施など。いと所せきまで。俄になん事ひろひりける。院にもうけさせ給へりける事共も。そぐと覺し。かど。尋常ならさりけるを。まいていまめかき事共の加はりたれば。夕の寺よれき所なげなるまで。所せき勢ひになりてなん。僧どもは販りける。源氏物語

○賀壽の法事（紫上源氏の四十一の賀の爲に）

神無月に對のうへ。院の御賀に嵯峨野の御堂にて。藥師佛供養し奉り給。いかめしき事は。更にいさめ申給へば。忍びやかにとれぼし置てたり。佛經をて。帙篋のどこのへ。まことの極樂を思ひやらる。最勝王經。金剛般若

壽命經など。いと寛けき御祈りなり。上達部いと多く参り給へり。御堂のさま面白くいはんかたなく。紅葉のかけ。わけ行のべの程よりはじめて。みものなるに。かたへはきほひ集り給ふなるべし。霜がれ渡れる野原のまゝに。馬車の行かよふ音しげく響きたり。御誦經我もくど。御方々いかめしくせさせ給ふ。源氏物語

○御修法 其一（安徳天皇御座の時）

治承二年十一月十二日寅時より。中宮の氣御座すと詈りけり。平家の一門は不及申。關白己下公卿殿上人馳せ参り給ひけり。法皇も西面の北の門より御幸あり。御驗者には覺房昌雲兩僧正。俊堯法印。豪禪實全兩僧都なり。其上法皇も内々は御祈りありけり。

又仁和寺の守覺法親王孔雀經の御修法。天台座主覺快法親王七佛藥師の法。寺長東圓惠法親王金剛童子の法。此外諸寺諸山の名徳知法の仁に仰せて大法秘法數を盡くされけり。五大虚空藏。六觀音。一字金輪。五壇の

法。六字訶利帝。八字文珠。普賢延命。大熾盛光等に至るまで。残る所なし。佛師の法印召して。等身の七佛藥師并に五大尊の像造立せらる。御誦經物には。御劔御衣諸寺諸社へ進らせらる。

新大納言成親卿。法性寺執行俊寛。西光法師等が靈ども。御物付に移りて。様々に申す事共ありて。御産も成らすと申ければ。入道二位殿共。彌魂を消し心を碎き給へり。係りければ。様々御願を立てられけれ共。其驗もなくして。遙に時刻れし移りければ。御驗者面々に僧伽の句共あげて。我寺々の三寶。年來所持の本尊責め伏せ奉りければ。振鈴の聲大内に満ち。護摩の煙虚空にあがる。いかなる惡靈邪神も争てか障碍をなすべきとぞ見ゆし。諸僧の心中推量られて。貴かりけるに。猶其効し見えさりけり。法皇御几帳近く居寄らせ御座して。千手經をぞあそべしける。餘りの忝さに身の毛豎ち。涙を流す人もありけり。躍り狂ふ御よしましの縛共も。少し打しめりたり。勅定には。いかなる御物氣なり共。老法師かくて侍ら

んには。争か可奉近付。我聞く阿遮一腕の窓の前には。鬼神手を束ねて降を乞ひ。多齡三啜の床の上には。魔軍頭を振りて。恐を成すと。況や觀音無畏の利益をや。千手神呪の効驗をや。而るに今顯はるゝ所の怨靈といふは。盛親俊寛西光等なり。皆朕が朝恩によりて。官位俸祿に預りし輩に非すや。縦ひ報謝の心こそ存せざらめ。豈に障碍をなすに及はんや。其事不可然速に罷り退き侍れと仰せられ。女人臨難生産時。邪魔遮障苦難忍。至心稱誦大悲呪。鬼神退散安樂生と貴くあそばして。御念珠さらくど押し揉せ御座しければ。御産やすくと成らせ給ひにけり。(源平盛衰記)

○御修法 其二 (井上俄に絶入りし時)

たえ入り給ぬとて人參りたれば。更に何事も覺しわかれず。御心もくれで渡り給。路の程も心もどなきに。げにかの院は。ほとりの大路まで。人たちさわぎたり。殿の内なきのゝしるけは。ひいとまがくし。われにもあらで入り給へれば。日比は聊かひまみえ給へるを。俄になんかくればし

ますとて候ふ限りは。我もれくれ奉らしと。まどふさまも限なし。御修法どもの壇こぼち。僧なども。さるべきかぎりこそまかでね。ほろくど騒ぐを見給ふに。さらを限にこそはと覺しは。つるあさまじさに。何事かはたぐひあらん。さりとも靈氣のするにこそあらめ。いとひたぶるにた騒ぎそと鎮め給ひて。いよくいみじき願どもを立て添へさせ給。勝れたる験者どもの限り召し集めて。限ある御命にて。この世つき給ひぬども。只今暫しのどめ給ひ。不動尊の御もとの誓あり。その日敷をだにかけ留め奉り給へど。頭より誠に黒烟を立て。いとじき心を起して加持し奉る。院も只今ひとたび目を見合せ給へ。いとあへなく限りなりつらん程をだに。え見すなりけること。の悔しく悲しきを。と覺し惑へるさま。とまり給ふべきにもあらぬを。見奉る心ちども。唯推しはかるべし。いみじき御心の内を。佛も見奉り給ふにや。月比さらに現れ出で來ぬ靈氣。ちいさき童に移りて。よばひのゝじる程にやうく。いき出で給ふにも。嬉

しくもゆゝしくも覺し騒がる。(源氏物語)

○道場(無量壽院)

又参りて見れば。かの十方諸佛雲集院。他方道俗菩薩院。緣覺十二因緣院。聲聞四諦習學院など様々あらんやうに。ある所を見れば。法華經の不斷の御讀誦とて。さるべき何阿闍梨。何某の供奉などいふ四五人。おてよみひびかせば。そこに立ちとまりて。聞きたてまつれば。哀れにたふとくて。こゝに只今多寶如來出現し給はんか。と覺えて。願我生々盡未來。上士くちう法華經住。衆生皆弘誓攝。西方安樂國。とうち拜み奉りて。又ある所を見れば。長日御修法とて。阿闍梨伴僧十二人ばかりして。白き淨衣を着て行ふ。ある所を見れば。大般若の御讀經とて。年老いやんごとなき僧たち十人ばかりおて讀み奉る。又ある所を見れば。五大力菩薩をかけ奉りて。仁王經を講じ奉る。ある所を見れば。曼陀羅を懸け奉りて。阿彌陀の護摩尊勝の護摩をれこなふ。又ある所を見れば。藥師經。壽命經などの御讀

經。又ある所を見れば。僧二三十人ありて。涅槃經六十卷などの轉えん翻ばんしてよむ。又ある所を見れば。小法師七八人計聲をあはせて。俱舍を誦し唯識論をうかふ。又ある僧坊を見れば。美しげなる男子おとこども。千字文を誦し習ひ孝經を讀む。かうやうにして。各所々聲をどゝのへ讀み誦しのゝこれど。こゝの聲かしての音。皆さまゞまぎれず。その事かの事と聞きわかれて。哀れとふとくめでたき事。淨土もかくこそはと推し測らるゝに。又いとたふとし。(桑花物語)

○修學(道長公の時)

御世のはじめよりして。年ごとの五月には。やがてついたちよりつてもりまで。無量義經よりひじめて。普賢經に至るまで。法華經廿八品を。一日よ一品をあてさせ給ひて。論義をさせ給ふ。南北二京の僧綱。凡僧學生。數をつくしたり。やんごとなくれとくるは。僧正あるは聽衆二十人。講師三十人召し集めて。法服配らせ給ふ。論義の程などいとはしたなげな

り。こゝらの上達部殿上人。僧どものきくに。山にも奈良にも。學問にかたどれるは。老いたる若きいはず召し集むれば。只今はこれを公私こうしのまじらひのはじめと思ひ。めさるゝをば面目にし。さらぬをば口をしきことに思ひて。あるは學問をし。あるは燈火とうかをかゝげて經論をならひ。あるは月の光に出で。法華經をよみ。あるは暗きには空にうかべ誦しなどして。ひねもすに夜もすがらに營み習ひて。參りあひたるに。經を誦し論義をするに。勝負しょうぶのほどをきこしめしり。このきく人々の僧たちの才の程を定め。この方知り給へる殿ばらは。さしいらへ給などして。うちわらひ給へるほど。めでたうもはづかしげにも。月の夜花の朝には。物の音を吹き合せしらべ。この殿ばら僧たち。經の中の心を歌によみ。或は文に作り。或はかの百千萬劫の菩提の種。八十三年の功德の林。又ねかはくは。今生けいせい世俗文字の業。狂言綺語きごのあやまりをもてかへりて。當來世々の讚佛さんぶつ乗の因。轉法輪てんぽんりんの縁と誦し給ふもたふとくれもしろし。まいて御戒うけ

あまた度になりぬれば。御衣の袖に一乗の玉をかけて。御けしきどもあ
きらかなり。皆經の心を讀みたまふ。四條大納言の御歌。中にも世につた
はり。興をとめたり。壽量品の常在靈鷲山を

出でいると人は見れども世と共に鷲の峯なる月はのどけし
又普門品

世を救ふうちには誰か入らざらんあまねき門を人しさとねば
これをあつまりて誦し給ふもげにときこゆ。さても同じ心一筋なれば
かゝず。あるは供養法の御讀經とて。眞言の心ばへありときこしめすを
ば。世に出でたるも。山にこもり寺に居たるをも尋ね召しいづれば。この
方をたつる人々は。いと戒律をまもりて。鉢の油を傾け。眞言をみがき
て瓶の水をうつし。萬にしたてゝ召し入れられて。眞言の趣深さ淺さの
ほどをわき聞しめして。僧たちにさだめ給はせて。その方にまこと深
うして。顯密ともにあきらかなるをばかれすまねど。あさりのけもん

をはなたせ給ひ。公私の御師となさせ給ふ。或は官々の御祈禱御讀經の
事を申しつけさせ給へば。かゝる御世に逢ひたるを。空しくすべからず
と思ひて。劣らしまけじと。その方を勤め行ふ。かゝる程に法の燈火を掲
げ。佛法の命をつがせ給ふになりぬれば。嬉しく明なる御世にあひて。く
らきより暗きに入れる衆生ども。この御光に照されてよろこびをなす
(榮花物語)

○歌は陀羅尼

それ神は人の敬ふによつて威を増し。人は神の加護によれり。されば樂
しむ世に逢ふ事。是れ又總持の義によれり。言葉少なりして理を含み。三
難耳絶えて寂念閑定の床の上には。眠り遙かに眼を去る。是によつて。本
有の靈光忽ちに照らし。自性の月やうやく雲をさまれり。一首を詠すれ
ば。よろづの惡念を遠ざかり。天を得れば清く。地を得れば安し。あらかじ
め。唯一實相。唯一金剛とは説かずや。されば天竺の婆羅門僧正は。行基

菩薩の御手を取り。靈山の釋迦の御許に契りて、眞如朽ちせず逢ひ見つと。詠歌あれば御返歌に伽毘羅衛に契りし事のかひありて。文珠の御顔を拜むなりと互に佛々を顯はすも。和歌の徳にあらずや。謠曲卷綱

○綺語 其一 (煩惱類)

隨緣隨喜の乾芋莖。法座のほとりへ間近くよつて。今説起すを聽聞せよ。夫れ煩惱とは智度論に。その心から煩しく。おもひなやむの故に名とす。姪に屬り。瞋に屬り。癡に屬るこれ煩惱。その數八萬四千あり。痛しいかな一切衆生は。八萬四千塵勞煩惱。遂に苦海に沈みては。井戸へ墮せし簪同様。あがらんとすれど浮む瀬なし。世尊これを憐みて。その煩惱の根だやしせんとして。八萬四千の法門を設けて折伏對治あり。まかれども三千世界。一度には手がまはり給はで。煩惱郷を漏されたり。この煩惱の根を斷には。般若波羅密にしくはなし。その故いかにと尋るに。煩惱は人慾の四病より起るなり。まづ第一は貪病とて貪るゆゑに煩惱あり。さて第二に

は瞋病とて。腹のたつまゝ煩惱あり。第三には癡病とて。れのが愚癡ゆゑ煩惱あり。第四には三毒病。惡事をなす故煩惱あり。般若波羅密湯をもて。この四病を除くべし。般若波羅密多といふよしは。斑女のやうな不具津女が孕だといふとではなし。波羅密とは梵語にて翻譯すれば到彼岸。これ彼岸へ到るの義なり。一切衆生はこの岸たり。佛はすなはち彼岸たり。煩惱は中流たり。到るといふに又六あり。第一を檀といふ。檀はすなはち施なり。第二をば毗梨といふ。毗梨は即ち持戒にて。よく五戒を持をいふ。第三は羼提なり。羼提は忍辱にて。萬事に堪忍するをいふ。第四には尸羅といふ。尸羅はすなはち精進なり。第五には禪といふ。禪はすなはち定なり。第六を般若といふ。般若はすなはち智慧の事。彼の五者を船として。般若をもつて導とし。俱に有相の流れを絶て無相の彼岸へ升るなり。ゆゑに波羅密と説き給ふ。彼岸といふは悟道の事。有相を出で、無相に走り。其所へ到れば佛となる。佛になれば吾もなし。われもなければ煩惱なし。

煩惱なければ菩提もなし。菩提なければ佛もなし。つまる所は無の一字。是の悟道の極所なり。夢想兵衛胡蝶物語

○綺語 其二(虎少將兩人道行)

佛も元は凡夫にて。彼の耶輸陀羅女の妹背の中寝る夜のさまも。悟氣の種も。今の衆生にかはらめや。是を見彼を聞く時は。戀と菩提と引き分て。道は二筋なきものを。御法の爲よ君が爲め。行かは千里も物かはど。虎少將は閨の戸の白むにまかせ起出て見れば。夜深き富士の雪山の小額行く雲は。眉の黒みのくろくくと。片割月を挿櫛と。たしなえ強き空の色。空にも戀は有明の欲界の四王忉利天。夫婦枕の夜摩天の契は抱き合ふと聞く。兜卒天には手を取り交し。樂變化天の戀衣。夫と妻とが忍ぶ夜は互に。つと打笑ひ。笑るを戀のしるしとは。それが好いやら。悪いやら。人界よりは知らねども。これで堪能するとかや。他化自在天の妹背には。顔と顔とを見るさかり。これを竝べて言種の四王忉利の形を交へ。夜摩はだ

き。兜どり樂多み他化はあひさると。聞けども迷ふ人心。愛し殿御と伽羅の香は。幾夜とめてもとめ厭かぬ。鷗の羽搔が百羽がき。鴨立澤はさはなくて。初音が原の曉方は。人の上さへ歎かる。近松曾我五人兄弟

○綺語 其三(虎少將富士の岩陰に身)

チ、左もあらんと無法の奴輩。草を分つて。すは此處にて。曲者と。二人を中に押取巻き。うぬらへ確に傾城の風。それに似合ぬ。篋笠岩のはさまに隠れ居て。念佛陀羅尼を唱へ。何故殺生の邪魔をする。真直に申せ。少もちんぜは兎の代りに。胴骨を射抜てくれんと。犇さける。素より諸國の人に馴れ。數萬の帯間に交際て。當話口合誰にか負ん。少も臆せず。鹿相して罰を受け。佛を恨み給ふな。我々もとは傾城なれど。心中に大願起し。此岩蔭に百日籠る大行者。毎日毎夜六萬遍の念佛。觀音經百卷。隨求陀羅尼三千卷。徒口もなう唱ふる故。其功德で鳥兎の助つたは。此方や知らぬ。殺生する人と。詞を替すも汚はし。慚愧懺悔六根罪障。御注連の八大金剛

童子。南無行者大菩薩。大峯山上本堂上葺。金瓦の奉加南無阿彌陀佛といひければ。ヤア嘘付め。女禁制の大峯山上。女の行人あるべきか。それ撲殺せと喚きけり。これ禁制とへ。常躰氣の通らぬ女の事。忝くも傾城は役の行者の姥の姉女郎の流れを請け。其身は役の優婆塞の尊容をかたどり。挿櫛といつは五智の寶冠なり。十二因縁のいよこん小枕。色鼻緒の雪駄には八葉の蓮華を踏へ。烟草の息に啊吽の輪を吹き。即身即佛の傾城を。此處にて殺し給はん事。明王の思はく量り難う。熊野權現の御罰を當らん事。立所に於て疑ひあるべからず。ねんあぶらとろり。と嚇しても猶合點せず。(近松曾我虎か磨)

○綺語 其四(傾城の懺悔)

紅花の春の晨。紅錦繡の山粧ひなすと見えしも。夕べの風に誘はれ。紅葉の秋の夕べ。黄纈纈の林色をふくむといへども。朝の霜に衰ふ。松風蘿月に詞をかはず賓客も。去て來る事なし。翠帳紅閨に枕を並べし妹背も。何

時の間にかは隔つらん。籠の飼鳥雲を戀ひ。空行く雁へ友慕ふ。人間とてもかはらめや。戀より外は友もなき。廓住居の八重葎。からまりされし憂世話に。詞を飾る文の數。一切經にはあらねども。凡そ七千餘通りなり。今ぞ佛に供養して救世の船の帆にかこり。大悲の空の天蓋と。此挿傘をさしも草觀世紙稔の觀世音。つくる菩薩の御誓ひ。罪を助けてたび給へ。懺悔物語申すべし。そもくみづあげの下前髪。のなよやかに。好色の雲をかざし。初床の夜のやもじにも。終に客寮の花ちりぬ。過ぎし御見の夕顔の露の黄昏身に染々と。我魂に封じ文。積り來て今一心の蜘蛛手に。罹る八つ橋や。さりととはかきつばた。うら紫の恨み文。くるくしやんとひん結び。身よりとばかり霞ませて。今日の一座の知らせ文。明日を頼みの届け文。紋日をわらうて勤め文。千束百束文。志のはしがき空起證。昨日の誓紙今朝の夢。寢覺憂寢に風騒ぐ。眞葛が原の紙屑の啣言がましや。神の名も佛の御名も口馴れて。更に怖いと思はれず。罪業如何に恐しや。實に

や一々文々。是真佛と聞く時は。一字の文字も佛の尊容なる者を。問夫の文とて引破り。まろめく。て蚊遣火の。閩の油煙や消炭を。かくし忍んで。かくし文替字替名のやつし書文がやりたや。室町筋へ。取や違へて餘の人。にやるな。花のかの様の。サテ花のかの様の。袖に入れか。と渡せか。と。極樂世界へ。届けか。し。と書きたる字態を。高燈籠に表して。無明の闇を照すべく。しゆびのこの字のゆらく。と。香爐に烟立つ風情。上る蓮の玉の臺の盤梯子。ずんと上り。語て。日記書。血文血判の紅の紅葉重ねの封文に。書たりや散し書。なほく。書に。ひらりと披いて。ちらりと讀では。ひらく。披いで。疊んで。きりく。きりく。くるく。くるく。卷て。繰返し。立返し。打返し。生死の廊に生れ來て。六塵の境に迷ひ。六根の罪を爲ることも。待つ戀逢ふ戀になづむ心なるべし。れもしろや。實相無漏の硯の海に。五塵六慾の浪はたぐねども。隨緣真如の筆を染めぬ日はなし。染めぬ日はなし。筆のすさみも何ゆゑぞ。仇なる色に心染むるゆ

ゑ。そめずば手管もあらじ。口説もこのはじ。門立もなく。朝込もあらじ吹く。花よ紅葉よ。月雲の故事も。あらよしなや。よしや吉野の。よしや吉野の杉原の文を合せて。綜系の佛像と結びつくらんと。それ月支の遺龍といひし人。妙法蓮華經卷第一乃至八の卷までの經の外題を書き賜ふ。其功德文字の數。八八六十四佛と現じ。父の獄苦をまぬがれしは。それは異國のめい筆。是は流れの女文字。情色めくいろは假名。それも佛体具足して。千萬無量の玉の瑤瑤。玉章の。参るといふ字を書ならべ。八葉蓮華と拜まれ給へど。心に結び手に結ぶ。のりのいとすち金色の光り後光と御佛の御影顯たに見に給ふ。三輩九品蓮の糸と。其曼茶羅はさもあらめ。末代淫女のためしなき。五濁の曇霽れそめて。玉と欺むく荻の露。宮城野をこそ拜しけれ。近松賀古致信七墓廻

○方便の殺生

彌陀の利劍や愛染は。方便の弓に矢をはげ。多門は鉞を横たへて。惡魔を

降伏し。災難を拂ひ給へり。されば愛着慈悲心は。達多が五逆にすぐれ。方便の殺生は。菩薩の六度にまされり。とか。これを見かれを聞き。他を是非知らぬ身のゆくへ。迷ふも悟るもいぞや。されば心の師とはなり。心を師とせざれど。古き詞に知られたり。謡曲熊坂

○煩惱即菩提 其一

それ春の花の樹頭にのほるは上求菩提の機をすゝめ。秋の月の水底にくだるは下化衆生の相をあらはす。天いふことなくしては。物々皆これをしめす。人心ありては何つとめさらんや。もし人ありて。人間の入苦をみて。穢土をいとふ時は。煩惱即ち菩提となる。天上の五衰をきゝて。淨土をもとむる時は。生死即ち涅槃となる。かるかゆゑに諸佛菩薩順逆の化道を垂るゝ。罪あるをは邪より正に入れ。縁なきをは惡より善に趣かじめ給ふ。(秋夜長物語)

○諸法實相

夫れ鳥鳥の林にさわく聲。便ち是廣長舌鷲鷲の汀に立てる色。豈に清淨身にあらすや。法に玄妙の相なし。世間常住の相なり。佛に奇特の性なし。衆生本來の性なり。眼に看て其色を分たず。耳に聞きて其聲を弁せず。或時は憎愛の思ひを萌して彼に拘はらす。鏡裡の像のごとし。或時は善惡の相を起してこれに住せず。樹頭の風に似たり。來々として留らす。去々として皈らず。寔に一切有爲法の如し。夢幻泡影の如し。(鷲鷲合戰物語)

○行脚僧

それ前佛は既に去り。後佛はいまた世に出てす。夢の中間に生れ來て。何を現と思ふへき。たま／＼受け難き人身を受け。逢ひ難き如來の佛教に逢ひ奉ること。これぞさどりの種なると。思ふ心のひとへなる。墨の衣に身をなして。生れぬさきの身を知れば憐むへき親もなし。親のなければ我か爲に。心を留むる子もなし。千里を行くも遠からず。野に臥し山に泊る身のこれを誠のすみかなる。(謡曲卒都婆小町)

○山 伏

いでく最期の勤めを始めん。夫れ山伏といつは。役の優婆塞の行儀を受け。其身は不動明王の尊容をかたどり。頭巾といつは五智の寶冠なり。十二因縁のひだをすゑて戴き。九會曼荼羅の柿の篠懸。胎藏黒色のはきをはき。扱又八目の草鞋は。八葉の蓮華を踏まへたり。出で入る息にあうんの二字を稱へ。卽心卽佛の山伏を。こゝにて討ちとめ給はん事。明王の照覽はかりがたう。熊野權現の御罰を當らん事。立ちどころに。いて疑あるべからず。庵阿毘羅咩欠と。數珠さらくと押しもめば。近頃殊勝に候ふ。先に承り候ひつるは。南都東大寺の勸進と仰せ候ふ間。定めて勸進帳の御座なき事は候ふまじ。勸進帳を遊ばされ候へ。是にて聽聞申さうするにて候ふ。何と勸進帳を讀めと候ふや。中々のこと。心得申して候ふ。本來勸進帳あらばこそ。笈の中より往來の卷物一卷とり。いだし。勸進帳と名付けつゝ。高らかにこそ讀み上げけれ。夫れつらく。

惟ん見れば大恩教主の秋の月は。涅槃の雲に隠れ。生死長夜の長き夢。驚かすべき人もなし。爰に中頃帝はします。御名をば聖武皇帝と名付け奉り。最愛の夫人に別れ。戀慕やみがたく。涕泣眼に荒く。涙玉を貫く。思を前途に託して。盧舍那佛を建立す。かほどの靈場の。絶えなん事を悲しみて。俊乘坊重源諸國を勸進す。一紙半錢の奉財の輩は。此世にては無比の樂にほこり。當來にては。數千蓮華の上に座せん。歸命稽首敬つて白す。天も響けと讀み上げたり。關の人々肝を消し。恐れをなして通しけり。
(諸曲安宅)

○行 者

話分兩頭寂寞道人肩柳といふ。怪有の行者ありけり。原は何國の人。氏なるをしらす。去歳の夏より。陸奥出羽を券縁し。今茲は下野及下總に赴きつゝ。遂に武藏に飛錫して。愚民に尊信せられたり。その修法嘗薪を積て。烈火を踏むに。自若として。手足焼爛ることなし。これによりて。人の吉

凶悔吝を占ひ。又病厄を祈禱するに。應驗ありといふ。年來吉野葛城三熊野はさらなり。駿河の不二。肥後の阿蘇山。薩摩の霧降。下野の二荒山。出羽の羽黒山。など。靈山名勝をいく遍どなく登渉し。神人異物に邂逅して。不老の術を得たりと。なん。現その爲。躰。烏髮長髯にして。なほ壯年の人と異ならず。しかれども百年前の事迹を問ふに。應答眼前に見たるがごとく。説示さざるとのなければ。人僉敬信感服せり。又この肩柳は左の肩尖に。一塊の瘤ありけり。これによりて。その形体斜なり。人亦その事を問ば。肩柳答て。わが一身には。常に佛菩薩宿らせ給へり。左は是天行の順路。肩は肢体の無上所也。よりて。東方天照皇太神。西方釋迦牟尼佛。こゝに止宿。しれはこますといへり。かくてこの夏月。肩柳は豊島郡に鳴錫して。愚民等に示すやう。夫三界は火宅也。穢土に立て。穢土を去らず。嗜慾に耽りて。嗜慾を思はず。愛惜によりて。輪廻あり。好惡によりて。煩惱多かり。四大原。是何處より歟。來たる。以れば。悉皆空なり。十惡何處よりか。到る。省れば。一

妄想のみ。この故に。諸佛惡趣に出現して。濟度に暇なしといへども。凡夫は無邊無數也。佛縁なきもの。無佛世界に生じ。佛性なきものは。畜生道に墮。縁度普からざるが爲に。世尊涅槃の室に入りて。寂滅爲樂と教給へり。現に生あるものは。必ず死あり。形あるものは。滅ざるなし。機縁既に満るときは。太陽の没る如く。積氷の消る如し。誰か一人のどゞまるものあらんや。かゝれば。はやく一身を天堂にかへし。納めて。彼岸の禪定門に入る。こそよけれ。よりて。來ぬる。六月十九日。申の下剋日。没の時に。丁りて。將に火定に入らんとす。その地は。豊島本郷のほとり。圓塚山の麓なるべし。深信有縁の道俗は。これの一束の柴を布施して。來會せよとぞ。徇たりける。さらぬごに。尊信したる里人等は。これを聞て。讚嘆し。昔より入定の行人ありとは。聞けど。皆生ながら。土中に入るのみ。火定は。最も有がたかるべし。權者の入滅を。をがますば。何の時をか。期すべきとて。本日を俟ざるものもなし。かくて。衆人へ。肩柳が指揮に。隨ひ。六月望の比よりして。圓塚

山の麓なる茅萱を芟拂ひて。一座の土壇を築立るに。黒木をもて柱とす。壇下には廣く穴を穿たる。その廣さ五六間深きと。丈餘にも及るに。柴夥投入たれば。虫の跋べき隙もなし。抑もこの圓塚山は。豊島本郷の西にあり。巽は蒼海杳渺として。安房上總の盡處をも觀るべく。西へ連山嵯峨として。管根足柄富士の雪。夏なほ寒きこちぞする。鎌倉海道ならざれども。木曾路へかよふ順路よして。上總下總へ赴くものこゝを過るを捷路とす。さる程には。や本日にもなりしかば。寂寞道人肩柳は。白布をもて頭を包ま。れなし布の淨衣を被て。壇の中央なる胡床に尻をかけ。手には一箇の金鈴を振鳴らし。胸には一面の明鏡を掛背には一條の輪袈裟を垂て。わざと兜巾を載さりけり。その打扮異様にして。觀念の眼を閉たる。甚麼なる經を讀にやあらん。朝より暮るゝまで。その音聲濁らず。洵れず。をりくりに人を視る。眼光いと凄し。壇下には彼此の老弱男女。群參圍繞して。蘿蔔山田の邊まで。人ならぬ處もなきに。頭の上を照したる。夏の日の

堪がたくて。われはや火定に入り。にき。と罵ながら。樹下を索て。聚ふも多かりけり。かくては。や黄昏ちかくなりしかば。豫てこゝろを得たるもの。件の柴に火を放てば。煽々として。燃揚る暑中の猛火におそれ。惑ひて。壇のほどりにあるものへ。散動立て退きけり。當下肩柳は。經よみ果て。平形金珠を。鎗々と推揉つ。霎時念じて。壇下を直下。下。聲高やか。に讚して。いはく。昔如來の從父弟なる。阿難陀の。摩揭陀國をたち去て。吠舍釐城に赴き給ふや。その王の。く。德を戀うて。迭代に哀離し。この一王は。これを追うて。南岸に營車し。その一王は。これを迎て。北岸に來候せり。阿難尊者。二王の相争て。鬪戰殺害せん。とをれそれたまひ。船より虚空に昇つ。立地に寂を示して。身の中より火を出し。骸を焚て。中より折き。一つは南岸に墮し。一つは北岸に墮して。その鬪諍を禁め給ひき。その功德莫大なり。この他の道徳。自燒して。或は三世の諸佛に。献り。或は衆生濟度の方便。載て。聖經に。灼然也。貧道辱く。三寶に事り。勤行に年を歴れども。自他の利益に

普からず爰に愚痴の薄徳を省れば速臭骸を解脱して無垢の淨土に到らん。と欲す。冀は有縁の道俗身滅不隨者の財寶を棄捐して未來永劫の善根を殖よ。設夫一錢二錢を捨るものは一劫二尊の慈航に乗らん。三錢四錢を捨るものは三藏を自得して四難もこゝに易かるべし。五錢六錢を捨るものへ方に五覺に感通して六塵を掃除せん。七錢八錢を捨るものは七難八苦を出離して頓生菩提の機縁にあはん。九錢十錢を捨るものは九品の淨刹に托生して十界能化の菩薩とならん。如是の善男女如是の財を捨れば身はなほ苦海に在りといふとも則圓寂の同行たり。いかにとなれば五慾の財物を焼却してもその身に代無量の徳本を播殖てもて清果生ればなり。勸化隨緣愆すば平等利益疑ひなしと説勸る聲の中より群集の老弱火坑を望て破落哩々々々と擲つ錢は落花の風に隨ふ如く雪吹の窓を拂ふに似て幾十百といふをしらず。その錢既に投了れば肩柳自葬の引導して聲高やかに偈を説て云。

西方葬釋尊年。

擊然發興石火。

東土燒道昭時。

閃々炬燵揚播。

言靜相靜十眼。

看灰裡結清果。

唸誦すると三遍にして煽々たる猛火の中へ身を跳らせて投入れば火燄發と立沖り膏沸き穴焦れ骨もとゝめず倏忽に灰燼となりて失にけり。これを見る衆人は感涙を禁めあへず同音に念佛して且く鳴も止ざりけり。かくてはや山寺の入相の鐘音すなる諸行無常の觀念も僉今さらの事にればえて。れのがまにく歸去人東西に立わかれ。南北に散うせて。迹には燃る茶毘の坑。許多光のみ夏虫の火虫の外に物もなし。八大傳。

○出家

是は常陸の國の住人平松殿に仕へ申す。高師の四郎と申す者よて候ふ。扱も頼み奉る平松殿は。去年の秋空しくならせ給ひて候ふ。又春滿殿と申して御子息の御座候ふか。いまだ幼なくましますに。より某に傳り立

て申せとの御遺言にて候ふ程に。片時も離れ申さず春満殿を傳り立て
申し候。又今日は平松殿の御忌日にて候ふ間。御寺に参らばやと存じ候
ふ。昔在靈山名法華。今在西方名阿彌陀。娑婆示現觀世音。三世利益同一體
實に有り難き悲願かな。慈眼視衆生。悉く誓ひ普ねき日の影の曇りなき
世の御惠み。後の世かけて頼むなり。春満殿の御文にて候ふ御覽候へ。あ
ら思ひよらずや。まづ御文を見うするにて候ふ。夫れ受け難き人身
を受け。逢ひ難き如來の教法に逢ふ事。闇夜の燈渡りの舟待ち得たる心
地して。吾と覺めん夢の世に。今を捨てずは徒に。又三途にも歸らん事。歎
きても猶餘りあり。此生に。此身を浮かめずは。何の時をか頼むべき。然る
に一子出家すれば。七世の父母成佛すと云へり。此身を捨て、無爲に入
らば。別れし父母の御事のさか。生々の親を助けん事。是にしかじと思ひ
切りつゝ。家を出で。修行の道に趣くなり。父母に別れし其後は。唯御事を
こそひたすらに。父とも母とも頼みつれ。かくとも申さで別るゝ事。乳房

の恩の父母に二度別るゝ心地して。名殘こそ惜しう候へ。かまへて尋ね
給ふなよ。三年が内には必ずく身の行くへも知らせ申さん。

墨衣思ひ立てともさすか世を出つる名殘の袖はぬれけり(謠曲高野
物狂)

○菩提心 其一

そもく一期の月傾きて餘算山の端に近し。忽に三途の闇にむかはん
時。何のわざをかゝてたんとする。佛の人を教へ給ふれもむきは。ことに
ふれて執心なかれとなり。今草の庵を愛するも科とす。閑寂に著するも
障なるべし。いかゞ用なき樂をのべて。空しくあたら時を過さん。
しづかなる曉。この道理を思ひつゞけて。みづから心に問ひていはく。世
を遁れて山林にまじはるは。心をさめて道を行はんがためなり。然る
を汝が姿は。聖に似て心は濁にしめり。住家は則淨名居士の跡をけがせ
りといへども。たもつ所は僅に周梨樂特が行にだにも及ばず。もしこれ

貧賤の報みづからなやますか。はた又妄心のきたりてくるはせるか。その時こゝろ更に答ふることなし。たゞ傍に舌根をやとひて。不請の念佛。兩三反を申してやみぬ。(方丈記)

○菩提心 其二

稠林に花ちりなば。覺樹の菓は熟するを期すべし。薛蘿は肩にすがり法衣の色そみなば。衣のうらの玉は悟る事を得つへし。只暮の露の身は山かけの草を置所とすれども。朝霞の望み絶て天を仰にむなし。世をいどふ道は貧道より出たれども。佛を念する思は遺念とをこたる。四聖の無爲を契りしも。一生なほ頭陀の道にとゞまりき。(海道記)

○菩提心 其三

あだし野の露消ゆるときなく。鳥部山の烟立ちさらでのみ住みはつるならひならべ。いかにものゝあはれもなからん。世はさだめなきこそいみじけれ。命あるものを見るに。人ばかり久しきはなし。蜻蛉のゆふべを

待ち。夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。つれごととせをくらす程だにも。こよなうのどけしや。飽かずをしとれもはゞ。千とせを過すとも。一夜の夢の心ちころせめ。すみはてぬ世に。みにくきすかたを待ちに。て何かはせん。命長ければ耻れほし。長くとも四十にたらぬほどにて。死なんこそみやすかるべけれ。そのほど過ぎぬれば。かたちを愧づる心もなく。人にいでまじらはんことを思ひ。夕の日に子孫を愛し。さかゆく末を見んまでの命をあらまじ。ひたすら世を貪る心のみふかく。物のあはれも。知らずなりゆくなんあさましき。(徒然草)

○菩提心 其四

あらゆる所の佛法の趣き。箇々圓成の道すぐに。今に絶えせぬ跡とかや。但し正像すでに暮れて。末法に生を受けたり。かゝるが故に春過ぎ秋來れども。進み難きは出離の道。花を惜しみ月を見ても。起り易きは妄念なり。罪障の山に。いつとなく。煩惱の雲あつうして。佛日の光り晴れ難く。生

死の海にはとこしなへに。無明の波荒くして。真如の月宿らず。生を受くるに任せて。苦にくるしみを受け重ね。死に歸るに随つて。闇きより闇きに越く。六道の街には。迷はぬ所もなく。生死の扉には。宿らぬ住家もなし。生死の轉變をは。夢とやいはん。又現とやせん。是等有りといはん。とすれは。雲と上り煙と消えて後。其跡を留むべくもなし。無しといはん。とすれは。又恩愛の中心と。まづて腸を斷ち。魂を動かさずといふ事なし。彼芝蘭の氷りの袂には。骸をは愁歎の焰に焦がせども。紅蓮大紅蓮の氷をは。終に解かす事なし。鴛鴦の衾の下に。眼をは慈悲の涙に濕ほせども。焦熱大焦熱の焰をは。終にしめす事なし。かゝる拙なき身を持ちて。殺生偷盜邪淫は。身に於て作る罪なり。妄語綺語惡口兩舌は。口にて作る罪なり。貪欲嗔悲愚癡は。又心に於て絶えせず。御法の船の水駟棹。皆彼岸に至らん。
（謡曲東岸居士）

○菩提心

其五

（光源氏雲林院に法文を學ぶ）

大將の君は。宮をいと戀しう思ひ聞え給へど。あさましき御心の程を。時々思ひ知るさまにも見せ奉らんと。念じつゝ。過し給ふに。人わろくつれぐに覺さるれば。秋の野も見給ひがてら。雲林院にまうで給へり。故母御息所の御兄の律師の籠り給へる坊にて。法文など讀み。行ひせんと覺して。二三日はするに。哀なる事多かり。紅葉のやうく。色づきわたりて。秋の野のいとなまめきたるなど見給ひつゝ。故郷も忘らるべく覺さる。法師ばらの才ある限り召し出で。論義せさせて聞し召させ給。所がらに。いとゞ世の中の常なきを覺しあかしても。猶うき人しもぞと覺し出でらるゝ。れしあけ方の月影に。法師ばらの関伽奉るとて。からくど鳴しつゝ。菊の花濃き薄き紅葉など。折り散したるもはかなけれど。この方のいとなみは。この世もつれぐならず。後の世は頼もしけなり。さも味氣なき身をもて。惱むかななど覺しつゝ。け給。律師のいと尊き聲にて。念佛衆生攝取不捨。とうち述べて。行ひ給へるが最羨まむければ。なぞ

やと覺しなるに。まづ姫君の心にかゝりて。思ひ出でられ給ふぞ。いとわろき御心なるや。(源氏物語)

○菩提心 其六

濁世煩惱色欲界誰か五塵の火宅を脱れん。祇園精舎の鐘の聲へ。諸行無常の響あれども。飽まで色を好むものは。後朝の別れを惜むが故に。只これをしも。讐とし憎り。沙羅雙樹の花の色は。盛者必衰の理りを顯せども。徒ら香を愛るものへ。風雨の過なんとを妬むが故に。偏に延年の春を契れり。觀ずれば。夢の世觀ぜざるも。亦夢の世に孰か幻ならざりける。思ひ内にあるものは。龍華の三會に値ふといへども。凡夫出離の直路をしらず。覺て復悟るものは。虎穴龍潭に在りといへども。瑜伽成就の快樂多かり。(八犬傳)

○あはれ 其一

(後白河法皇寂光院に幸じて平女院との御對話)

法皇申させ給けるは。何事に付ても。如何に昔も戀便無き御事にて候ら

ん。隔なく仰られよ。昔の好み更に忘進らせずと聞かせ給へは。女院仰の有けるは。何かは無便候へき。朝夕の事は。隆房、北方訪申せは。煩なし。斯る身と成て候一旦の歎に任てころ。君をも恨申し候つれ共。誠は將來不退の悦と。思取てこそ候へ。今更不及申事なれ共。偕老同穴の昵ひを成て。千秋萬歳と祝し。龍顔にわかれ奉て。幾程もなく。父相國に後候にき。都の外に漂て後は。又八條の公尼にも別れ。天津御子にも後れ奉りぬ。親人々を始て。有りど有りし者共。唯一時に亡にき。親を思ひ子を悲む心は。獸すら猶深しと申。まして人界の類に。何事か是にすぎん。釋尊入滅之時。身子の羅漢五百の弟子の悲みの音。天にのほり地を響かす。迦葉尊者の叫ける音は。三千世界に聞えたり。生者必滅の道。愛別離苦の理なれ共。此身の形勢は。昔も今も例少うこそ候ひぬれ。いかばかりか。惜も悲も候ひし。去共不殺命限りあれ。一人残り留りて。彼後生菩提を吊ひ候へ。賢くぞ残り留りにける。貧女か一燈とかやも角こそと覺え候。諸佛薩埵

争か納受し給えさらん。中にも老言の様に候へ共。五障三從の身を持た
 ながら。早く釋迦大師の遺弟に列り。龍女か成佛憑あり。忝彌陀他方の本願
 を信す。韋提の得悟無疑。此世は假の宿なれば。屠所の羊の足早き思ひを
 なし。月日の鼠の口騷觀を凝しつゝ。三時に六根の罪障を懺悔して。一筋
 に九品の蓮臺を相待。臨終の夕に一念の窓を開て。順次の曉三尊の迎を
 得ん事。これ既に一旦別離の故に候。法華經には。善知識者。是大因縁と説
 れたり。彼淨藏淨眼は生て父の知識たり。安徳天皇は。崩して母の知識た
 り。されば今度離生死菩提に到らん事は。思定めて候。三界無安。猶如火宅
 衆苦充滿。甚可怖畏。と説れたれば。さなしとて。有心人は厭へし。况我身
 がほどの憂目にあひながら。争てか難面。不思議。空く過き候へき。又韋提
 希夫人の惡子の爲に被閉て。如來を奉請。不樂閻浮提。濁惡世也。此濁惡處
 地獄餓鬼畜生。盈滿多不善聚。と歎き給けんも。彼思知候。その故は。人は皆
 な生を替てこそ。六道をば見候へ。そも隔生即忘とて。生死道へどよりぬ

れは。昇沈苦樂悉に忘れ。胎卵濕化一として不覺。うれに自こそ生を替す
 して。まのあさり。六道の苦樂を經廻候へ。天上人中の快樂も夢の中の戯
 地獄鬼畜の愁歎も迷の前の悲み也。今は見たき所もなく。住たき境も候
 はす。されば隨日衆苦充滿の穢土の厭はしく。逐時快樂不退の極樂は欣
 はれ候へば。さりととも。今度は生死をば離れ候なんと。憑もしく候へば。世
 の事露不思。されハ何事にかは。今更貪る思もあり。誦ふ心も候べき。(源平
 盛衰記)

○あはれ 其二 (光嚴法皇崩)

諸國御斗敷の後光嚴院へ御飯りありて暫く御座ありけるが。中使頻に
 到りて松風の夢を破り。舊臣常に参りて蘿月の寂を妨げゝる程に。此も
 今は住み憂しと思召し。丹波國山國といふ所へ迹を消して移らせ給ひ
 ける。身の安を得る處即ち心安し。出づるに江湖あり。入るに山川ありと。
 一乾坤の外に逍遙して破蒲團の上に光陰を送らせ給ひけるが。翌年の

夏比より。俄に御不豫の事ありて。遂に七月七日に隠れさせ給ひけり。此時の新院光明院殿も。山門貫首梶井宮も。共に皆禪僧にならせ給ひて。御座ありければ。急ぎ彼遷化の山陰へ御下ありて御茶毗の事ども。取り營ませ給ひて。後の山に葬し奉る。哀仙院芝山の晏駕ならましかば。百官泪を滴ぎて葬車の御跡に順ひ。一人悲を呑みて虞附の御祭をこそ營ませ給ふべきに。斯る御事とだに知る人もなき山中の御葬禮なれば。只徒に鳥啼きて挽歌の響をそへ。松咽ひて。哀慟の聲を助くるはかりなり。夢なるかな。往昔の七夕には。長生殿にして二星一夜の契を惜みて。六宮の美人。兩階の伶倫臺下に曲を奏して。乞巧奠をこそ備へさせられしに。悲哉當年の今日は。幽遠の地にして。三界入苦の別に逢ひて。萬乘の先王。一山の貫頂。山中に棺を荷ひて御葬送を營ませ給ふ。只千秋亭の月有待の雲に隠れ。萬年樹の花無常の風に隨ふが如し。されは砌を遶る山川も。是を悲みて雨となり雲となるかと怪まる。心なき草木も。是を悼みて。葉落

ち花萎めるかと疑はる。感恩慕德舊臣多しといへども。預め勅を遺されしに依りて。参り集る人も稀なり。かば。纔に籠僧三四人の勤にて。御中陰の菩提にぞ資し奉りける。御國忌の日ごと。種々の御作善。積功累徳せらる。殊更に第三回に當りける時は。繼體の天子今上皇帝御手づから一字三禮の紺紙金泥の法華經をあそばされて。五日八講十種供養あり。伶倫正始の樂は。大樹緊那羅の琴の音に通じ。導師稱揚の言は。富樓那尊者の辨舌を展べたり。結願の日に當りて。薪を採りて雪を荷ふ夕郎は。千載給仕の昔の跡を重くし。水を汲みて月を運ぶ雲客は。八相成道の遠き縁を結ぶ。是又善性童子の珊瑚提嵐國に仕へし孝にも過き。淨藏淨眼の妙莊嚴王を化せし功にも越えたれば。十方の諸佛も明に此追責を隨喜し給ひ。六趣の群類も定めて其餘薰にこそ關るらめと。思ひ知らる。御作善なり。(太平記)

○山門の法滅(大衆と堂衆との内証)

同じき九月二十日の日の辰の一點に。大衆三千人。官軍二千人。都合其勢五千餘人。さうい坂に押し寄せて。関をどつとどつくりける。城のうちより弩發しかけたりければ。大衆官軍。數を盡して討たれにけり。大衆は官軍を先立てんとす。官軍は又大衆を先立てんと争ふほどに。心々になりて。はか／＼しくも戦はず。堂衆にかたらふ惡黨といふは。諸國の竊盜。強盜。山賊。海賊等なり。慾心非常にして。死生知らずの奴原なりければ。我一人と思ひ切りて戦ふ程に。今度も又學生軍に負けにけり。其後は山門いよく荒れ果て。十二せんじゆの外は。止住の僧侶稀なり。谷々のかうえんまめつして。堂々の行法もたいてんす。朱閣の窓を閉ぢ。坐禪の床を空しくせり。四教五時の春の花もにははず。三諦卽是の秋の月も曇れり。三百餘歳の法燈をかゝぐる心もなく。六時不斷の香の煙も絶えやしにけん。堂舎高く聳いて。三重の構をせい。かんの内に挿み。棟梁遙に秀で。四面の高さをはくぶの間懸けたりき。されども今は供佛を峯の嵐に

まかせ。きんようをくうれきに濕し。夜の月燈を掲げて。軒の隙より洩り。曉の露球を垂れて。蓮座の装をそふとかや。それ末代の俗に至りては。三國の佛法も次第に衰微せり。遠く天竺に佛跡をとふらふ。昔佛の法を説き給ひし竹林精舎。ぎつこどくをんも。此比は。虎狼野干のすみかとなりて。礎のみや残るらん。白鷺池には水絶えて。草のみ深く繁れり。だいほんげじようの卒都婆も。苔のみむして傾きぬ。震旦にも天台山。五だい山。白馬寺。玉泉寺も。今は住侶なき様に荒れ果て。大小乗の法文も。箱の底にや朽ちぬらん。我朝にも。南都の七大寺荒れ果て。八宗も九宗も跡絶に。愛宕高尾も昔は堂塔軒を並べたりしかども。一夜の中に荒れ果て。天狗のすみかとなり果てぬ。さればにや。さしもやんごとなかりつる天台の佛法も。治承の今に及びて。亡びぬるにや。心ある人の歎き悲まぬはなかりけり。平家物語

○奈良の却火

大將軍頭の中將重衡般若寺の門の前に打ち立ちて。闇さはくらし。火を出せと宣へば。播磨國住人福井の庄の下司次郎太夫友方といふ者。楯を割り松明にして。在家に火をぞかけたりける。頃は十二月廿八日の夜。成の刻ばかりの事なれば。折節風烈しく。炎は一つなりけれども。吹きまよふ風に。多くの伽藍に吹き懸けたり。凡耻をも思ひ。名をも惜む程の者は。奈良坂にて討死し。般若寺にして討たれにけり。行歩にかなへる者は。吉野十津川の方へぞ落ち行きける。歩みも得ぬ老僧や。尋常なる修學者。兒ども女童は若しや助かると。大佛殿の二階の上。山階寺の内。我先にとぞ逃げ入りける。大佛殿の二階の上には。千餘人上りあがり。敵の續くを上せしとて。階を引きてけり。猛火は正しく押しかけたり。をめき叫ぶ聲。焦熱。大焦熱。無間阿鼻。燄の底の罪人も。是には過ぎじとぞ見えし。興福寺は淡海公の御願。藤氏累代の寺なり。東金堂にねはします。佛法最初の釋迦の像。西金堂よれをします。自然涌出の觀世音。瑠璃を雙べし四面樓。朱丹

を交へし二階の樓。九輪空に輝きし二基の塔。忽に煙となるこそ悲しけれ。東大寺は常在不滅。實報寂光の生身の御佛と思し召し准へて。聖武皇帝。手づから親ら瑩きたて給ひし。金銅十六丈の盧遮那佛。烏瑟高く顯れて。半天の雲に隠れ。白毫新にをがまれさせ給へる。満月の尊容も。御首は焼け落ちて大地にあり。御身は鎔きあひて山の如し。八萬四千の相好は。秋の月早く五重の雲に隠れ。四十一地の瓔珞へ。夜の星空しう十惡の風に漂ひ。烟は中天に満ちく。燄は虚空にひほもなし。まのあたり見奉る者は更に眼をあてず。幽に傳へ聞く人へ肝魂を失へり。法相三論の法文聖教すべて一卷も残らず。我朝は申すに及ばず。天竺震旦にも。是程の法滅あるべしと覺えず。優填大王の紫磨金を磨き。毘首鞞磨が。赤旃檀を刻みしも。僅に等身の御佛なり。況や是は南閻浮提の中に。唯一無雙の御佛。長く朽損の期あるへしとも思はざりし。今毒烟の塵に交りて。久しく。悲を殘し給へり。梵釋四王。龍神八部。冥官冥王も。驚き騒ぎ給ふらん

とぞ見えし。法相擁護の春日大明神。如何なる事をか思しけん。されば春日野の露も色かはり。三笠山の嵐の音も恨むる様にぞ聞えける。平家物語

○佛のかたみ(泉涌寺の佛舍利)

有り難や佛在世の御時は法の御聲を耳に觸れ、聞法値遇の結縁に。一切をも浮かむ此身ながら。二世安樂の心を得るに。後五の時代の今さら。猶執心の見佛の縁。うれしかりける時節かな。それ佛法あれば世法あり。煩惱あれば菩提あり。佛あれば衆生もあり。善惡又不二なるへし。然れば後五百歳の佛法。既に末世の折を得て。西天唐土日域に。時至つて久堅の月の都の山なみに。佛法流布のしるしとて。佛骨を納め奉り。實に目前の妙光の影。此御舍利に若くはなし。然るに佛法東漸して。三如來四菩薩も。皆日域に地をこめて。衆生を濟度し給へり。常在靈山の秋の空。わづかに二月に臨んで。魂を消し。泥洹雙樹の苔の庭。遺

跡を聞いて腸を斷つ。有難や佛舍利の御寺ぞ在世なりける。實にや鷺の御山も。在世のみぎんにころ。草木も法の色を見せ。皆佛身を得たりしに。今はさびしくすさまじき月ばかりこそ昔なれ。孤山の松の間には。よそく白臺の秋の月を禮すとか。蒼海の波の上にもわづかに四諦の曉の雲を引く空のさびしさ。ぞな鷺の御山。それは上見ぬ方ぞかし。こゝは正に目前の佛舍利を拜する御寺ぞ貴かりける。(謠曲舍利)

○末法の功德(御堂關白道長公の誓)

世の中像法の末になり。天竺は佛のあらはれたまひし界なれども。今は鷄足山のふるき道には。竹しけりて人の跡も見えず。孤獨園の昔の庭には。薄伽梵うせて人も住まずなり。鷺の峯には。れもひあらはれ。鶴の林には。聲たえて迦葉波迦旃延は。鐘の聲につたへ。憍梵婆提は。四偈をとこなへて。水と流れなどして。あはれなる末の世に。かく佛をつくり堂をたて。僧をとぶらひ力をかたぶけさせたまふ。佛法の燈火をかゝけ。人をよろこ

はしめ給ひて。世のねやどねはします。わが御身ひとつにて。三代の御門の御後見をせさせ給ひて。六十餘國六齋日に殺生を留めさせ給ふ。よき事をばすゝめ。悪しき事をば留めさせ給ふ。かゝる程に衆生界つき。衆生の切つきん世にや。この御代もつきさせ給はんと見ゆ。年比しあつめさせ給へる事どもを聞えさする程に。涌出品しゅつひんの疑ぞ出で來ぬべき。その故は。殿の御出家の問いまだ久しからで。せさせ給へる佛事は數知らず多かるは。かの品に成佛をえてよりこのかた。四十餘年に化度し給へる所の涌出品の菩薩はかりもなし。父若うして子老いたり。世擧りて信せずといふ事のたどへのやうなり。されど御代の初よりしあつめさせ給へる事どもを記す程に。かゝる疑もありぬべし。世の中にある人高きも卑きも。事と心と相違ふものなり。うへ木靜ならんと思へども。風やまず。子孝せんと思へども。親またず。一切世間に生あるものは皆死す。壽命無量なりといへども。必ず盡くる期あり。盛なるものは必ず衰ふ。會ふものは

離別あり。果報として常なる事なし。あるは昨日榮えて今日衰へぬ。春の花秋の紅葉といへども。春の霞たなびき。秋の霧立ちこめつれば。こぼれてにほひ見えす。たゞひとわたりの風に散りぬる時は。庭の塵水の泡とこそはなるめれ。たゞこの殿の御前の御榮花のみこそ。開けはしめにしてより後。千年の春の霞。秋の霧にも立ちかくされず。風もうとさきなくして枝をならさねば。かをりまさり。世にありかたくめてたきこと。優曇花うとうまの如く。水に生ひたる花の。青き蓮の世にすぐれて。にほひならびなきかどし。(榮花物語)

○忠 孝(平重盛父を誅む)

やゝありて入道の給ひけるは。あの成親の卿が謀反は。事の數にも候はず。一向法皇の御結構にて候ひけるぞや。暫く世を鎮めん程。法皇をば鳥羽の御殿へ遷じ参らするか。然らずばこれへまれ御幸をなし参らせんと思ふはいかにどの給へば。大臣聞きもあへ給はず。はらくとぞな

れける。入道さて如何にやいかにとあきれ給へは。やゝありて大臣涙を
れさへて。この仰承り候に。御運ははや末になりぬと覺え候。人の運命の
傾かんとは必ず悪事を思ひ立ち候ふなり。又御有様を見參らせ候に
更に現まとも覺えず候。さすか我朝は邊地粟をくさん故の境とは申しながら。
天照大神の御子孫國の主として。天兒屋根命の御末。朝の政を掌らせ給
ひしより以來。大政大臣の官に至る人の甲冑を鎧ふこと。禮義を背くに
あらずや。就中御出家の御身なり。それ三世の諸佛。解脫幢相の法衣を脱
き捨て。忽に甲冑を鎧ひ弓箭を帶しましさんこと。内には破戒無慚
の罪を招くのみならず。外には仁義禮智信の法にも背き候ひなんす。旁
恐ある申事にて候へども。心の底にししいしゆを残すへきにも候はず。先
づ世に四恩候ふ。天地の恩。國王の恩。父母の恩。衆生の恩。是なり。其中最
も重きは朝恩なり。普天の下王地にあらずといふことなし。されば彼穎
川の水に耳を洗ひ。首陽山に薇を折りし賢人も。勅命背き難き禮義をば。

存知すところ承はれ。

聖徳太子十七箇條の御憲法に。人皆心あり。心各執あり。彼を非し我を是
し我を是し彼を非す。是非の理誰か能く定むべき。相共に賢愚なり。環の
如くにして端なし。爰を以て假令人怒るといふども。却て我咎を恐れよ
とこそ見えて候へ。然れども當家の運命未だ盡きざるによりて。御謀反
己に顯はれさせ給ひ候ひぬ。その上仰せ合せらるゝ成親卿を召し置か
れぬる上は。假令君如何なる不思議を思し召し立たせ給ふども。何の恐
れか候ふべき。所當の罪科行はれぬる上は。退きて事によしを陳じ申さ
せ給ひて。君の御爲には愈奉公の忠勤を盡くし。民のためには益撫育の
愛戀を致させ給はゞ。神明の加護に預りて。佛陀の冥慮に背くへからず。
神明佛陀感應あらば。君も思し召し直すことなどか候はざるべき。
悲しきかな。君の御爲に奉公の忠を致さんとすれば。めいろ八萬の頂き
よりも猶高き父の恩忽に忘れんとす。いたまじきかな。ふかうの罪を遁

れんとすれば。君の御爲には既に不忠の逆臣ともなりぬべし。進退維谷
 れり。是非如何にも辨へかたし。申し受くる所詮は只重盛か首を召され
 候へ。その故は院參の御供をも仕るへからず。又院中をも守護し參らす
 べからず。されは彼蕭何は大功かたへに越にたるによりて。官大相國に
 至り劍を帶し履をはきなから殿上へ上ることを許されしかども。叡慮
 に背くことありしかば。高祖重くいましめて深く罪せられにき。かやう
 の先證を思へは富貴と云ひ。榮花と云ひ。朝恩と申し。重職といひ。旁極め
 させ給ひぬれば。御運の盡きんこと難かるへきにあらず。富貴の家には
 祿位重疊せり。再ひ實なる木はその根必ずいたむと見えて候。心細く候
 へ。何時までか命生きて。亂れん世をも見候ふべき。只末代に生を受けて。
 かゝる憂目にあひ候重盛か果報の程こそつたなく候へ。只今も侍一人
 に仰せつけられ。御壺の内へ引き出されて。重盛か首の刎ねられんずる
 こといと易き程の御事にてこそ候はんすらめ。是を各聞き給へとて直

衣の袖をしぼるばかりにかきくどぎ。さめぐと泣き給へは。その座に
 並み居給へる平家一門の人々。皆袖をぞぬらされける。平家物語

○惡 逆(源義朝父を弑す)

さる程に爲義法師が頸を刎ぬべきよし。左馬頭に宣下せられければ。宥
 め置くへき旨。様々に兩度まで奏聞せられども。主上逆隣ありて。清盛既
 に叔父を誅す。何ぞ緩怠せしめん。叔父豈に父に異ならんや。速に誅戮す
 へし。若し猶違背せしめば。清盛以下の武士に仰附らるへきよし。勅定重
 かりしかば。力なく涙を押へて。鎌田次郎に宣ひけるは。論言斯の如し。是
 によりて判官殿を討ち奉らは。五逆罪の其一を犯すへし。罪に恐れて宣
 旨を背かは。忽に違勅の者となりぬべし。如何すへきとありしかば。正清
 畏りて申すに。恐れ候へども。愚なることを御諛候ものかな。私の合戦に
 討ち奉らせ給はんこそ其罪も候はんすれ。其上觀經には。劫初より以來。
 父を殺す惡王一萬八千人なりといへども。母を殺すものなすと説かれ

て候。それは諸の悪王國位を奪はんとの爲めなり。是は朝敵となり給へは。終には遁るまじき御身なり。縱令御承にて候はずとも。時日を廻すへき御命ならぬにとりては。御方に侍らせ給ひながら。人手に懸けて御覽候はんより。同じくは御手に懸け參らせ給ひて。後の御孝養をこそ能々せさせ給はんすれ。何か苦しく候ふべきと申せば。さらば汝計へとて泣々内へ入り給ふ。

延景参りて誠には關東御下向にては候はず。頭殿宣旨を奉りて。正清太刀取にて失ひ進らすべきにて候。再三歎御申候ひしかども。勅定重く候ふ間。力なく申附られ候。心閑に御念佛候ふべしと申したりしかば。口惜しきことかな。爲義程の者をたばからずとも討せよかし。縱令論旨重くして助かる事こそ叶はずとも。などありのまゝには知らせぬぞ。又誠に助けんと思はゞ。我身にかへてもなごか申し宥めさるべき。義朝が入道を憑みて來らんをば。爲義が命に替へても助けなん。されば諸佛念衆生。

衆生不念佛。父母常念子。子不念父母。と説かれたれば。親の様に子は思はぬ習なれば。義朝一人が罪にあらず。只恨しきハ此事をいじめよりなど知らせぬぞとて。念佛百遍ほど稱へつゝ。更に命を惜む氣色もなく。程程に定めて爲義が首斬るみんとて。雜人なども立ち込むべし。疾々きれと宣へば。鎌田次郎太刀を抜きて後へ廻りけるが。相傳の主の首斬らん事心憂くて。涙にくれて太刀の當り所も覺えねば。持ちたる太刀を人に與ふ。其時願諸同法者。臨終正念佛。見彌陀來迎。往生安樂國。と唱へて終に斬られ給ひにけり。(保元物語)

○誠 其一

五千の上慢は。佛だにも何ともし奉らず。釋尊の法華を説き給ひし時。座を立ちて退けり。彼等罪根深重の増上慢にして。いまだ證せざるを證せりと思ひ。未得を得たりと思ひ。かくの如く失あるともがらなり。委しくはかの位に説きたり。不輕比丘はあへるものこと。我深敬汝等不敢輕

慢と唱へて。枝木瓦石をも能く忍ひ。罵詈放言をも咎めずして。終にその證を得給ひたれば。後世菩提のために。必ず憍れる心を離るべきなり。
干訓抄

○誠 其二

或人のいはく。諸の事を思ひ忍ばんは。勝れたる徳なるべし。人の心中に。諸の惡しき事をのみれもふ。是を忍ばざるはあさましかるべし。人の身の上はさまぐのくるしみあり。これを忍ばざるは世に立ちめぐるべからず。中にも年若きともがらは。飢を忍びて道を學び。寒を忍びて君に仕へつゝ。家を起し身を立つる謀をすべきなれば。何事につけても。かたがた物に堪へ忍ぶべきなり。大かたこの事をたもてるを。五の徳ある人といふ。五戒十善など名づけて。よろづの罪を失ふ法とせり。一切の罪を犯すこと。物に忍ひえぬが致す處なり。この故にや。源信僧都。四十一箇條起請第十一段に。雖有不叶心事。思忍全不起。嗔恚とありければ。聖教を訪

ふも。七賢位の中に忍法位ともたて。六度の中に忍辱波羅密とも稱し。十地には堪忍地とも號し。證果をば無生忍ともいひ。釋尊をば能忍とも名づけ奉る。羅睺羅尊者は忍辱第一なり。この故にや。唐には多くの直にて。忍といふ文字を書きて。守にしたる人ありけり。しかはあれども。軒に生ひたるあだなる草までも。かゝる名を得たれば。なべてはすまじきとぞ。中にも雪山にある草を名づけて。爲忍辱草といふ文あり。かの靈草の同名に通ひぬ。尋瑞草といふ名もあれば。いかにもうちある名の類にはあらず。法師品の加刃杖瓦石念佛故應忍の文を。かの草によせて。寂念がよめる。

深き夜の窓うつ雨に音せぬはうき世を軒のしのぶなりけり
不輕品のこゝろを。江以言が詩にも。

眞如珠上塵厭禮 忍辱衣中石法縁

五郎中將の後もたのまんとよめる歌の詞もをかしく。周防内侍が。我さ

へのきのと書きつける筆跡もゆかし。花園左大臣かの草のみちにつけて。心の色をあらはし給ひけんも。やさしくればゆ。何方につけても思ひ捨てがたき草の名なり。(十訓抄)

○誠 其三

光明山といふ山寺に。老尼ありけり。いかなるにや。日吉つきなやまし給ひて。さまざま託宣ども聞えける時。或僧來あひて。尼の身にうちあはす。心つきなく覺えけるうへ。奈良の方には。山王いと崇め奉らぬ習ひにて。試むと思ひて。この尼に向ひていふやう。誠に大明神顯れ給ふならば。我申さん事計ひのたまはせよ。我極樂を願ふ志深く侍り。いづれの行か必ず往生の業となり侍るべき。この事凡夫闇き心に計ひがたくなん侍ると申す。尼いふやう。汝我を試みんとする志。あさましけれども。なほざり。にても往生の業とて問はんこと。いかでか教へざらん。所詮は行は何にてもあれ。衆生の宿執さまざまなれば。佛の御教もまたさまざまなり。い

づれもおろかならす。さしてその事と定めがたし。信をいたし功をつむぞ貴かるべき。但この事に。何の行にも必ず具すべきこと二つあり。信すべきならば。いはんどのたまへば。この僧思ふやう。いかばかりの事か。はと。等閑がてらに。いひ出でたりつるを。かくげにくしく計ひの給はするに。貴くなりて。我本より西方の行者なり。早く承りて深く信すべしと申す。重ねてをしへ給ふ。二の事といふは。慈悲と質直となり。是を具せざれば。何の行を勤むとも。往生を遂ぐる事極めて難しとのたまふ。僧掌を合せて。この二を具せんこと難く侍り。いかゞ仕らんと申しければ。二つ具せん事猶かたくば。せめて慈悲はれろそかなりとも。質直ならんと思へる心。うるはしからずして。淨土に生ること。いかにもあるまじとぞ仰せられける。故に維摩經には。質直是淨土也と説き。法華經には。柔和質直者とも。又質直意柔軟とも。のべて。心うるはしからんもの佛を見奉るべきよし。壽量品の幾程ならぬ偈の中。二所までをしへ給へり。又八幡大